

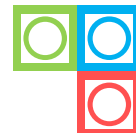
特別な教育的支援を必要とする
児童生徒のための道徳教育

はじめてガイドブック



茨城県教育研修センター 特別支援教育課

はじめに



これからの時代を生きる子供たちは、様々な価値観や言語、文化を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きていくことが今まで以上に重要となっており、社会を構成する主体である一人一人が、高い倫理観をもち、人間としての生き方や社会の在り方について、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら考え、他者と対話し協働しながら、よりよい方向を模索し続けるために必要な資質・能力を備えることが求められています。その中で、グローバル化及び情報化の急速な進展の中で、様々な価値観が交錯する社会を見据えたときに、人としてよりよく生きるための基盤となる道徳性を養っていくことが一層重要な課題となってきます。そして、社会問題になっているいじめ防止の観点からも、社会性や規範意識、善悪を判断する力、思いやりや弱者へのいたわりなどの豊かな心を育む道徳教育の充実がより一層求められています。

こうした中で、平成27年3月27日に学習指導要領が一部改正され、昭和33年以降実施されてきた道徳の時間が、「特別の教科 道徳」（以下、「道徳科」という。）として位置づけられ、平成30年度から小学校、平成31年度（令和元年度）から中学校において、先行して全面実施を迎えました。特別支援学校においても、道徳科は他の教科等に先立ち、平成30年度から小学部、平成31年度から中学部において全面実施となり、さらに知的障害特別支援学校の高等部においては、道徳科が教育課程に位置付けられ、令和2年度から全面実施されました。

この「はじめてガイドブック」は、道徳の指導の基本やプロセス等を小・中学校、特別支援学校の先生向けに解説した冊子です。道徳教育を進める上での基本や考え方、道徳科の授業づくりのポイント、多様な指導方法の工夫、そして評価の仕方について等、先生方の疑問や悩みに寄り添いながら、個性豊かなキャラクターたちが、分かりやすく解説していくQ&A形式で構成しました。

各学校におかれましては、道徳科を要として、教育活動全体で行う道徳教育の一層の充実に向け、ぜひ、多くの先生方に手に取っていただき、よりよい指導が子供たちに届くきっかけになれば、とてもうれしいです。

茨城県教育研修センター 特別支援教育課



自己紹介

モラル博士

博士のモラルです。
道徳に関するみんなの疑問について、
一緒に考えていこうと思います。



缶がえる



道徳について一緒に「かんがえる」ゲコ。

新任の先生たち

今年採用された教員です。
道徳について、教えてください！



ベテランの先生たち



モラル博士と一緒に
よりよい道徳について考えていこう。

クラスの子供たち

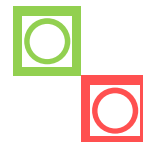


楽しく道徳がやりたいな！



キャラクターデザイン
特別支援教育課 主査 大沢 靖司

目次



はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・ [LINK](#)  1

1. 道徳教育と道徳科の基本・・・・・・・・・・ [LINK](#)  6

- ・道徳教育の基本
- ・道徳科の基本
- ・道徳科の評価
- ・道徳科の授業づくり

2. 特別な教育的支援を必要とする児童生徒の道徳教育・・・・ [LINK](#)  24

- ・小・中学校における特別な教育的支援を必要とする児童生徒の道徳教育
- ・特別支援学校における児童生徒の道徳教育

3. 道徳科に生かす指導方法の工夫・・・・・・・・・・ [LINK](#)  42

- ・教材を提示する工夫
- ・発問の工夫
- ・話合いの工夫
- ・書く活動の工夫
- ・動作化、役割演技など表現活動の工夫
- ・板書を生かす工夫
- ・説話の工夫
- ・学校行事と関連付けた工夫
- ・指導形態の工夫
- ・各教科等と関連付けた指導の工夫
- ・ICT を活用した思考を促すための工夫



4. 教えて!道徳 Q&A・・・・・・・・・・・・・・・・・・ [LINK](#)  70



データでご覧になっている方は、 [LINK](#)  マークの先をクリックするとそちらのページまで一気にジャンプできます。

5. 実践事例集・・・・・・・・・・・・・・・・LINK▶▶▶

76

・実践事例集を読むに当たって

・実践例1・2 小学校 自閉症・情緒障害特別支援学級

LINK▶▶▶ 「自作教材を活用した道徳科の実践」

・実践例3・4 小学校 通常の学級

LINK▶▶▶ 「ICT 機器と思考ツールを活用した道徳科の実践」

・実践例5・6 小学校 自閉症・情緒障害特別支援学級

LINK▶▶▶ 「小学校低学年における体験的な活動と関連付けた道徳科の実践」

・実践例7・8 中学校 自閉症・情緒障害特別支援学級

LINK▶▶▶ 「異学年の学習形態を取り入れた道徳科の実践」

・実践例9・10 中学校 交流学級

LINK▶▶▶ 「交流及び共同学習におけるチーム・ティーチングによる道徳科の実践」

・実践例11・12 肢体不自由特別支援学校 中学部 準ずる教育課程

LINK▶▶▶ 「準ずる教育課程における、対話的学びを深めるための

ICT を活用した遠隔型合同授業の実践」

・実践例13・14 知的障害特別支援学校 小学部

LINK▶▶▶ 「自立活動と関連付けた道徳科の実践」

～道徳科と自立活動を合わせた4時間パッケージ授業を通して～

・実践例15・16 知的障害特別支援学校 小学部

LINK▶▶▶ 「パッケージ型（他の教科等や行事と合わせた単元設定）で

具体的な指導内容、体験的な学習活動を中心とした道徳科の授業」

※交流及び共同学習を行う通常の学級を「交流学級」と表記する。

巻末資料・・・・・・・・・・・・・・・・LINK▶▶▶

169

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・LINK▶▶▶

171

コラム 「どうする道徳」（実践者から）

・道徳「ここが困った!」コーナー

・子供の心を引き付けた!そんな場面をピックアップ!!

・こんなところで道徳科の成果が出た!エピソード

・こんな学校行事がチャンス!

・次にやってみたい!私の道徳アイデア!

・私の道徳失敗談

・「こうだったらいいのにな・・・」(子供の声)



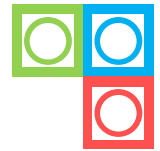


1. 道徳教育と 道徳科の**基本**

ここでは、まず道徳教育や道徳科の基本について学んでいくとしましょう。



道徳教育の基本



モラール博士！

近年、道徳教育について注目が集まっていますが、
そもそも道徳教育って何を教えるものなのですか？

それは、大事なところだから、しっかり押さえておきたいで
すね……。道徳教育の目標について、小学校学習指導要
領には、次のように書かれています。



道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己（人
間として）の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共により
よく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とすること。 ※（ ）内は中学校

【小学校学習指導要領解説 総則編 26 ページ参照】

【中学校学習指導要領解説 総則編 26 ページ参照】

道徳教育の目標は「**道徳性を養うこと**」だと言えそうですね。



「道徳性」ですか……

あの……ここで養う「**道徳性**」って、何ですか？

「道徳性」とは、人間としてよりよく生きるための営み
を支える基盤となるものであり、人間としての本来的な在
り方やよりよい生き方を目指して行われる道徳的行動を可能に
する人格的特性であり、人格の基盤をなすものなのです。





よりよく生きる…？ ちょっと分かりづらいのですが…？
「道徳性」とは、具体的にどのような力をつけることなのですか？

では、道徳性の定義について、次のように
書かれているので確認してみましょう。



道徳性とは、人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり、道徳性を構成する諸様相である道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲と態度を養うことを求めている。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 20 ページ参照】

【中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 17 ページ参照】



「道徳性を構成する諸様相」…？

「道徳性」は、**4つの様相**によって構成されていますよね。



「道徳性」というのは、下記の4つの様相で構成されており、**道徳的価値**を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような「**内面的資質**」を意味しています。

ですが、実践意欲と態度は、道徳的行為そのものと誤解されやすい
ため、決して行為として表れる部分ではなく、心の中の部分である
ということをしっかり押さえておくことが必要です。

<道徳的判断力>

それぞれの場面で善悪を判断する能力

<道徳的心情>

道徳的価値の大切さを感じ取り、善を行うことを喜び、悪を憎む感情

<道徳的实践意欲>

道徳的判断力や道徳的心情を基盤とし道徳的価値を実現しようとする意志の働き

<道徳的態度>

道徳的判断力や道徳的心情に裏付けられた具体的な道徳的行為への身構え



今、お話の中で出ていた
「**道徳的価値**」とは何ですか？



「**道徳的価値**」とは、よりよく生きるために必要とされるものであり、人間としての在り方や生き方の礎となるものです。この**道徳的価値の「理解」**がとても大切になってきます。その理解には、次の三つの理解が必要になるので、一緒に見ていきましょう。



<価値理解>

人間としてよりよく生きる上で、道徳的価値は大切なことであるというこの理解

<人間理解>

道徳的価値は大切であっても、なかなか実現することができない人間の弱さなどの理解

<他者理解>

道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方、考え方は多様であるということを前提とした理解

この三つの理解があって、初めて道徳的価値の理解と言います。道徳的価値のよさは分かっているながらも、なかなか実現するのが難しい人間の弱さの理解や、どのように感じたり考えたりしているか人によって異なるからこそ、他者を理解することは大切なのです。



確かに、正しいと分かっているけど、なかなか行動に移せなかったり、躊躇したりすることもありますね。
正解が一つとも限らないですし……



気を付けなくてはいけないのは、特定の道徳的価値を絶対的なものとして指導したり、道徳的価値のよさや大切さを観念的に理解させたりする学習に終始しないようにすることです。

道徳科の基本



モラル博士！

道徳教育と道徳科って何がどう違うのですか？

道徳教育は学校の教育活動全体を通して行う道徳指導のことであり、各教科、特別活動、総合的な学習の時間で指導するようになっています。一方、道徳科は授業としての道徳科のことであり、道徳教育の要として指導することが大切です。



学校における道徳教育は、特別の教科である道徳（以下「道徳科」という。）を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童（生徒）の発達の段階を考慮して、適切な指導を行うこと。

【小学校学習指導要領解説 総則編 25 ページ参照】

【中学校学習指導要領解説 総則編 25 ページ参照】



「道徳科を要として」とは、どういうことですか？

道徳性というのは、道徳科の授業だけでなく、全ての教育活動で養えるものです。ですから、全教育活動を通じて道徳性を養うというのが道徳教育であり、年間を通して行う道徳科がその要として、つまり道徳教育の中心的な役割を担うものとして位置付けられているわけです。





モラル博士！先ほどの道德教育の目標と、この道德科の目標と同じところや違うところを確認したいのですが…。

第1章総則の第1の2の(2)に示す道德教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道德性を養うため、道德的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己(人間として)の生き方についての考えを深める学習を通して、道德的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道德編 16 ページ参照】

【中学校学習指導要領解説 特別の教科道德編 13 ページ参照】

道德科の目標においても、道德教育の目標と同じく、
「道德性を養う」ことについて示されていますね。



そのとおり!道德教育の目標も、道德科の目標も「よりよく生きるための基盤となる道德性を養う」ことを目標としています。

コラム こんなところで道德科の成果が出た!エピソード その1

修学旅行に持って行くお小遣いの金額について、学級活動で話し合いをしたとき。担任から金額の上限は提示したが、その範囲内でいくらにするかを話し合いで自由に決めた。その金額がいいという理由に、「親からもらうお金だから大切にしないではいけない。〇〇円で十分。」「試しに買いたいお土産の値段を調べて計算したら〇〇円で足りる。」など、【節度、節制】の視点で理由を発表していた。また、「お世話になっている△△にお土産を買ってあげたいから〇〇円は必要。」など【親切、思いやり】【感謝】の視点からの理由も挙がった。話し合いの終わりでは、「みんなで話し合いで決めた金額だから、きちんと守ろう。」という【規則の尊重】の意識が高まった。

小学校教員

どうする道德



さて、「道徳性」を養うために、道徳科では、どのような内容を取り扱うのか。みなさんにご存じですか？それは、下記のように4つの道徳的価値に分けて整理されています。



- A 主として自分自身に関すること
- B 主として人との関わりに関すること
- C 主として集団や社会との関わりに関すること
- D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

これら4つの道徳的価値は「**内容項目**」として整理され、小学校低学年、中学年、高学年、中学校という発達の段階を考慮して設定されています。



A 主として自分自身に関すること

[善悪の判断、自律、自由と責任] [正直、誠実] [節度、節制] [個性の伸長]
[希望と勇気、努力と強い意志] [真理の探究]

B 主として人との関わりに関すること

[親切、思いやり] [感謝] [礼儀] [友情、信頼] [相互理解、寛容]

C 主として集団や社会との関わりに関すること

[規則の尊重] [公正、公平、社会正義] [勤労、公共の精神] [家族愛、家庭生活の充実]
[よりよい学校生活、集団生活の充実] [伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度]
[国際理解、国際親善]

D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

[生命の尊さ] [自然愛護] [感動、畏敬の念] [よりよく生きる喜び]



こんなにたくさん!?道徳科の授業では、この内容項目を全て指導しなくてはいけないのですか？

そうです。道徳科の授業では、一年間で該当する学年段階で必ず**全ての内容項目について指導する**こととしています。

ちなみに、小学校低学年が19項目、中学年20項目、高学年と中学校が22項目となっています。詳しくは巻末資料を参照してください。





道徳の授業は今までもやってきましたが、今回の改訂によって、私たちはどのように道徳科の指導を考えていけばよいのでしょうか…？

今回の改訂に至るにあたって、これまでの道徳の授業の課題としては、下記のようなものが指摘されていました。



NG な道徳科の指導

■読み物教材の登場人物の心情理解のみに終始する授業

例)「この登場人物のこの場面でどんなことを考えていたのでしょうか。」(ここから先の発問がない)

■単なる知識の教え込みに終始した授業

例)「障害を理由とする不当な差別は障害者差別解消法で禁じています。」

例)「誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会を実現しましょう。」

■行為の仕方そのものを指導し、行為ができるようになることを目的にした授業

例)「人に会ったら挨拶をしよう」→できることを目的とした生活科の内容になっている。

■特定の考え方や価値観を押し付けるような授業

例「木を切ることは自然破壊になるのでやめよう」

「嘘をつくことは絶対にダメな事です」



私も、ここに書かれているような道徳の授業をやったことがあります。どこが、まずかったのでしょうか…。

大事なことは、何を子供たちに考えさせ、何を議論させるかということで、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の子供たちが自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」へと質的転換を図ることがポイントとなってくることです。



缶がえる？



道徳科の特質を生かすことに効果があると判断した場合には、多様な方法を活用して 授業を構想することが大切です。**問題解決的な学習**や**体験的な学習**は、あくまで多様にある方法の中からの例示であり、指導方法を明確に類型化するものではないので、効果的な方法を計画する上での参考にしていただきたい。



<問題解決的な学習>

児童生徒の考えの根拠を問う発問や、問題場面を自分に当てはめて考えてみることを促す発問などを通して、問題場面における道徳的価値の意味を考えられるような学習。

<道徳的行為に関する体験的な学習>

疑似体験的な活動（役割演技など）を通して、実際の問題場面を実感を伴って理解することで、様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うような学習。

<読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習>

教材の登場人物の判断と心情を自分との関わりにおいて多面的・多角的に考えることを通して、道徳的価値の理解を深めるような学習。



なるほど・・・いかに自分に当てはめて、自分事として考えられるかというのもポイントになってきそうですね。

コラム 次にやってみたい!私の道徳アイデア!

どうする道徳



重度の障害のある児童生徒に対して、道徳科としてのねらいをしっかりと押さえつつ、子供たちが好きな、ゲームや遊び、食に関する活動などを活動の中心にした授業をやってみたい。子どもたちも私たち教員も楽しかったな、よかったなと思えるような授業がいい。

特別支援学校教員

道徳科の評価



道徳科は、**評価**が難しいと聞いているのですが…。

確かにそうですね。評価として、どんなところを見取って、どのように表記すればよいのか、難しいと思うことがあります。学習指導要領では、道徳科の評価について、どのように示されているのでしょうか。



児童（生徒）の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 107 ページ参照】

【中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 109 ページ参照】



なぜ、数値などによる評価を行わないのですか？

道徳科が目指す道徳性は、人格的特性であり、内面的な資質です。このような**道徳性が養われたか否かは、容易に判断できるものではなく、点数や「○×」などで表すことはできません。**道徳科では、児童生徒の成長を見守り、努力を認めたり、励ましたりすることによって、児童生徒が自らの成長を実感し、更に意欲的に取り組もうとするきっかけになるような評価を目指すことが求められます。



個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすることや、他の児童（生徒）との比較による評価ではなく、児童（生徒）がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として記述式で行うことが求められる。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 110 ページ参照】

【中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 112 ページ参照】



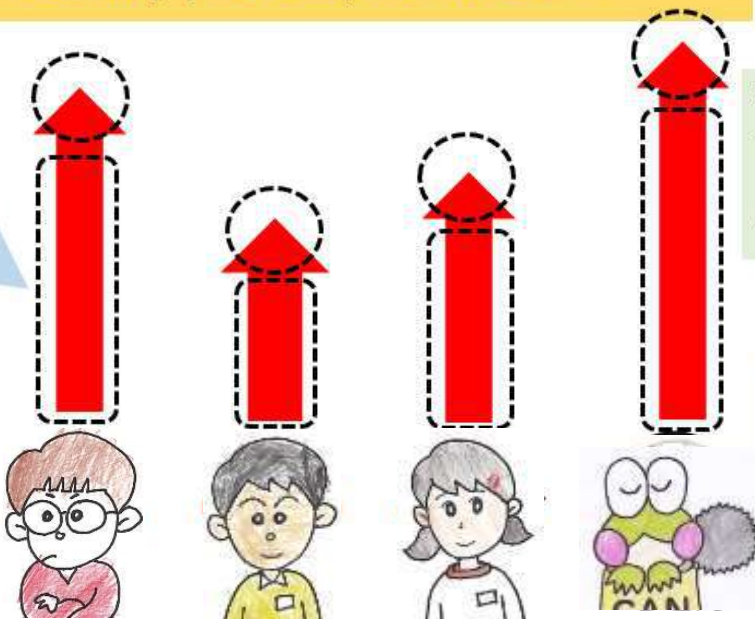
観点別評価ではなく、**個人内評価**なのですね？

そのとおりです。児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子はそれぞれ違うのわけです。その違いを比較して優劣を決める評価ではなく、児童生徒一人一人が、いかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます評価をしていくことが個人内評価の基本です。



道徳科の授業のねらい

評価するのは子どもの学習状況



ねらいは設定するが、そのねらいをゴールとした児童生徒の評価は行わない。

個人内評価として、一人一人の良さを認めて評価をする。

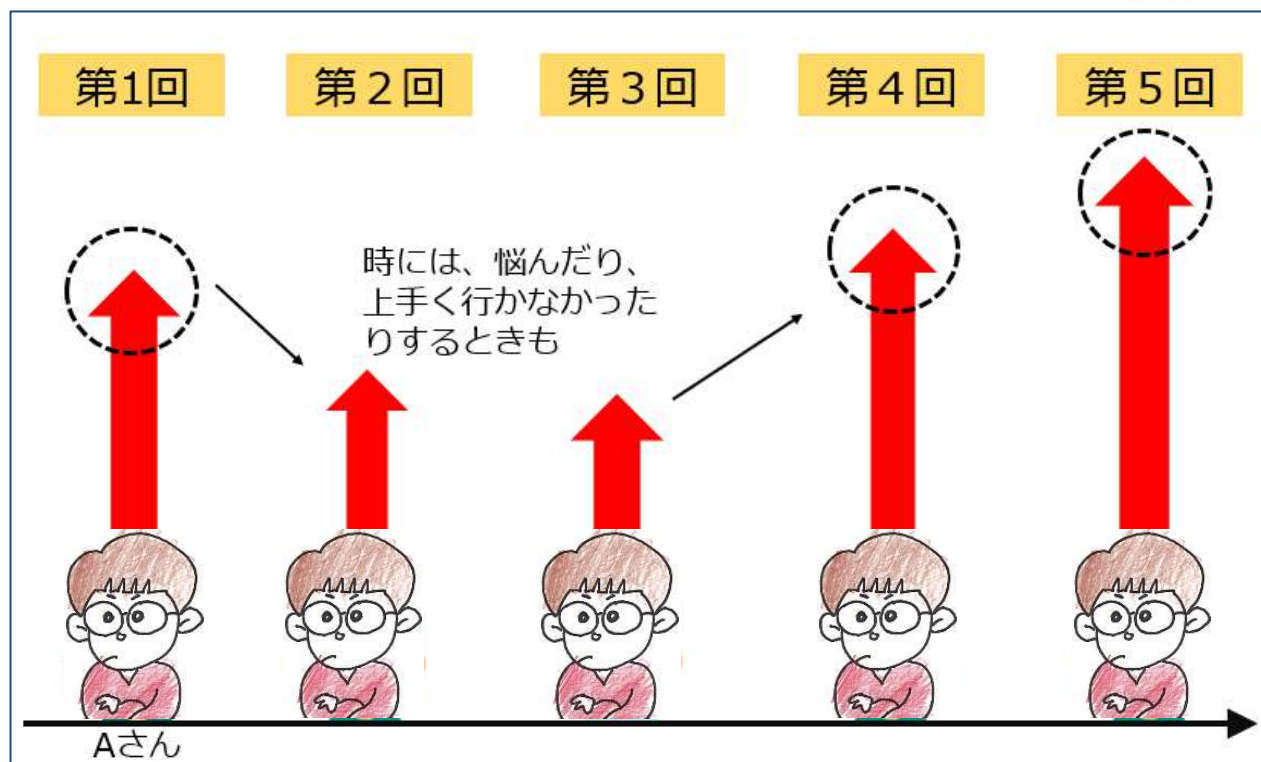
教師は、ねらいを設定して授業をしていますが、児童生徒のねらいの達成度を評価するわけではないのですね。



なるほど……。でも、たった 45 分 (50 分) の中で、子供の心の変化を見取れるのかどうか、ちょっと心配ですね。



その心配ももっともですね。だから、道徳科は、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握することが基本となります。一つの授業をもって評価するのではなく、児童生徒の成長を継続的に見取ることが大切です。



評価をする際は、

「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているか」

例えば、自分と違う立場や感じ方、考え方について理解しようとしているか…

「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」

例えば、読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしているか…

などがポイントとなってきます。



道徳科の授業づくり

では、実際に道徳科の授業づくりをする際に、どのような手順を踏みながら進めていくことが大事なのか確認していきましょう。



① 指導の意図（ねらい）をもつ

- ・ 年間指導計画を基に、指導の内容や教師の指導の意図を明らかにする。
- ・ ねらいに関する児童生徒や学級の実態と、各教科等での指導との関連を検討して、指導の要点を明確にする。

② 教材を吟味する

- ・ 教科用図書や副読本等の教材について、授業者が児童生徒に考えてほしい道徳的価値に関わる事項がどのように含まれているかを検討する。

教材を読み（確認し）、場面を押さえる

ねらいとする道徳的価値について、子供が深く考えることができる場面を明確にする

児童生徒の実態に応じた指導方法の工夫を検討する

③ 学習指導過程を構想する

- ・ ねらい、児童生徒の実態、教材の内容などを基に、授業全体の展開について考える。その際、児童生徒がどのような問題意識をもって学習に臨み、ねらいとする道徳的価値を理解し、自己を見つめ、多様な感じ方や考え方によって学び合うことができるのかを具体的に予想しながら授業全体の展開を構想する。

① 指導の意図（ねらい）をもつ

授業づくりの際に確認すること

- ①学校の重点内容項目、年間指導計画
- ②内容項目に対する指導者の明確な考え
- ③内容項目に対する児童生徒の実態把握
- ④指導者のねらい、児童生徒の実態に基づく教材選定

指導者の明確な考え、児童生徒の実態把握、それらに基づく教材を確認することで、授業のねらいが明確になり、児童生徒の道徳的価値の理解につながる授業になっていきます。

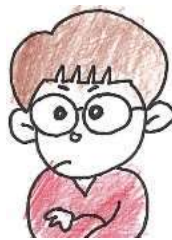


内容項目に対する児童生徒の実態把握

特にどれを育てる??

道徳的
心情

道徳的
判断力



道徳的
実践意欲

道徳的
態度

例えば・・「きまりを守ること」について子供たちはどのような実態??



例えば、きまりは生活の自由を制限するもので肯定的に受け止められていないのであれば・・



きまりを守ることによってみんなが気持ちよく生活できるようになることに気付かせ、社会のきまりを守ろうとする**心情**を育てる



例えば、周囲に目が向けられず、自己中心的な言動により、きまりが守られていないのであれば・・



きまりの意義を理解し、みんなのことや周りの状況を考え、きまりを守ろうとする**判断力**を育てる



なるほど……。その授業で子供たちに育てようとする道徳性の様相を意識することが大事なんですね。

そのためには、やはり**子供の実態把握**は大切ですね。



② 教材を吟味する

どのようにして道徳的価値の理解を深めるか？
ねらいとする道徳的価値について、理解を深める場面はどこか？

教師が子供たちに考えさせたい道徳的価値に関わる事項が教材の中に
「どのように含まれているのか」検討することが大事です。



例) 教材「折れたタワー」について

本教材は、児童の日常生活においてありそうな場面が描かれている。ひろしは給食当番でマスクを忘れたことを、のりおに強く責められる。数日後、のりおに一生懸命作った作品を壊されてしまう。ひろしは悔しい思いをするが、のりおの故意ではない失敗を許す、という内容である。児童の実態についての事前アンケートで「状況によって許すか許せないか迷う」と答えた児童が多くいたが、本教材では、まさに児童が迷いそうな場面が描かれている。授業の展開後半では話合いを取り入れ、自分とは異なる意見を聞き、多面的・多角的に考えられるようにしたい。話合いで出た児童の発言をつながながら、本教材を通して、人間は誰でも失敗をしてしまうことがあるということに気付かせ、広い心で相手の過ちを許す心情や態度を育てていきたい。

児童にどのようなことを考えさせるのか、また、どのような工夫をするのか具体的に検討されている。教師が明確な指導観をもって授業に向かう姿勢が表れている。

子供たちが「自分事として」考えるためには、身近で見つけた
さりげない良い場面や学校行事での一場面なども
効果的な教材となることもあります。そのため、児童生徒の発達
の段階や特性によっては、多様な教材の活用にも努めることも大
切です。



昔から
語り継がれる
名作

身近な
出来事

タイムリーな
社会的問題

著名な人の
名言

いじめや
情報モラル

③ 学習指導過程を構想する

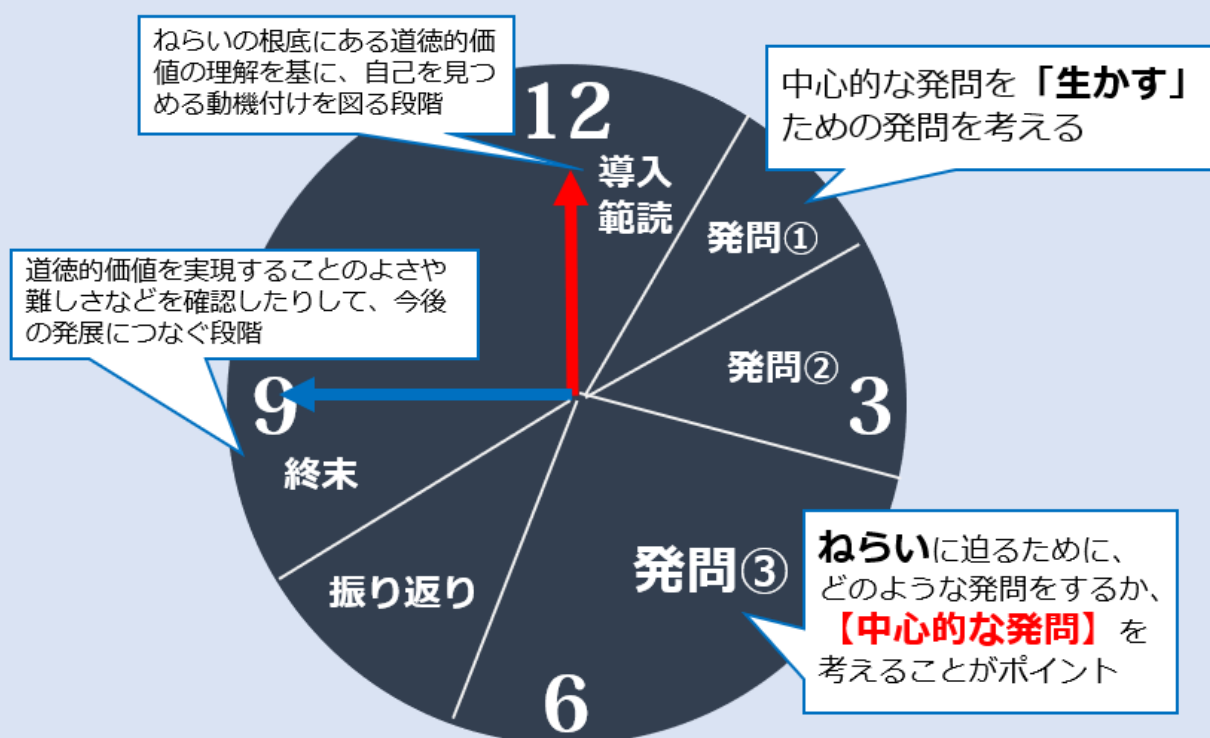
授業の進め方については、**導入⇒展開⇒終末**という展開が基本です。ねらいに迫るための「**中心的な発問**」を軸にそれを生かす「基本発問」や、導入・終末の工夫を構想しましょう。



	役割	ポイント
導入	ねらいの根底にある道徳的価値の理解を基に、自己を見つめる動機付けを図る段階	本時の主題に関わる問題意識や、興味・関心をもつことができるように工夫する。
展開	中心的な教材によって、児童生徒一人一人が、物事を多面的・多角的に考える活動を通して、自己を見つめる段階	中心発問を軸に進めてく。児童生徒一人一人の感じ方や考え方を生かしつつ、物事を多面的・多角的に考えたり、自分との関わりで理解したり、自己を見つめたりできるように留意する。
終末	道徳的価値を実現することのよさや難しさなどを確認したりして、今後の発展につなぐ段階	学習を通して考えたことや新たに分かったことを確かめたり、これからへの思いや課題について考えたりする学習活動を行う。

基本発問：その授業の流れを作る骨格となるような発問のこと

中心発問：その発問の中でも特に時間をかけてじっくりと考える発問のこと



学習指導過程の例

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点 ④評価
導入	1 自分が苦手だなと思っているものについて話し合う。 ○自分が苦手だと思っているものは何ですか。	・習字。 ・持久走。 ・水泳。	・やっているときの気持ちも聞き出す。
展開	2 教材「発表会には出たくない」を聞いて話し合う。 (1)けんじの言動が自分と同じだと思ったところに、あるあるマークを付ける。 (2)けんじのお面をかぶり役割演技を行い、先生に注意された場面のけんじの気持ちを考える。 ○「指が動いていない人は、見えますよ。」と言われたとき、練習を続けたとき、けんじは、どんな気持ちだったでしょう。 (3)授業中、友達と会話する役割演技を通して、ともにのりに対するけんじの気持ちを考える。 ◎「ぼくは…いっしょに出たいな。」と言われたけんじは、どんなことを考えていたでしょう。 (4)ふとんに入ってから2人の言葉を思い返しているけんじの絵に向かって、アドバイスをする。	・ぼくといっしょだな。 ・速くてついていけないよね。 ・自分も言われるよ。 Point 【基本発問】 子供が考え始めるきっかけとなる発問。中心発問が生きるように工夫をする ・はれている。 ・できないものはできない。 ・速すぎるよ。 ・周りの音が大きすぎる。 ・もうやりたくないなあ。	物の吹き出しに注目して話を聞くように伝え、内容を捉えやすくすると共に、登場人物の気持ちを考えるよう助言する。 ・けんじと自分の似ているところを見つけてマークを貼る活動を通し、けんじに寄り添って気持ちを考えることができるようにする。 ・お面を付けて楽しい雰囲気の中で順番に役割演技をすることで、発表に対する抵抗を軽減する。 ・友達役の先生と会話する中で、不安感はあるけれどもあることに気付くようにする。 「なんとしても休みたい。」という気持ちしか出ない場合も受け入れ、「なぜそう思うのか。」「どうしたら出られそうなのか。」と切り返し、不安の原因があることに気付くようにする。
	3 自分のことを振り返る。 (1)振り返りシートのチェックリストに自己評価することで、自分の生活を振り返る。 ○自分は、けんじに教えてあげたことができていたかな。	Point 【評価】 子供の成長を積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として見取る ・頑張ろうかな。 ・そういわれても、やっぱり休みたい。 ・どうしたらいいか判らない。 ・困っていることを先生に相談した方がいいよ。 ・練習を一緒にやってくれる	④けんじの解決策を考慮することで、自分自身に不安があっても周りの人に協力を求めながらよりよく生活しようとする大切さを考えている。
	4 日常生活を疑似体験するカードゲームで苦手に出会ったときの生活について考えながら、交流遊びをする。 ○「いいね！カードゲーム」をしましょう。	・た。 ・片付けを後回しにしたらいポイントだったな。	ちの話合いから出されたよくみられる問題場面を質問にし、それぞれに示される2種類の解答から答えを選択しポイントを獲得する。子どもには自分のことを振り返るよう促す。
終末		Point 【終末】 道徳的価値を実現することのよさや難しさを確認する	

学習指導過程を構想する際は、ねらい、児童生徒の実態、教材の内容などを基に、授業全体の展開について考えることが大切です。その際、児童生徒がどのような問題意識をもって学習に臨み、ねらいとする道徳的価値を理解し、自己を見つめ、多様な感じ方や考え方によって学び合うことができるのかを具体的に予想しながら、それらが効果的になされるための授業全体の展開を構想することが大切です。



どうする道徳

コラム 道徳「ここが困った!」コーナー その1

私の担任する特別支援学級に在籍する児童は、1・2・3・5年生。異学年での授業は教科書教材でぴったりの教材文を見つけ出すのは難しい。採択教科書は、もう授業でやったか、これからやる予定なので新鮮さを守るためには使いづらい。「短時間で内容が分かりやすい」ものをと考えると E テレの動画、ニュース番組、4コマ漫画、新聞の切り抜き、絵本、YouTube などもいいネタに。でも夏の暑い時は、室内で過ごす時間や黙食の給食の時間の際に、E テレを流している担任の先生もいて……。 「道徳をやる前に観てないといいなあ」と思いながら教材として使うことも……。

小学校教員



2. 特別な教育的支援を必要とする 児童生徒の道德教育

道德の基本については、理解いただけましたか？

では、ここでは、特別な教育的支援を必要とする児童生徒に対して、どのような道德の取り組む方法があるか、みんなで一緒に考えていきましょう。



小・中学校における特別な教育的支援を必要とする児童生徒の道徳教育



モラル博士、普段、特別支援学級で学習している子供や、通常の学級で、特別な教育的支援を必要とする子供に対する道徳について、このような課題があるのですが・・・

- ・交流学級での道徳科の授業を実践しているが、主体的に学習に取り組めていない。
- ・教材の内容理解が難しい、興味がもてない。
- ・題材に対して、自分事として捉えることが難しい。
- ・落ち着いて話を聞いているのが難しい。
- ・みんなの前で自分の考えを発表することが難しい。
- ・他の児童生徒と同様のワークシートの活用の仕方では、書くことが難しい。

など

確かにこのようなことはよく聞かれます。では、実際に子供たちはどのように思っているのか、ちょっと心の中を覗いてみましょう。



- ・先生が色々と話をしているけど、話が長いし、難しいよ・・・
- ・なんとなくグループに入っていれば、話しているように見えるかな・・・
- ・道徳の教科書の内容が難しくて分からないんだよね・・・



- ・みんなの言ってることや考えてることがよく分からないんだよね・・・
- ・みんなの方がいい意見言っているし、別に僕の意見なんか言わなくてもいいよね
- ・ワークシートに気持ちを書くとか苦手なんだよね・・・

- ・この内容は、経験したことがないから、よく分からないな・・・
- ・交流学級だと発表しづらいな・・・間違えたらどうしよう。





なるほど・・・子供によって困り感は違いますけど、このように感じているかもしれませんよね。どうすればよいのでしょうか？

そうですね。このような子供たちに対して積極的にできることは、**まずは、その困り感に気付いて寄り添うこと**です。学習指導要領解説においては、下記の記載に注目してみましょう。



道徳科においては、発達の段階を前提としつつも、指導内容や指導方法について考える上では、個々人としての特性等から捉えられる個人差に配慮することも重要となる。児童の実態を把握し、指導内容、指導方法を決定してこそ、適切に指導を行うことが可能となる。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 11 ページ参照】

児童には、年齢相応の発達の段階があるとともに、個人差も大きいことに留意し、一人一人の感じ方や考え方を大切に授業の展開を工夫することにより、児童が現在の自分の在り方やこれからの生き方を積極的に考えられるようにする。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 79 ページ参照】

発達障害等のある児童に対する指導や評価を行う上では、それぞれの学習の過程で考えられる「困難さの状態」をしっかりと把握した上で必要な配慮が求められる。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 113 ページ参照】



つまり、**子供の発達段階や特性、困難さに応じて、指導内容、指導方法を決定して授業を展開すること**が大切なのですね。

そのとおり。このような子供たちの困り感に寄り添った学習展開をすることで、道徳的価値の理解もしやすくなり、自分のことと関連付けながら考えを深める学習につながってきます。



まず、僕たちのことを
知ってほしいな。



子供の困り感に応じた学習指導の多様な展開①

この後は、子供たちの「声」を聞きながら、道徳科の学習指導の多様な展開について考えていきましょう。



教科書を読んだだけだと、内容がよく分かんないや。



読み物教材だけだと、読むのが苦手な児童生徒もいて…
内容の理解が難しいこともあるようです。

このような困り感のある児童生徒が、話し合ったり考えたりすることができるように、「**理解しやすい教材**」を選択することがとても大切です。
その多様な形式の教材を選ぶポイントとしては、以下の点が挙げられます。



Keyword

内容が
シンプル

視覚的

身近なもの

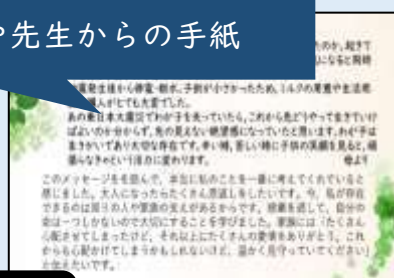
興味・関心
がもてる

(例)



紙芝居形式の教材

家族や先生からの手紙



ねらいに沿った動画教材



家族からのビデオレター



役割演技用のお面

絵や写真、動画があるとやっぱり楽しいよね。
こんな風に分かりやすい教材があるといいな。



なるほど・確かにこのような教材を選べば、意欲的に参加できそうですね。
ですが、教材として、教科用図書以外の教材を扱ってもいいんですか？

主たる教材として教科用図書を使用することとなっていますが、道德教育の
特性に鑑みれば、**多様な教材を併せて使用することも重要**です。
なお、教材が適切であることの観点として、次の3点が挙げられています。



(1) 児童の発達段階に即し、ねらいを達成するのにふさわしいものであること

(2) 人間尊重の精神にかなうものであって、悩みや葛藤等の心の揺れ、人間関係
の理解等の課題も含め、児童が深く考えることができ、人間としてよりよく生き
る喜びや勇気を与えられるものであること

(3) 多様な見方や考え方のできる事柄を取り扱う場合には、特定の見方や考え方
に偏った取扱いがなされていないものであること

教材選択の注意点としては、主題ごとに主に用いる教材は、**ねらいを達成
するために中心的な役割を担うもの**であり、**安易に変更する
ことは避けなければならない**ということです。変更する場合は、そのこ
とによって**一層効果が期待できるという判断を前提**とし、少なくと
も同一学年の他の教師や道德教育推進教師と話し合った上で、校長の了解
を得て変更することが望ましいとされています。



やっぱり僕らにとって、身近な教材の方が
イメージできるし・・分かりやすいよね・・



子供の困り感に応じた学習指導の多様な展開②



私は、こんな風に思うんだけどなあ…でも、発表は…
友達の言っていることもちょっと難しくて分からないな…



頭の中で、考えていることがあっても、みんなの前では発言しにくかったり、
友達の意見を理解するのが難しかったりすることもあるようですね。

このような困り感のある児童生徒が、自分の考えを伝えたり、他者の意見を聞いて自分に取り入れたりするためには、その児童生徒に合った「思考・表現のツール」があると効果的なことがあります。



Keyword

ICTの
活用

思考の
見える化

多様な
表現の
選択肢

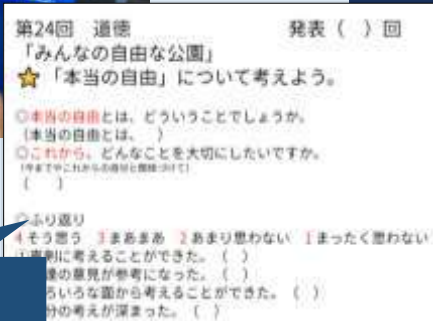
(例)

ICTを活用した思考ツール

Jamboard やロイロノート・スクールの活用



聞くことをあらかじめ示したワークシート



貼るだけで自分の考えを表現できるシール



友達の考えたことが見えるのっていいよね。
僕たちもそれを参考に考えられるな。





本人が自分の考えを整理したり、教師が学習評価をするにあたって、ワークシートに考えや感じたことを書いてもらいたいのですが、何かいい方法はありませんか。

子供が主体的に自分の考えをまとめたり、教師が子供の考えや心の揺れ動きを見取ったりする際、以下の方法も参考にしてみてください。



- ・一言だけ、メモ等に簡単に書く
- ・教材として準備した「吹き出し」に書く
- ・振り返り(感想)は、授業後にじっくりと書く
- ・子供のつぶやきや発言を教師が記録する
- ・気持ちを表すカード等を選択する
- ・子供の行動から見取る



など

書くことによって、自分の考えを振り返ることは確かに大事です。ですが、書くことにとらわれ過ぎて、子供の思いや考えをきちんと拾えないようなことがないように気を付けましょう。



どうする道徳

コラム 道徳「ここが困った!」コーナー その2

ティーム・ティーチングは、複数で生徒を支援できるというよさがある。A 先生に「道徳の授業を一緒にしませんか?」とプロポーズ!!有難いことに快く引き受けてくださった。しかし、指導案作成や授業準備等、時間の確保が大変だった。放課後、A 先生の仕事が一段落したのを見計らって声をかける。道徳的価値についての捉えや生徒の実態について共通理解を図り、教材を選定し指導案づくりを分担した。職員室後方のテーブルで、授業について2人で考え議論した。授業づくりも小さな道徳。

中学校教員

子供の困り感に応じた学習指導の多様な展開③



自分のことのように考えろって言うけど・・・やったこともないし・・・イメージできないよ。



子供たちにとって、身近でなかったり、体験したことのなかったりすることは、イメージすることができなくて、なかなか自分事として考えるのが難しいようです。

このような困り感がある児童生徒の場合、役割演技や体験的活動を通じて、その役の気持ちになったり、相手の気持ちを考えたりすることで、ねらいとする道徳的価値に気付きやすくなります。



Keyword

学校行事

劇化

日常の
体験

(例)

内容を劇化しての役割演技



実際に体験してみる活動

演技するのは、ちょっと恥ずかしいこともあるけど、やっぱり実際にやってみた方が、その時の気持ちを考えやすいな・・・



子供の困り感に応じた学習指導の多様な展開④



みんなの前で発表するのイヤだな。間違ったら恥ずかしいし。

交流学級での道徳科だと難しい時もあるんだよね・・・
特別支援学級でじっくり受けてみたいときもあるかな・・・



交流学級での道徳科だと、内容について十分に理解できない児童生徒もいます。また、たくさんの人の前では自信をもって考えを伝えられないようです。

多人数でやることで、多様な意見を聞くことができるというメリットはありますが、場合によっては、子供の微細な反応やつぶやきが拾えないこともあります。その場合、少人数でのグルーピングの工夫、指導形態の工夫によって、発言しやすい環境を作ることも大切です。



(例)

特別支援学級で道徳科の実施



少人数グループでの話し合い

特別支援学級で道徳科を実施することで、子供の実態に応じた内容の選択や進め方ができます。交流学級で実施する場合は、発言やつぶやきを拾うために、少人数グループで話し合いを設定したり、あらかじめ考えをワークシートに書いた上で発表することも考えられます。



児童生徒の実態や、道徳科の指導内容に応じて、特別支援学級で道徳科を行ったり、交流学級で道徳科を行えるといいですね。

道徳科のねらいとする内容項目によっては、下記のように自立活動と道徳科を関連付けた構成を工夫することで、より道徳的価値の理解が深まる効果が期待できます。



道徳科と関連する内容について指導

道徳科で扱った内容について自立活動で確認

特別
支援学級で
自立活動の
指導

交流学級で
道徳科の
指導

特別
支援学級で
自立活動の
指導

自立活動で学習したことを踏まえ、道徳科の指導を実施

事前に自立活動で内容について勉強してるから、交流学級での道徳科がちょっと分かりやすくなってるね。特別支援学級での振り返りもあるから確認もできるし・・・



コラム 「こうだったらいいのにな・・・」(子供の声)

「つぶやき誰か気付くかな？」

Aさん:「いつもお話をデジタル教科書で聞くけど、誰が何をしゃべったのか分からないし、話が長くて難しい。挿絵にセリフがつくか動画にしてくれれば分かるのに・・・」

Bさん:「『どこでもいいよ。名前札を貼って』は、なかなか決められない。分かりやすく二択にしてくれないかな・・・」

Cさん:「ワークシートって、どこまで書いたらいいの？書き出しが分からないよ。書き出しがあれば続きを書くけど・・・なかったら・・・白紙だ。」

Dさん:「自分の意見をみんなの前で発表するのはずかしい(*ノωノ)。オンラインかチャットなら書けるけどなあ・・・」

どうする道徳

小学校教員



特別支援学校における 児童生徒の道徳教育



モラル博士、特別支援学校では、道徳教育や道徳科の目標や内容などは、小・中学校と違うのですか？

特別支援学校の道徳教育や道徳科においても、目標は「道徳性を養う」ということに変わりはありません。また、内容や指導計画の作成と内容の取扱いについても、小学校又は中学校に「準ずる」こととしています。ですが、こちらを見てみると特別支援学校独自の項目が三つ示されているのがわかると思います。



小学部又は中学部の道徳科の目標、内容及び指導計画の作成と内容の取扱いについては、それぞれ小学校学習指導要領第3章又は中学校学習指導要領第3章に示すものに準ずるほか、次に示すところによるものとする。

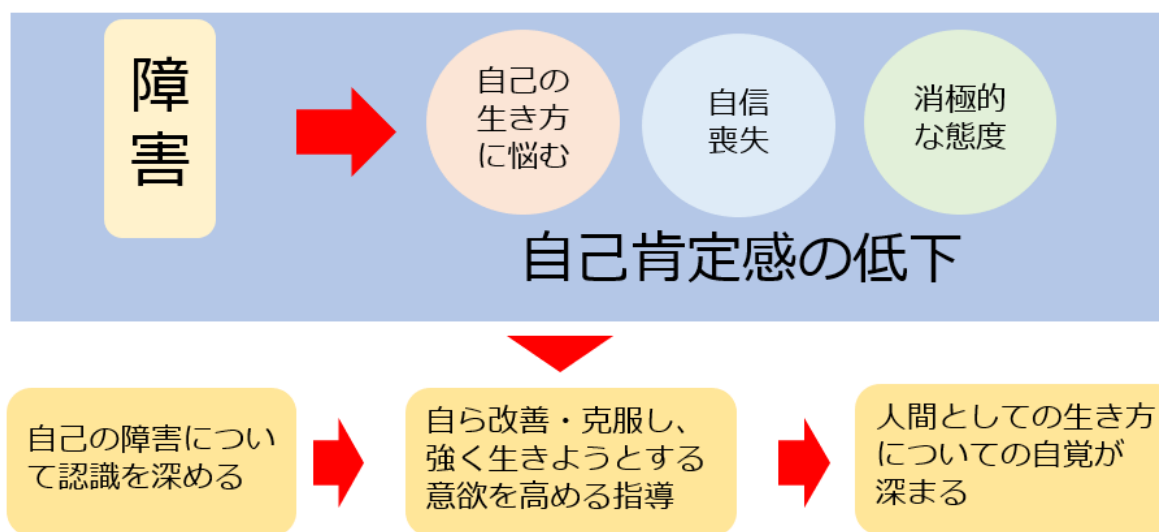
- 1 児童又は生徒の障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服して、強く生きようとする意欲を高め、明るい生活態度を養うとともに、健全な人生観の育成を図る必要があること。
- 2 各教科、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動及び自立活動との関連を密にしながら、経験の拡充を図り、豊かな道徳的心情を育て、広い視野に立って道徳的判断や行動ができるように指導する必要があること。
- 3 知的障害者である児童又は生徒に対する教育を行う特別支援学校において、内容の指導に当たっては、個々の児童又は生徒の知的障害の状態、生活年齢、学習状況及び経験等に応じて、適切に指導の重点を定め、指導内容を具体化し、体験的な活動を取り入れるなどの工夫を行うこと。

【特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編 524 ページ参照】



本当ですね。特別支援学校の道徳科では、この三つがポイントになりそうですね。モラル博士、この三つの項目について、詳しく教えてください。

1. 明るい生活態度と健全な人生観について



障害のある児童生徒は、障害があるということで、自己肯定感の低下が見られる場合があります。そのため、道徳科を含め、学校の教育活動全体を通じて、日常の様々な機会を通して指導していくことが大切です。障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲の向上については、自立活動の内容にも示されています。つまり、このことについては、道徳の指導においても十分留意する必要性について示しています。



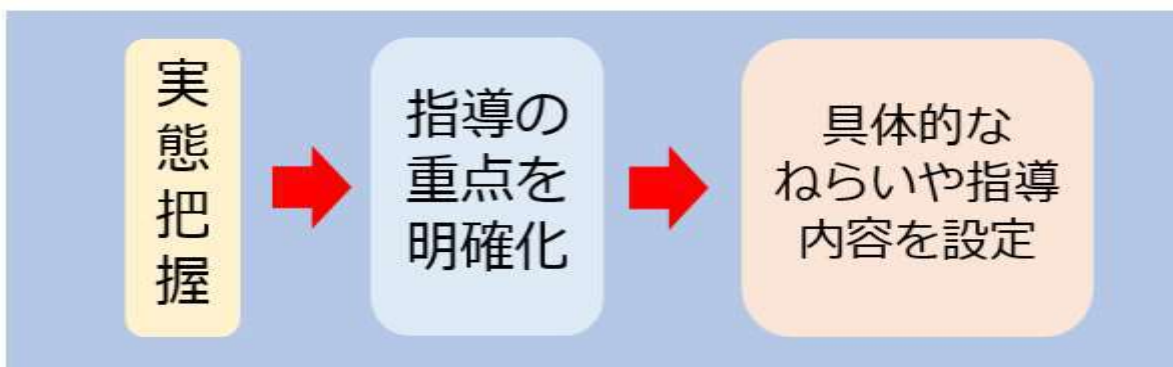
2. 各教科等との関連を密にした経験の拡充について



障害のある児童生徒は、個々の障害の状態により、結果として様々な経験の不足が課題となることがあります。道徳科における指導においても、各教科等との関連を密にしながら、経験の拡充を図ることの大切さについて示しています。



3. 指導の重点化、内容の具体化、体験的な活動について



これは、知的障害者である児童生徒に対する配慮事項ですが、障害の特性上、児童生徒の理解に基づいた、生活に結び付いた内容を具体的な活動を通して、指導することが効果的であることから、実際の体験を重視することが大切であることを示しています。



どうする道徳

コラム 子供の心を引き付けた!そんな場面をピックアップ!

「郷土愛」の学習で、茨城県を題材にして話し合い活動を行った時、導入時には、「茨城は何もないから嫌い」といったような意見を言う児童が8人中4人いた。だが、他の児童の発言を聞いたり、資料や動画で茨城の良いところを見たりしていくうちに、エピソード記憶が生きてきて「海浜公園に行ってみんなで遊んで楽しかったね」「海があって遊べるからいい」「おいしいものがたくさんあった」「土浦もいいけど水戸もいいな」などの気持ちの変化が現れ、終末時には、8人全員が茨城について「いいところがあるからいいかも」「好きになった」という意見に至った。気持ちの変化が1時間の中で見られた場面であった。

特別支援学校教員



子供の困り感に応じた学習指導の多様な展開⑤



児童生徒によっては、生活経験が少なく、多様な視点からの意見が出せない、自分の考えと異なる意見を相容れないなどといった、コミュニケーション上の課題があるのですが…

これは別に悪いことでも何でもないよね。

そんなことあるわけじゃないか！



僕はこっちが正しいと思うよ!!この考えは変わらないよ！



児童生徒によっては、善悪の正しい判断など、やっていいことと悪いことの線引きが難しい場合もあります。でも、道徳科では、教え込むのはよくないですね。

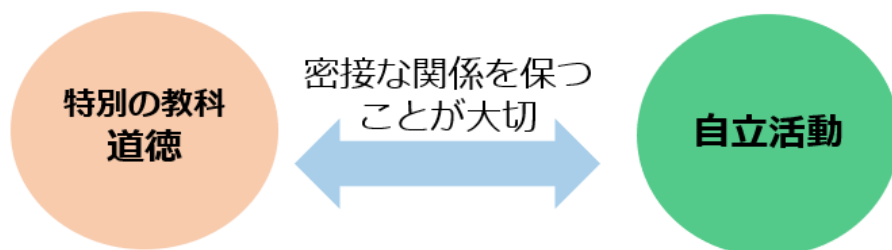
道徳科の目標はスキルの獲得ではありません。ですが、自立活動と道徳科では、目標及び内容について重なるところもあります。そのため、**自立活動と道徳科それぞれの特質**を踏まえた上で、それぞれ時間で養う力を考えることが大切です。



道徳科は、「よりよく生きるため」や「自己の生き方についての考えを深める」ことを目指して内容を定めている。

自立活動は「障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服」するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、心身の調和的発達の基盤を培うもの。

自立活動の目標及び内容と重なるところがある。



例：「友だちと助け合うこと」

B 主として人との関わりに関すること
【友情・信頼】



3 人間関係の形成
(1) 他者との関わりの方基礎に関すること

仲良く話合いやゲーム等の活動を通して、助け合うということはどういうことなのかなど、相互に関連させながら学習内容を設定する。

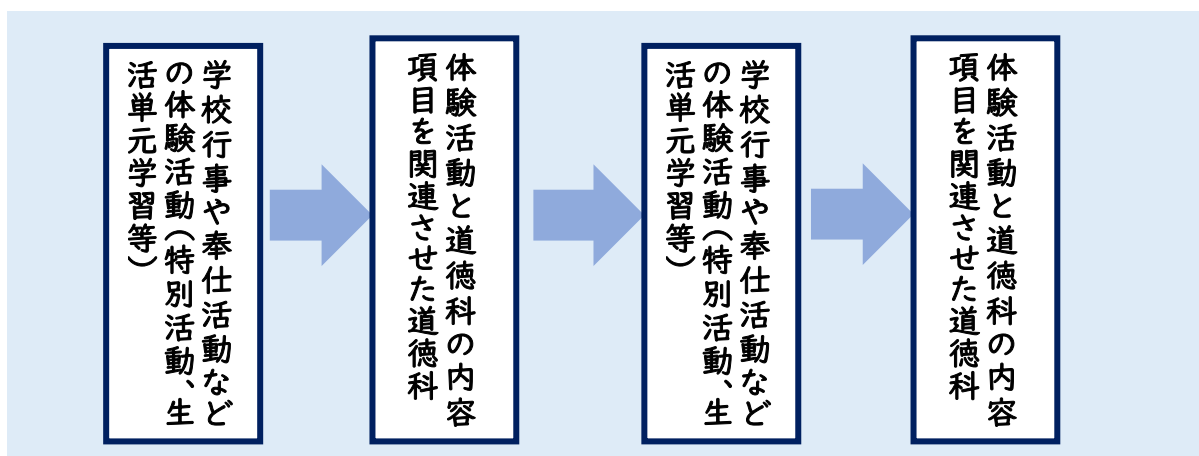
友だちを意識し働きかけたり受け止めたりという方法を学ぶ

児童生徒の実態によっては、道徳科で善悪の判断を考える前に、スキルや知識として、自立活動や各教科等で学習してから、道徳科の指導を実施することも考えられます。



学校行事や校内での奉仕活動などに関連付けてもいいですか？

そのような場合、以下のように生活単元学習や特別活動と道徳科を関連付けて、一つのパッケージのように単元を組むことが考えられます。



ねらいとする道徳科の内容項目と、学校行事などの体験活動を関連付けることで、指導の効果をあげることができそうですね。まさに、相乗効果ですね。

児童生徒の実態によっては、道徳科の一単位時間の中だけでは、道徳的価値の理解を深めることが難しいことがあります。ですが、このように体験活動と関連付けて、何度も繰り返し、自分の行為と道徳的価値について考える構成にすることで、道徳的価値を深める効果が期待できます。



自分たちが体験したことについて学習するから、分かりやすいし、考えられるかも・・・



子供の困り感に応じた学習指導の多様な展開⑥



僕は、こんな意見なんだけど、君はどうか。



私は、それやったことないから分からないよ。



学校によっては、障害の実態に応じて教育課程を分けて編成しています。その際、教育課程別のグループのメンバーが少なく、なかなか多様な意見に触れることが難しいこともあります。また、今まで体験してきたことや、経験値に差があったりするので、内容が深まっていきません。

このコロナ禍の ICT 機器の普及によって、オンラインで他の学校と連携して、道徳科を実施することも可能になりました。以下のように、ICT 機器を活用して、遠隔型合同授業を実施することで、同じ課題を抱えているグループと交流道徳ができます。



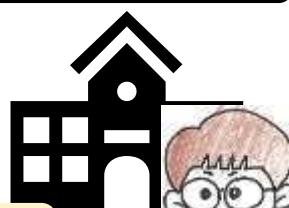
他校との遠隔型合同授業



僕も、そう思います。



私は、こう思います。



僕は、こんな意見なんだけど。

なるほど。こんな考え方もあったのか。

オンライン道徳を活用し、児童生徒の実態が同じグループが集まることで、多くの考えに触れる機会を作ることができます。異なる感じ方、考え方に触れ、協働的に議論することで、道徳的価値の理解が一層効果的に図られます。言語活動の充実を図るために、このような方法も指導の工夫の一つです。



他校の人と一緒に授業なんて・・・ちょっと緊張するな・・・でも、なんだか楽しそうだし、いろんな話ができそうだな・・・





最後にちょっとお聞きしたいのですが、障害の程度が重度の児童生徒の道徳について、なかなか変容が見取れなくて、評価するのが難しいのですが…

その場合、一人一人の障害による学習上の困難さに応じた評価の仕方の工夫が必要です。以下のように、教材で工夫したり、見る側の教師が子供の行動や発言に意味付けしていったりすることも必要です。



- ・発声のトーン、しぐさ、表情を見取る
- ・自主的に行動している様子を見取る
- ・話に聞き入ったり、考えたりしている様子を見取る
- ・様子を動画に記録して、継続的に見取る
- ・心情を表すメーターなど ICT 教材を活用して見取る
- ・ふと口にしたつぶやきをひろう



ありがとうって、うれしいね。(つぶやき)



…僕は、こっちだと思う。(心情の選択)

コラム こんな学校行事がチャンス!

どうする道徳



文化祭や運動会はもちろん、校外学習やゲストティーチャーを招く活動などは、子供たちが意欲をもって取り組むので、道徳性を養うのに絶好のチャンスだと思っている。校外での学習前に「規則の尊重」「節度、節制」のマナーや安全にまつわること、修学旅行と「感動、畏敬の念」、郷土学習と「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」など、卒業にまつわる学習で「感謝」を取り扱うのは校内でも定番になっている。また、中学部の作業学習週間や高等部の実習期間の前後で「勤労、公共の精神」や「礼儀」を扱うのも関連させやすい。高等部入試前に「個性の伸長」と関連させて面接に向けた学習を行ったこともある。

特別支援学校教員



3. 道徳科に生かす 指導方法の工夫

ここでは、子供の実態に合わせて実践した指導方法について紹介します。もっと詳しく知りたいときは、リンクが貼ってある実践事例集で詳細を見てください。

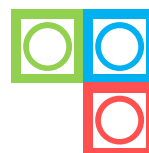


道徳科に生かす指導方法には多様なものがある。ねらいを達成するには、児童（生徒）の感性や知的な興味などに訴え、児童が問題意識をもち、主体的に考え、話し合うことができるように、ねらい、児童（生徒）の実態、教材や学習指導過程などに応じて、最も適切な指導方法を選択し、工夫して生かしていくことが必要である。

そのためには、教師自らが多様な指導方法を理解したり、コンピュータを含む多様な機器の活用方法などを身に付けたりしておくとともに、児童（生徒）の発達の段階などを捉え、指導方法を吟味した上で生かすことが重要である。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 84 ページ参照】

【中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 83 ページ参照】



教材を提示する工夫

教材を提示する方法としては、読み物教材の場合、教師による読み聞かせが一般に行われている。その際、例えば、紙芝居の形で提示したり、影絵、人形やペープサートなどを生かして劇のように提示したり、音声や音楽の効果を生かしたりする工夫などが考えられる。また、ビデオなどの映像も、提示する内容を事前に吟味した上で生かすことによって効果が高められる。

なお、多くの情報を提示することが必ずしも効果的だとは言えず、精選した情報の提示が想像を膨らませ、思考を深める上で効果的な場合もあることに留意する。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 84 ページ参照】

教材を提示する工夫①

小学校
自閉症・情緒障害特別支援学級

ねらいとする価値「個性の伸長」

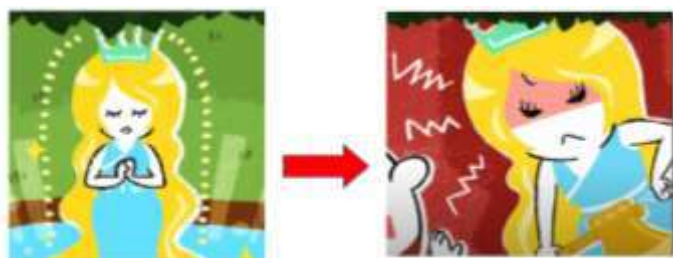
聴覚だけの情報より、視覚的な情報を併せて提示することで、児童にとって、より分かりやすくなることがある。紙芝居、お面などの活用とともに、挿絵に吹き出しを添えた教材を提示したことで、人間関係や内容がより



理解しやすくなったと、授業後の児童の感想から分かった。登場人物の言動を記憶にとどめておく負担を減らしたことで、心情について考える方により力を使えることができた。話し合いも積極的に行うことができた。

ねらいとする価値「正直、誠実」

教材を用いて授業を進めていく中で、「どんな気持ちだろう」という問いはよく出てくる。ASD（自閉スペクトラム症）の児童は、その特性から自分の気持ちを言葉にしたり、他人の気持ち



を想像したりすることが苦手な傾向にあり、その不安感から話合いの活動に参加できないことがある。

そこで、いきなり言葉で問いに答えさせるのではなく、表情に焦点をあてた挿絵を用いて、どんな気持ちなのかを確認し、安心して発言できるように工夫したことで、自分の意見を言うことができた。なお、日頃から自立活動で「表情カード」を使って、気持ちと表情について考える時間を持ち、気持ちについて考える学習を取り入れていたことも効果的であった。

LINK

実践例1、2へ

教師の語りと場面絵・フラッシュカード等を用いながらスモールステップで教材を展開していくのも効果的です。必要な情報を選んで視覚化し、共有すべき内容の焦点化を図りましょう。



教材を提示する工夫②

小学校
自閉症・情緒障害特別支援学級

ねらいとする価値「礼儀」

視覚優位の特性のある児童に対して、DVD 教材を活用した授業を行った。NHK for School の動画教材の中から「あいさつはだれのため？」を活用した。児童の発達段階や生活経験等を考慮した視覚教材を活用したことで、読み物教材での提示に比べて興味をもって内容を視聴する様子が見られ、その後の活動に生かすことができた。

また、授業終末の説話の際に、交流学級の教師が作成した児童宛てのビデオレターを活用した。毎日、教室で接している教師からのビデオレターのため、児童は目を輝かせながらビデオレターに見入っていた。視覚優位の児童に対して、映像などの視覚教材は大変効果的で、児童は「自分の気持ちを早く伝えたい」と発言し、その後の活動に生かすことができた。また、その時間と関連した自立活動の授業の際にも、同様に意欲的に取り組むことができた。自分の気持ちを伝えた後の、児童のとても満足そうな表情が印象に残っている。

LINK

実践例5へ

言葉や文章だけで教材の内容を理解することは、児童生徒の実態によっては難しいこともあります。このように写真や映像を用いて、場面のイメージを捉えやすくすることも大切です。



教材を提示する工夫③

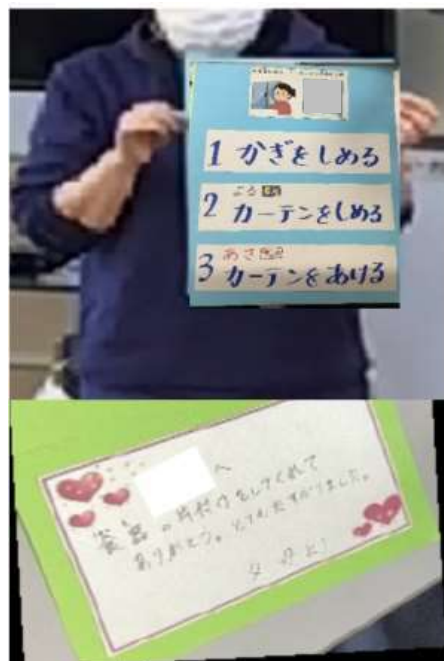
知的障害特別支援学校
小学部

ねらいとする価値「家族愛、家庭生活の充実」

言葉でのやり取りが難しく、不安定な気持ちになることが多く、行動時に頻繁に支援が必要な比較的障害の重い児童が多いグループでの学習場面において、道徳的な視点と個々の自立活動の目標、自立活動の内容と関連させた教材の設定を行った。

保護者にアンケートをとり、児童たちが取り組みやすく、日常でも実践できそうな手伝いブースを3か所設置して、作業手順や約束事を提示した。また、同じような学習場面を2回反復して行ったことで、集中を切らすことなく、児童が自ら行動したり、自分がしたい手伝いを選択して取り組むことができた。また、自ら発展的な活動をするなどの様子が見られた。

さらに、終末で保護者からの感謝の手紙を教材として使用することで、家族の感謝の気持ちに触れ、自分事として捉えて考えることができた。



LINK

実践例 13 へ

保護者にアンケートや手紙等の協力を得ながら、より子供たちの身近な場面や事柄を教材として提示することは、特に「家族愛、家庭生活の充実」の内容項目の道徳的価値を理解する際には効果的です。



コラム こんなところで道徳科の成果が出た!エピソード その2

「すがすがしい」という気持ちの学習をした次の週の朝の運動時に「今日は風が気持ちいいね」と子供たちに声をかけると「すがすがしいね」という返答をもらうことができた。授業で行った「気持ちがいい」と「すがすがしい」という言葉の意味と状況の理解ができていることが読み取れた場面だった。

どうする道徳

特別支援学校教員

発問の工夫



教師による発問は、児童が自分との関わりで道徳的価値を理解したり、自己を見つめたり、物事を多面的・多角的に考えたりするための思考や話し合いを深める上で重要である。発問によって児童の問題意識や疑問などが生み出され、多様な感じ方や考え方が引き出される。そのためにも、考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問、物事を多面的・多角的に考えたりする発問などを心掛けることが大切である。発問を構成する場合には、授業のねらいに深く関わる中心的な発問をまず考え、次にそれを生かすためにその前後の発問を考え、全体を一体的に捉えるようにするという手順が有効な場合が多い。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 84 ページ参照】

発問の工夫①

小学校
自閉症・情緒障害特別支援学級

ねらいとする価値「個性の伸長」

授業でよく使われるのは、登場人物の気持ちに共感した後に、「自分なら」と考えたり、「善いか悪いか」と考えたりしていく発問構成である。しかし、一度聞いただけの教材では、短時間で「どこで」「どのように」登場人物に共感したのか説明することが難しい児童が多い。そこで「自分も似たような思いをしたことがあるかな。」と問いかけ、場面絵にそれぞれの児童が「あるあるカード」を



貼る活動を設定することで、登場人物の心情について考えるきっかけを作った。児童の思いを確認したことで、後半の「困っている主人公にアドバイスをするとしたら、何て言おうかな。」という発問に対しても、主体的に自分の思いを主張することができた。

ねらいとする価値「うそと正直」

正直でいることは大切である。その上で授業中に「では、正直に何でも言った方がいい

いの？」と問い返すと、「相手が傷つく正直は言わない方がいいよね。」と気付く。「言い方次第で励ますこともできるから正直に言うこともあり。」と具体的に考える児童もいた。さらに「じゃ、ついてもいいうそってあるのかな？」と問うと、「うそでも相手が喜ぶならいいかな。」「自分のためにやってくれたときはがっかりさせたくない。」「ごまかすうそは絶対にだめだ。」という意見が出た。他者との関わりを想像し、多角的に考えて、学びを深めることができた。

LINK

実践例1、2へ

問い返しの発問は、子供の多面的・多角的に考えることや自分自身との関わりで考えることを活性化したり、道徳的価値の理解をより深めたりするのに有効な支援となります。



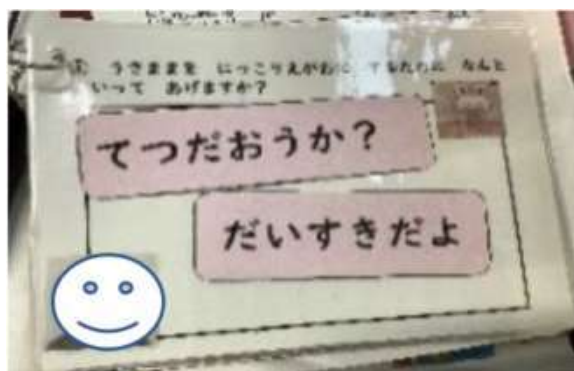
発問の工夫②

知的障害特別支援学校
小学部

ねらいとする価値「家族愛、家庭生活の充実」

言葉だけのやりとりでは、理解が難しい児童のグループでの学習において、発問の意図を理解したり、返答や行動を促すための工夫として、言葉での発問に加え、身振り手振りをつけたり、イラストカード、動画、タブレット端末を使って選択肢を選ぶようにする活動を加えた。視覚情報が加わったことで、発問で何を聞かれ、考えるのか、何をするのかが理解しやすくなり、主人公の気持ちやセリフを自分事として考えて選んだり、簡単な言葉で答えたりすることができた。

また、発問を音声として入れ込んだ動画教材を提示した際は、集中して聞くことに対して効果的な児童もあり、発問への内容理解が深まることもあった。



LINK

実践例13へ

子供の実態によっては、発問の意味が分からなかったり、発問自体を忘れてしまうことも考えられます。このように、視覚情報を一緒に提示することはもちろんのこと、身振りや手振りを加えたり、発問の内容を端的にすることも効果的です。



話し合いの工夫



話し合いは、児童相互の考えを深める中心的な学習活動であり、道徳科においても重要な役割を果たす。考えを出し合う、まとめる、比較するなどの目的に応じて効果的に話し合いが行われるよう工夫する。座席の配置を工夫したり、討議形式を進めたり、ペアでの対話やグループによる話し合いを取り入れたりするなどの工夫も望まれる。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 85 ページ参照】

話し合いの工夫①

中学校
自閉症・情緒障害特別支援学級

ねらいとする価値「公正、公平、社会主義」

話し合いをする際のグループ編成は、異学年の生徒同士が、多様な見方や考え方に触れることができるように意図的に設定することが効果的なこともある。意見が出しやすいように、2～3人の小集団にし、その中で互いの考えを伝え合い、考えを深めることができた。

自分事として話し合いができるように、教材の内容に関連して車いすの体験活動を取り入れた。体験的な活動は、教材の内容を自分事として考え、道徳的価値を理解するための引き出しとなり、生徒が体験から実感したことや、考えたことを話し合いの意見の中に反映することができた。



LINK

実践例7へ

なかなか自分の意見を言うことができないことはよくあることです。その場合、話し合いを少人数で短時間の設定から行うなど、スモールステップで進めることも大切です。



話合いの工夫②

中学校
交流学級

ねらいとする価値「生命の尊さ」

グループによる話合いを活発にするため、「議論カード」と「話合いの手引き」を活用した。「議論カード」は、主発問についての自分の考えをメモしておき、話合いの際に見ながら発言できるようにするための手立てである。「いのちって何だろう」という発問に対し、事前アンケートでは「分からない」と答えていた生徒も、「議論カード」に「親からもらった大切なもの、一つしかないもの」と記述し、友達に自分の考えを伝えることができた。相手の意見を聞き、自分の考えと比較することができるように、「◎（自分とは違うが納得する意見）、○（自分と同じ意見）、△（自分と違う意見なので質問したい）」などの記号で表すように約束を決めておいたことも効果的であった。

また、「話合いの手引き」は、副読本に綴じ込んであるものを使用した。司会者はグループ内で交代して務めたが、手引きを見ながら毎時間同じ流れて手際よく話合いを進めることができた。



「ぎろんカード」

○ 自分の考え

○ 友達 の 考え

1	2
4	5

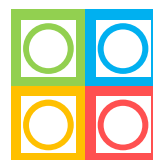
○・・・自分と同じだ
◎・・・なるほど！いいね
△・・・質問したいな

LINK

実践例9へ

相手に分かりやすく自分の考えを伝えることはなかなか難しいことですよね。その場合、このようにワークシートなどを活用して、「何を話し合うのか」を事前に伝えたり、記号で自分の今の気持ちを表したりすることも、「気持ちの見える化」となって効果的です。





書く活動の工夫

書く活動は、児童が自ら考えを深めたり、整理したりする機会として、重要な役割をもつ。この活動は必要な時間を確保することで、児童が自分自身とじっくりと向き合うことができる。また、学習の個別化を図り、児童の感じ方や考え方を捉え、個別指導を行う重要な機会にもなる。さらに、一冊のノートなどを活用することによって、児童の学習を継続的に深めていくことができ、児童の成長の記録として活用したり、評価に生かしたりすることもできる。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 85 ページ参照】

書く活動の工夫①

中学校
自閉症・情緒障害特別支援学級

ねらいとする価値「公正、公平、社会正義」

書字が苦手（発達性協調運動障害）な生徒に対して、ワークシートもしくはタブレット端末（ロイロノート）の選択肢を提示し、自分の考えの理由を記入できるようにした。それぞれの生徒に合ったツールを選択させることで、苦手意識が軽減され、自分の考えの理由を記載することができた。授業の振り返りでは、「自分が不公平だなと感じたことでも、相手の立場や状況を理解して行動していきたい」「相手の気持ちや立場を考えていきたい」「相手のことを理解して、尊重することが大切だと感じた」など、自分の考えを明確に書いた記述があった。



LINK

実践例7へ

生徒にとって「書くこと」は「考えること」であるとも言えます。生徒の実態に合った、書くためのツールを使うことは、生徒自身の考えを整理したり、新たな考えに気付いたりするために効果的です。



書く活動の工夫②

肢体不自由特別支援学校
準ずる教育課程

ねらいとする価値「相互理解、寛容」

全3時間の単元構成による学びの過程で、生徒の思考がどのように変化し、整理されたのかを視覚化することや、他者の多様な価値観に触れながら考えを整理する中で自己内対話が十分になされ、最終的に自分事として捉えることができることを期待して3時間完結型のワークシートを作成した。

ワークシートは、「①自分の考え(第1時)、②他者の考えを踏まえた上での考え(第2時)、③自分の今後の生き方について(第3時)」の3つの項目で構成した。生徒自身が思考した過程や他者の意見を聞くことで考えが変化した点などが一目で分かり、回を追うごとに自分の考えが整理されていった。3時間の授業を経て完結するため、全てが記入できた時には生徒たちの達成感があった。

なお、ワークシートはデータか紙媒体のどちらかを生徒が選択し、書いた内容は「ロイロノート・スクール」で共有した。データで書く際のメリットとしては、ズームして枠を大きく広げて書くことができることや手書き入力、キーボード入力を選択することができるなど、より個に応じた方法で取り組むことが可能になる点である。さらに、書いた内容をロイロノートで共有するメリットとしては、他者の意見を手元で確認でき、その意見を踏まえたり、参考にしたりしながら、自分の考えを整理できるところである。

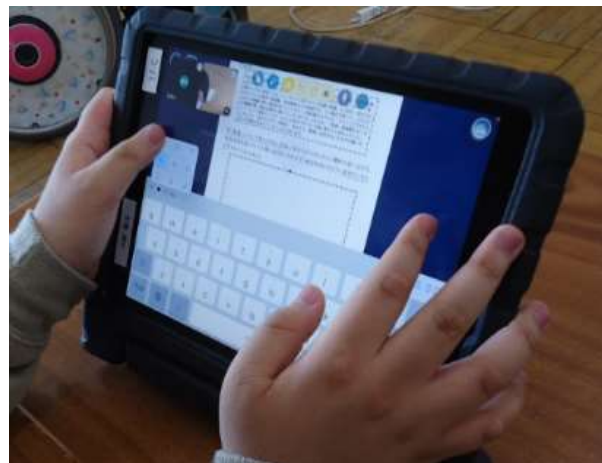
ワークシート「普通」って何だろう

名前 _____

①「普通」について、自分の考えを書きましょう。(1/24記入)

②話し合い活動をして、再度考えを整理してみよう!(1/28記入)
※みんなの意見を参考にしてOK、その際は誰の、どんな意見を参考にしたのか記述してください。

③「普通」について考えましたね。これからたくさんの人と関わり合いながら社会生活を送っていくと思いますが、その上で、あなたはどのように生きていきたいですか?(2/4記入)



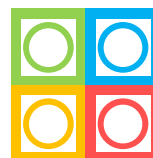
LINK

実践例12へ

自分に合った書く活動ができることはもちろん、自分の手元で友達が書いた内容まですぐに確認できて、自分の考えと照らし合わせられるのはうれしいですね。データが残っていることは、後で見たいときに読み返して振り返りができるというメリットもあります。



動作化、役割演技など 表現活動の工夫



児童が表現する活動の方法としては、発表したり書いたりすることのほかに、児童に特定の役割を与えて即興的に演技する役割演技の工夫、動きや言葉を模倣して理解を深める動作化の工夫、音楽、所作、その場に応じた身のこなし、表情などで自分の考えを表現する工夫などがよく試みられる。また、実際の場面の追体験や道徳的行為などをしてみることも方法として考えられる。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 85 ページ参照】

動作化、役割演技など 表現活動の工夫①

小学校
自閉症・情緒障害特別支援学級

ねらいとする価値「礼儀」

他者の目線で考えることが難しい実態の児童に対して、挨拶をする側とされる側の両方の役割演技をすることで、お互いの気持ちについて考えることができるようにした。役割演技をする中で、「自分から挨拶をしたら、いい気持ちがした」と言って笑顔になったり、「挨拶をしても、相手が何も言ってくれないと嫌な気持ちがした」と表情が曇ったりする様子が見られた。さらに、「挨拶をしてもらった時に、自分の顔を見ながら言ってくれた方が気持ちが伝わった」、「笑顔で挨拶してくれたほうがいい気持ちがした」と、ただ言葉を返すだけでなく、相手の顔を見ながら笑顔で挨拶をした方がいい気持ちになること、そして挨拶をする側だけでなく、挨拶をされる側もいい気持ちになると言う意見が出た。



日常生活の中で言いたいことがあっても態度にうまく表せないため、気持ちが伝わらないことがある。このような気持ちを態度で伝えることが難しい実態の児童に対し、どうすれば感謝の気持ちが相手に伝わるか、手紙やプレゼントを渡す動作化を通して考える学習をした。実際に動作としてやってみることで、表情や渡し方など、どのような態度をとれば、自分の気持ちが伝わるかに気付くことができた。動作化や役割演技は、道徳科で学習したことを日常生活に般化する上で有効な手立てであると感じた。

LINK

実践例5、6 へ

ここで大事なことは、役割演技や動作化そのものを目的として行うのではなく、授業の中に適切に取り入れ、これらの活動から学んだ内容から道徳的価値の意義などについて考えを深めることが重要なのです。



動作化、役割演技など 表現活動の工夫②

知的障害特別支援学校
小学部

ねらいとする価値「親切、思いやり」

「親切、思いやり」について考えるきっかけとなるよう、運動会や練習時に起こりうる具体的な場面を教師が演じて短い動画を作成した。徒競走の途中で一緒に走っていた友達が転んでしまったという問題提起の場面と、それに続く2つの想定(声を掛けて一緒にゴールまで行く、先にゴールまで走ってから声援を送る)の動画を提示し、児童が自分の意見はどちらに近いかを考えて選択できるようにした。

考えを深めるために、その後、動画と同じ場面を、転んだ人、一緒に走っていた人、順番を待っていた人の三つの役割でロールプレイした。児童7人を2回に分けて実施した。役割を充てる際には、児童の実態や、それぞれに考えてほしい点を考慮した。また、みんなの前に出て活動するのが苦手な児童については、自席でも参加できるよう、順番を待っていた人の役を充てた(実際には友達や教師の促しに応じて前に出て参加できた)。



ロールプレイ後には、行動の理由やそれぞれの立場での気持ちを児童に問い掛け、板書した。この後、再度、自分の意見はどちらに近いかを問い直すという流れである。

ロールプレイ後には、自分がした行動で相手から「嬉しかった」と言われると、うなずいて応じたり、見ていた児童が演じた児童に「やったね」と声を掛けたりする様子が見られた。

LINK

実践例 15 へ

このように、ある体験活動やロールプレイの中で感じたことや考えたことを道徳科の話合いに生かすことで、児童の関心を高め、道徳的实践を主体的に行う意欲と態度を育むことが期待されます。



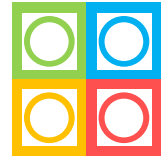
コラム 子供の心を引き付けた!そんな場面をピックアップ!! その2

中学部の「節度、節制」の授業で、「ついついやってしまうこと」というお題で生徒も教師も思いつく限り、短冊に記入して発表した。「ついついゲームをやすぎる」「ついつい遅くまで起きてしまう」「ついつい食べ過ぎてしまう」などの意見がたくさん出た。「ついつい…」というキーワードが生徒にはまったようだった。「え!先生もそうなの?」「〇〇さんと一緒だ」などの声があがったり、普段聞けない事が出てきたりした。すべきこと、よいことは分かっている、それを遂行する難しさを抱えているのだということを共有できたかなと思う。それをベースにして、次時の授業につながられたという場面であった。

特別支援学校教員

どうする道徳

板書を生かす工夫



道徳科では黒板を生かして話し合いを行うことが多く、板書は児童にとって思考を深める重要な手掛かりとなり、教師の伝えたい内容を示したり、学習の順序や構造を示したりするなど、多様な機能をもっている。

板書の機能を生かすために重要なことは、思考の流れや順序を示すような順接的な板書だけでなく、教師が明確な意図をもって対比的、構造的に示したり、中心部分を浮き立たせたりするなどの工夫をすることが大切である。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 85 ページ参照】

板書を生かす工夫①

小学校
自閉症・情緒障害特別支援学級

ねらいとする価値「正直、誠実」

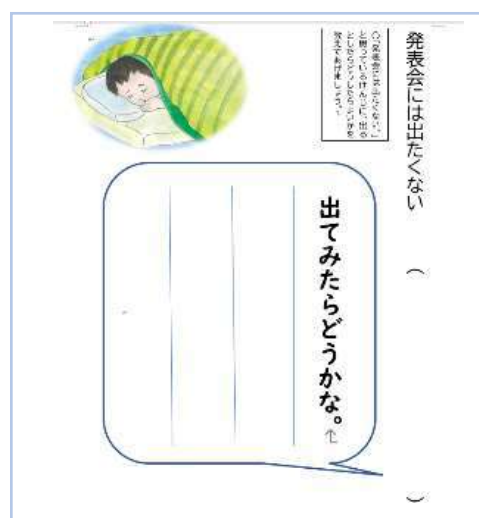
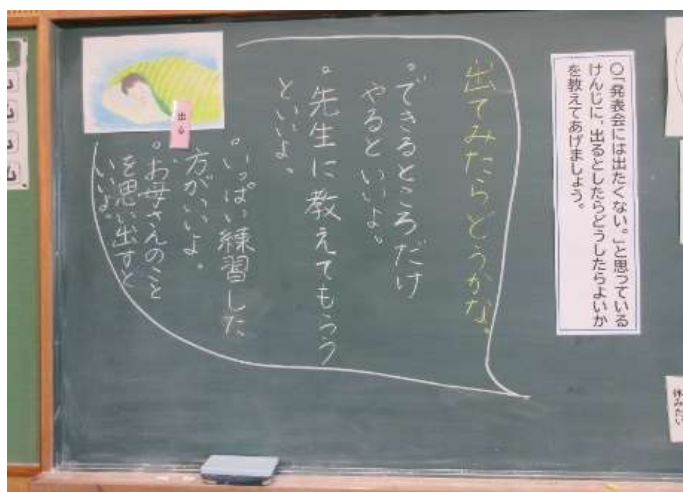
意見を分類することで思考の整理につながる。分類の仕方を教師が示し、様々なシチュエーションがどの場合にあたるのか考えていくことで、単に「うそ」「正直」だけでなく、それを口にしてもよいことなのか更に考えを深めていった。どちらとも言えない可能性が出てきて、確認していく中で感情の複雑さにも触れていった。自分の気持ちだ

うそと正直。 正直。 ・正直はいいこと。 ・本当のことを言うこと。 ・ごまかさないこと。 うそはついてはいけないか。 ①どんな嘘もついちゃいけない。 ②100%相手が喜ぶ嘘ならあり。 ③間魔球がOKだったらあり。 ④難しくて分からない。 ⑤その他。	ついてはいけないうそ。 ごまかし - おかし食べてない。 - 宿題やったけど忘れた。 - それがわたしのおです。 怪盗キッドの予告状。 タマミー。へただッピ！ 「チビ」。 カバじゃないの？ 言わない方がいい正直。	ついていううそ。 - 好きじゃないプレゼント「うれしい」。 - 三年とうげのトルトリ。 - わあ、よく見付けたね！ わあ、よく見付けたね！ おかし食べちゃった。 宿題やるのを忘れました。 言った方がいい正直。	○よい正直ってなに？ ・本当のことをそのまま言う、言わないではない。 ・自分のよき心に向き合いながら、どうすればよいかを考え、判断し、行動にうつすこと。 相手が喜ぶ。 真実。
--	---	---	---

けでなく、相手の気持ちまで思いを巡らせるには、まだ難しい児童もいるが、人間関係にはいろいろな場面がある中で、「言葉どおりではないこともある」を知り、考えることで、相手の気持ちを考えるためのひとつのステップになると考える。

ねらいとする価値「個性の伸張」

ノートへの記述や発表することが難しい児童のために、書く活動を一つに絞り、ワークシートのレイアウトがそのまま板書になっている吹き出しの前で発表する設定を考えた。書き出しの一文もあらかじめ入れて、記述内容の方向性をそろえた。自分の考えと友達の発言を並べて板書していくことで、友達の考えも理解しやすく、みんなで解決策を考えて共有ができ、学びの足跡を残すことができた。



LINK

実践例1、2 へ

学級の誰もが友達の考えを理解するために、板書は重要な役割をもっています。短いキーワードで分かりやすく、色チョークで書き分けてキーワードを捉えやすいようにするのも大切です。

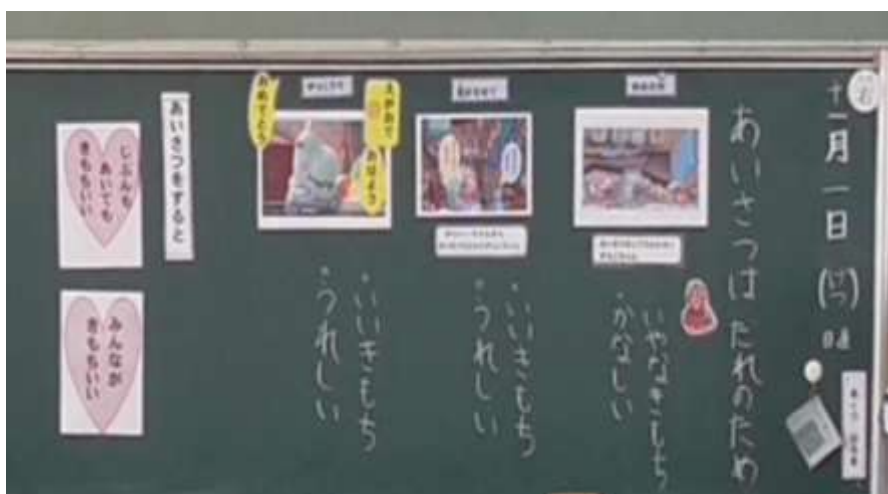


板書を生かす工夫②

小学校
自閉症・情緒障害特別支援学級

ねらいとする価値「礼儀」

教師の話、友達の話、読み物教材などは全て言葉による「情報」である。これらは、音声言語なので耳から入ってくる聴覚的な言葉による情報になる。視覚優位の児童や、ワーキングメモリーに弱さがある実態の児童は、音声言語だけでは内容を理解することに困難さが伴う場合がある。そこで言葉による情報をより分かりやすくするために、視覚的に捉えやすい板書構成を考えた。場面絵や写真の効果的な活用により教材の内容理解を助け、思考の流れや順序が分かるような板書を工夫することで児童が主体的に考える場面が見られた。



LINK

実践例5、6へ

このように順接的な板書だけでなく、場面絵や写真などを使って、教師のねらいを構造的に分かりやすくし、中心的部分が目立つように工夫することも大切です。



板書を生かす工夫③

小学校
通常の学級

ねらいとする価値「善悪の判断、自律、自由と責任」
「相互理解、寛容」

導入では、本時のねらいとする道徳的価値に対して、児童がもっているイメージについて話し合い、児童の発言を短く簡単に板書した。また、教材の場面絵などに簡単な文字情報を入れたものを掲示し、場面理解への手助けになるようにした。タブレット端末やモニターも活用したが、大事なキーワードや場面絵などは板書し、常に児童の目に入るようにした。板書の右側には、思考ツールやディベートでの児童の主張を板書したが、ディベートの流れを止めずに板書を進めていくことは難しいところもあった。板書とICT機器の活用や、チーム・ティーチングでの指導等の必要があると感じた。

LINK

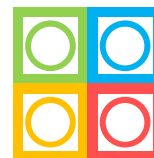
実践例3 へ



板書は、児童の思考を深める重要な手掛かりです。このように、児童の発言や大事な場面を板書して、常に児童の目に入るようにすることが思考を巡らすきっかけになります。



説話の工夫



説話とは、教師の体験や願い、様々な事象についての所感などを語ったり、日常の生活問題、新聞、雑誌、テレビなどで取り上げられた問題などを盛り込んで話したりすることであり、児童がねらいの根底にある道徳的価値をより身近に考えられるようにするものである。教師が意図をもってまとめた話をするのは、児童が思考を一層深めたり、考えを整理したりするのに効果的である。

教師が自らを語ることによって児童との信頼関係が増すとともに、教師の人間性が表れる説話は、児童の心情に訴え、深い感銘を与えることができる。なお、児童への叱責、訓戒や行為、考え方の押し付けにならないよう注意する必要がある。

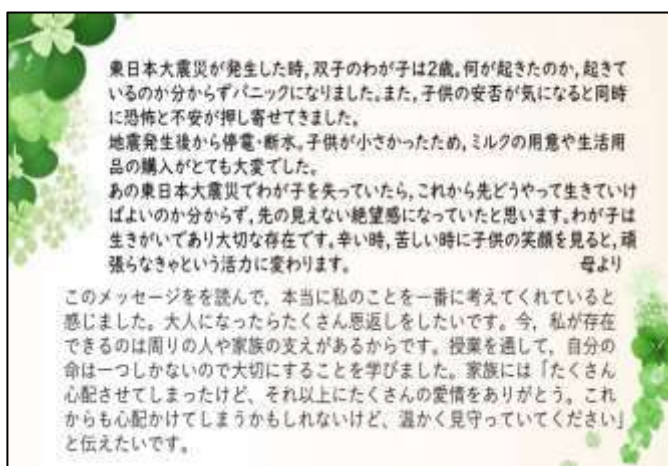
【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 85 ページ参照】

説話の工夫

中学校
自閉症・情緒障害特別支援学級

ねらいとする価値「生命の尊さ」

保護者の協力を得て、震災直後に考えたことや万が一我が子を失っていたら、どんな生き方になっていたかを答えてもらい、最後の説話の部分で、「保護者からのメッセージ」として生徒たちに手渡した。そして、さらに多様な考え方に触れるために、保護者のメッセージを生徒間で共有した。その結果、家族からのメッセージということもあり、生徒自身が「生命の尊さ」について、自分事として考えることができた。また、生徒からは「家族の存在があって、今の自分があるんだと改めて思った」「帰る家があり、支えてくれる家族に感謝したい」等という意見も聞かれ、授業の初めの考え方は、異なる意見を発表することができた。



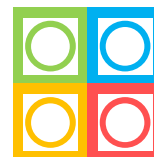
LINK

実践例8へ

生徒がねらいの根底にある道徳的価値をより自分事として考えられるようにするために、家族など身近な人からの言葉やメッセージを説話として使うことも効果的です。



学校行事と関連付けた工夫



児童は、学校の教育活動や日常生活において様々な体験をしている。その中で、様々な道徳的価値に触れ、自分との関わりで感じたり考えたりしている。道徳科においては、児童が日常の体験やそのときの感じ方や考え方を生かして道徳的価値の理解を深めたり、自己を見つめたりする指導の工夫をすることが大切である。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 83 ページ参照】

学校行事と関連付けた工夫

知的障害特別支援学校
小学部

ねらいとする価値「親切、思いやり」

児童にとって大きな行事である運動会に関連させて題材を設定した。運動会を楽しみにしている児童も多く、当日までに体育で練習をしたり、図画工作で応援グッズを作ったりしている。様々な学習でも運動会と関連させた内容を行うことから、道徳科でも関連させて実践することで、意欲的に取り組むことができるのではないかと考えた。また、実際に体験している（する）内容であるため、初発で扱う内容の題材と比べて文脈も理解しやすいのではないかと考えた。教材として、実際に運動会や練習時に起こりうる具体的な場面（今回行った授業では「徒競走の途中で友達が転んでしまった」場面）を教師が演じて短い動画を作成した。

運動会と関連させたことで、グループの児童全員が場面の状況を理解し、実感をもって考えることができていた。

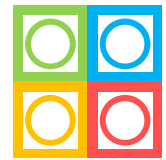
LINK

実践例 15 へ

学校が計画的に実施する体験活動は、児童が共有することができ、学級の全児童が共通の関心などをもとに問題意識を高めて学習に取り組むことが可能になるため、それぞれの指導相互の効果を高めることが期待できます。



指導形態の工夫



発達障害等のある児童に対する指導や評価を行う上では、それぞれの学習の過程で考えられる「困難の状態」をしっかりと把握した上で必要な配慮が求められる。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 83 ページ参照】

上記の記載から、学習上の困難がある児童生徒に対して、指導形態においても、適切な配慮が求められると考える。

指導形態の工夫①

中学校
交流学級

ねらいとする価値「生命の尊さ」

特別支援学級在籍の生徒は普段、交流学級で道徳科の授業を受けていることが多い。しかし、教材の内容を理解したり、話し合い活動に主体的に参加したりすることが難しい状況である。そこで、個に応じた指導を道徳科でも行うために、チーム・ティーチングを取り入れ、T1とT2で役割を分担をしながら授業を行った。

T1（交流学級担任）は、ユニバーサルデザインを考慮しながら全体指導に当たり、思考を練り上げるための発問や合意形成を促す問い返しを行った。

T2（特別支援学級担当）は、同じ視点を持ちながら支援の必要な生徒のそばに待機し、学習状況を観察しながら、必要に応じて支援を行った。また、全体に関わることとして、教材の読み聞かせや「議論カード」の使い方の説明なども担当した。T2が補助的な発問をしたり、対話をしながら一緒に考えたりしたので、支援の必要な生徒も最後まで思考が分散せず、課題を自分事として捉え考えることができた。



授業の前には、「連携シート」を活用し、ねらいとする道徳的価値の捉えや生徒の実態について、T1 と T2 で共通理解を図った。また、発問についても検討し、支援の必要な生徒も道徳的価値について自我関与しながら考えられるように工夫した。

LINK

実践例9 へ

交流学級で多様な意見を聞くことも大事です。その中で、授業の流れにのれなかったり、理解が難しい場合は、T2 が個別に道徳的価値について考えられるよう支援することが大切です。



指導形態の工夫②

肢体不自由特別支援学校
準ずる教育課程

ねらいとする価値「相互理解、寛容」「思いやり、感謝」「礼儀」

在籍するグループの人数が少ないために多様な意見に触れる機会が少なかったり、少人数であるがゆえに意見の偏りがあったりする課題に対して、ICT を活用して、他の肢体不自由特別支援学校と遠隔合同授業を行った。活用したビデオ会議ツールは「Zoom」及び「Meet」である。これらを他校と接続することで、同学年の生徒と相互に顔を見ながら対話することができ、離れた場所においても、同じ教室で授業をしているのと変わらないくらい、意見の交換ができた。

ICT 機器やビデオ会議ツールを活用することで、学校も住む地域も異なる同学年の生徒同士が学び合うことが可能になる。また、多くの価値観に触れ、考える事ができたため、生徒にとって道徳的価値を更に深めるために非常に有効であった。

また、普段顔を合わすことがない他校の生徒ということもあり、新鮮で大きな刺激となったことが生徒の反応から見て取ることができた。



LINK

実践例11、12 へ

この指導形態は、コロナ禍で普及したビデオ会議ツールを活用した取組です。このようなネットワークが色々なところに広がれば、更に多様な考えに触れる機会ができることはもちろん、様々な可能性を秘めていると言えます。



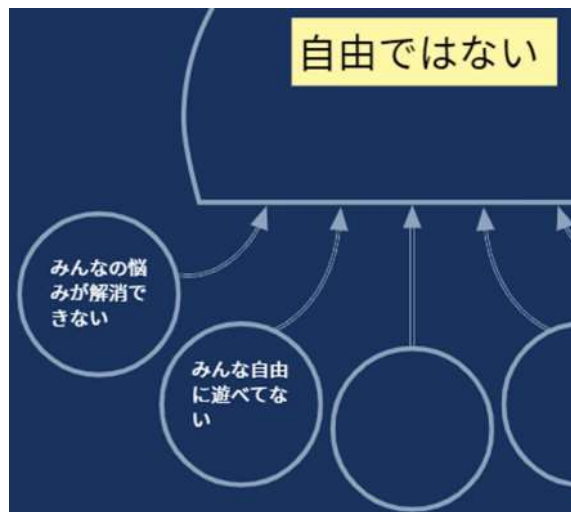
指導形態の工夫③

小学校
通常の学級

ねらいとする価値「善悪の判断、自律、自由と責任」「相互理解、寛容」

通常の学級に在籍する支援の必要な児童に対して、道徳科においても自分の意見を発言することや、考えをまとめることができないことがあった。そのため、自分の考えを整理し、他者の考えを集中して聞く場面として、ディベートを行う前に少人数でのグループワークを取り入れた。グループのメンバーは、なるべく仲の良いメンバーで構成するなど、意見が言えるように交友関係等に配慮した。その少人数のグループワークでは、自分の考えとそのように考えた理由を発言することができた。パーソナル

ワークの時間には、「クラゲチャート」を活用し、クラゲの頭の部分に自分の考え、脚の部分にその理由を記入し、その後のクラスワークの時間に、アプリ上に提出した思考ツールを共有化した。思考ツールのワークシートは、紙とタブレットの使いやすい方を選べるようにしたため、書字が苦手な児童も入力し、他の児童と共有することができた。このように通常の学級で道徳科を受ける支援の必要な児童においても、場面に応じたグルーピングや思考ツールの活用が効果的だと考えられる。



LINK

実践例3、4 へ

児童生徒の学習上の困難さに応じて、通常の学級においてもグルーピングから配慮して、子供の考えを引き出したり、安心して意見を言える環境を作ることも大切です。



コラム 私の道徳失敗談

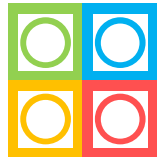
子供にワークシートを配付したら、話をする前に全部記入してしまい、子供の中では授業が完結してしまったことがありました。教材の配付のタイミングや、ワークシート以外の見取りの方法でもいいかもしれないと思った経験でした。

小学校教員

どうする道徳



各教科等と 関連付けた指導の工夫



例えば、国語科における物語文の学習、社会科における郷土や地域の学習、体育科におけるチームワークを重視した学習、特別活動における集団形成の学習など、各教科等と道徳科の指導のねらいが同じ方向であるとき、学習の時期を考慮したり、相互に関連を図ったりして指導を進めると、指導の効果を一層高めることができる。その際、各教科等と道徳科それぞれの特質が生かされた関連となるように配慮することが大切である。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 84 ページ参照】

各教科等と 関連付けた指導の工夫①

中学校
知的障害特別支援学級

ねらいとする価値「思いやり、感謝」

生徒が道徳的価値について理解を深めることや、生徒の変容をより適切に評価することをねらいとして、自立活動と関連した指導を行った。交流学級での道徳科の前後に、特別支援学級の自立活動において、道徳科に関連する内容について指導を行った。自立活動では、自立活動の区分「3 人間関係の形成」、項目「(2) 他者の意図や感情の理解に関すること」をねらいとし、相手の立場や考えを推測しながら、他者と関わる具体的な方法を身に付けることができるようになるための活動を行った。日本の昔話を教材として活用し、誰かのために行動することのよさを知り、親切にするときは相手の気持ちや状況を考えることが必要であるということに気付くことができた。次時に行った道徳科の振り返りにも、「親切にすることは大切だ」「思いやりの心をもって親切にしていきたい」との記述があり、さらに、思いやりの心をもつことや相手の立場になって親切にすることの大切さに気付くことができた。道徳科実施後の自立活動では、自立活動の区分「3 人間関係の形成」、項目「(3) 自己の理解と行動の調整」のねらいと関連させて、集団の中で状況に応じた具体的な行動をとるための活動を行った。同じ特別支援学級に在籍する3年生との交流会では、相手の気持ちや状況を考えながら準備し活動することができた。ねらいとする道徳的価値である「思いやり」について理解がより深まり、実践することの良さに気付くことができた。

時	指導内容	学習場所及び内容	
1	道徳科と関連する内容について指導する		特別支援学級で 自立活動の指導
2	自立活動で学習したことを踏まえ、道徳科の指導を実施する	交流学級で 道徳科の指導	
3	道徳科で扱った内容について自立活動で確認する		特別支援学級で 自立活動

LINK

実践例 10 へ

児童生徒の実態により、道徳的価値の理解が難しい場合は、自立活動の内容と関連付けて、道徳科と自立活動それぞれの特質を生かした指導をすることで、指導の効果を一層高めることもできます。

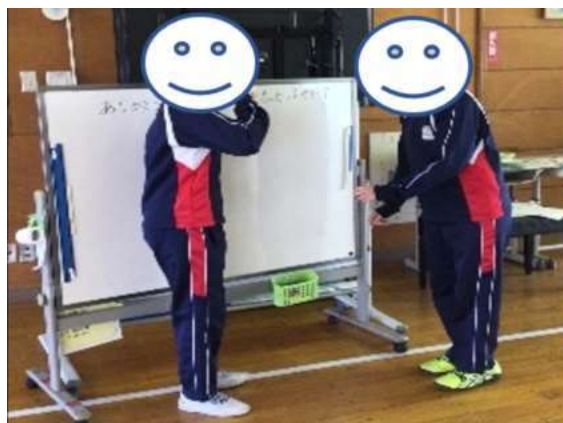


各教科等と 関連付けた指導の工夫②

知的障害特別支援学校
小学部

ねらいとする価値「感謝」

道徳科の指導が年間10時間という計画をしている中で、道徳科で学習した内容をより具体的に捉え、自分事として考えることができるように、自立活動の個々の目標をもとに、道徳科との関連をもたせて学習できるようにした。授業の流れを「道徳科→自立活動→自立活動→道徳科」の4時間計画とし、話し合いや考えをまとめて表出できる活動を設定した。自立活動では、感謝という気持ちはいつ生まれ、それはどのような場面なのか、どのような言葉をかけたら感謝が伝わるのかなど、役割演技をしたり、話し合ったりしながら具体的な行動を共有し、お互いに評価し合うことで、感謝という意味や行動を理解できるようにした。実際に、自分で考えた感謝の場面を体感することで、日常場面でも「ありがとうって言われたから感謝だね」と教師に伝えたり、感謝の場面で「この前、ありがとうの勉強したね」と振り返ったりする姿が見られるようになった。



LINK

実践例 14 へ

このように道徳科と自立活動の、両者の特質を踏まえた上で、児童生徒の実態に応じて柔軟に教育活動を展開していくことも必要です。



各教科等と 関連付けた指導の工夫③

知的障害特別支援学校
小学部

ねらいとする価値「勤労、公共の精神」

生活単元学習と道徳科を関連付けて、「お仕事お助け隊!」という単元を設定した。

◆生活単元学習

お仕事お助け隊として依頼者から頼まれた仕事を行う。

(自在ぼうきのごみ取り、雑紙のシュレッダー処分)

◆道徳科(勤労、公共の精神)

仕事を終えたことを依頼者へ報告することが活動の中心。依頼者から「ありがとう」と感謝される経験をして、気持ちを考える。

単元名「お仕事お助け隊!」 ※第1次は各学級で実施、第2～8時は実態別グループで実施		
1	目標を立ててがんばろう～係の仕事～	道徳科(希望と勇気、努力と強い意志)
2	みんなのためのお仕事	道徳科
3・4	お仕事お助け隊	生活単元学習
5	お仕事できましたを伝えよう	道徳科(勤労、公共の精神)
6・7	お仕事お助け隊	生活単元学習
8	お仕事できましたを伝えよう	道徳科(勤労、公共の精神)

依頼者からの「こんなにやったのね!ありがとう。」という言葉を知ると、依頼者の顔を見たり、お辞儀をして応じたり、笑顔になったりしていた。生活単元学習での体験的な活動を生かし、依頼者に報告に行き感謝を受けるといった具体的な学習活動を道徳科で行ったことで、児童から表情を引き出すことができた。



LINK

実践例 16 へ

今でも各教科等を合わせた指導の中で、体験的な活動を通して、道徳的指導を行っている知的障害特別支援学校もあるが、このように、生活単元学習のよさと、道徳科のよさをそれぞれ生かし、関連付けて、指導の効果を高めることもできるのです。





ICTを活用した 思考を促すための工夫

道徳科に生かす指導方法には多様なものがある。(中略) そのためには、教師自らが多様な指導方法を理解したり、コンピュータを含む多様な機器の活用方法などを身に付けたりしておくとともに、児童の発達段階などを捉え、指導方法を吟味した上で生かすことが重要である。

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 84 ページ参照】

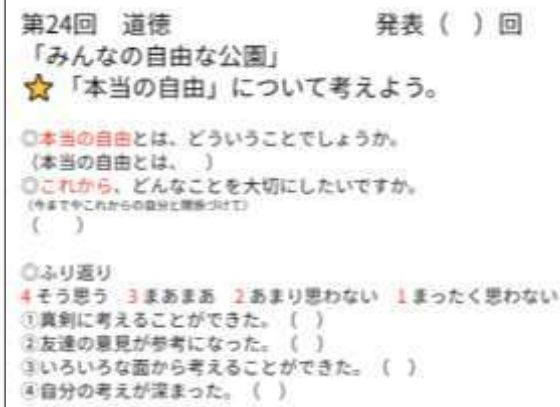
ICTを活用した 思考を促すための工夫①

小学校
通常の学級

ねらいとする価値「善悪の判断、自律、自由と責任」

1. タブレット端末の活用

児童は、一人一台のタブレットを各教科で日常的に使っている。道徳科の授業では、「ロイロノート・スクール」の「テキスト」を、自分の考えを書くワークシートとして使用した。また、本時のねらいや振り返りをまとめられるシートも用意し、授業の導入と終末で使用した。記入したテキストはアプリの「提出」機能で提出し、グループワークやクラスワークの際に座席が離れていても共有できるようにした。



2. 思考ツールの活用

児童は、これまでの道徳科の授業で「Yチャート」「ウェビング」「座標軸」「くま手チャート」「ベン図」などの思考ツールを使用してきた。今回の授業では、「クラゲチャート」を使用した。パーソナルワークの時間に、クラゲの頭の部分に自分の考え、脚の部分にその理由を記



入し、その後のクラスワークの時間に、アプリ上に提出した思考ツールを共有化した。書字が苦手な児童も入力し、他の児童とお互いの考えを共有することができた。

LINK

実践例4 へ

児童生徒の中には、自分の頭の中で思い描いた考えをもっている、自信をもって発言できないことがあります。このような ICT 機器を活用した思考ツールは、自分の考えを表出しやすく、他者と意見を共有しやすくなります。



ICT を活用した 思考を促すための工夫②

肢体不自由特別支援学校
準ずる教育課程

ねらいとする価値「相互理解、寛容」「思いやり、感謝」「礼儀」

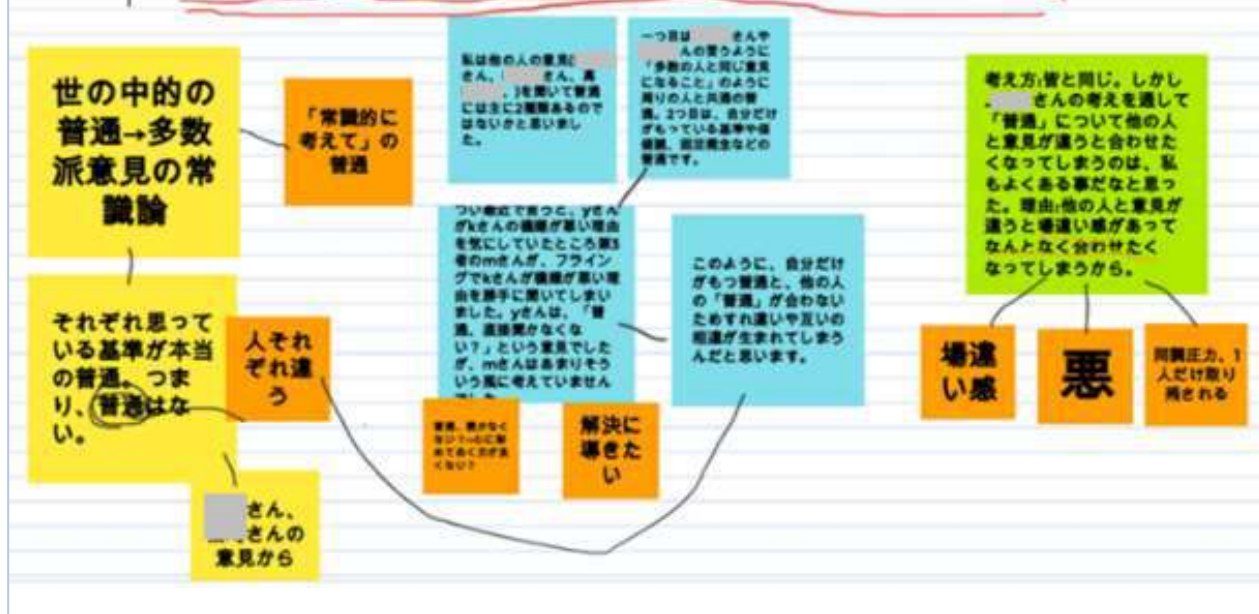
遠隔合同授業では、「ロイロノート・スクール」を活用した。「提出」機能による回答の提出や意見の集約、「共有」機能で友達同士のカードの交換を行った。カードには生徒自身が自由に意見を書いて提出することができ、発表やまとめの際には、集約した回答を全員で共有した。課題としては、共有だけに留まってしまうことなく、思考を深める段階まで、「問い」や「話し合い」の工夫を通して進めていく必要がある。



2回目の授業実践においては、「普通とは何か？」というテーマで考えを深化させていくために、「ロイロノート・スクール」に加えて「Jamboard」を活用した。実践では、生徒全員に編集者の権限を与え、考えが書かれたカードを自分たちで操作しながら議論を進められるようにした。

実際に、生徒が似ている意見同士をまとめたり、線で繋げて整理したりしながら議論を進める様子が見られた。また、考えを自由に出し合い、生徒が主体となって対話が展開されたことで思考が促され、ねらいとする道徳的価値に対する考えが深まっていった。「Jamboard」のメリットとしては、カードを並べることで思考した過程が視覚化され、どのように思考したのかが一目で分かることや、記録として残り、振り返りや評価等で効果的に活用することができることが挙げられる。

普通って何？ Season2



LINK

実践例 11、12 へ

「Jamboard」などを活用して、自分たちの考えで意見を分類したり、比較したりする行為自体が、多様な考え方に触れ、それを自分との関わりで考えながら、思考を整理しているとも考えられます。



コラム 子供の心を引き付けた!そんな場面をピックアップ!! その3

授業終末時の教師の説話。子供に響く話がしたいとつい意気込んでしまい、いつも説教くさくなってしまふ。「生命の尊さ」の授業では、同僚の先生の協力を得てお子さんの誕生時の動画を流した。出産時のお母さんの苦しそうな息遣い、定期的に聞こえる胎児の心音。緊迫した雰囲気生徒たちの目もモニターに釘付けになる。やがて、「おぎゃー」。赤ちゃんの泣き声のなんと力強いことか。命ってなんだろうという問いに対し、「分からない」と答えていた A 君も「命ってすごいな」とつぶやいていた。お母さんの表情からも、新しい命がとても大切にされていることがうかがえる。言葉で訴えるよりも、心に響く説話がある。

中学校教員

どうする道徳

4. 教えて！道徳 Q&A

ここでは、これまでの内容で伝えきれなかったことについて、私の代わりに缶がえるが Q&A 形式でお答えしましょう。



ヨロシク。・・・ゲコ。



教えて！

道徳

Q & A

Question 1

交流学級において、特別支援学級在籍の生徒が道徳科の授業に取り組む場合は、どのようにしたらよいでしょうか？



Answer

授業の内容により、特別支援学級と通常の学級における学びが柔軟に行えるのがよいと思います。通常の学級で授業に参加することで、多様な考えに触れ、特別支援学級だけでは考えが深まらなかったり、広がらなかったりした特別支援学級在籍の生徒の考えが変わる場合もあります。そのためには、例えば、通常の学級と特別支援学級の時間割において、同じ時間帯に道徳科の授業を位置付けると、通常の学級と特別支援学級での連携がしやすくなります。…ゲコ。



Question 2

特別支援学校や特別支援学級において、子供の実態により、内容の理解が難しい場合、内容項目にやらない項目があってもいいのでしょうか？



Answer

道徳科で扱う「内容項目」については、基本的には、その全ての内容項目を扱うことが原則です。が、しかし、児童生徒の実態によっては、全ての内容項目を扱うことが必ずしも適切ではない場合があります。その場合は、児童生徒が日常生活や集団生活を営む上で、特に必要と思われる内容項目を精選し、繰り返して指導に当たるようにすることも考えられます。（内容項目については、個別の指導計画に記した個々の重点目標を考慮して選択することが大切です。）…ゲコ。



教えて！

道徳

Q & A

Question 3



中心発問を提示するタイミングは、いつがよいのでしょうか？

Answer



発問のタイミングは決められているものではありません。「中心発問」というのは、その道徳科の時間の中で、子供がより自分との関わりで深く考えるための中心となる問いです。その他に、授業の流れを作るための「基本発問」がありますが、「中心発問」を生かせるように「基本発問」を構成することが大切です。その上で、子供の気持ちや考えを更に深く聞いてみたいと思う場面で「中心発問」を提示することがねらいを達成する上で効果的です。…ゲコ。

Question 4



道徳では、価値の押しつけは NG と言われていますが、子供の発達段階によっては、ある程度正しいことを示してあげることも必要だと思うのですが…？

Answer



道徳科では、道徳的価値について、知的な理解を図ることが目的ではありません。児童生徒の実態に応じて、学校教育活動の中で体験的な学習、実際的な活動を通して養っていくことが大切です。「自立活動」の時間が教育課程上設定されている場合は、自立活動と道徳科それぞれの特質を踏まえた上で、それぞれ時間で養う力を考えることが大切です。例えば、自立活動では、道徳科で取り扱った内容に関連させて、ソーシャルスキルトレーニングなどを行うことも考えられます。…ゲコ。

教えて！

道徳

Q & A

Question 5

子供の実態によっては、1単位時間の授業の中だけでは、自分事として考えを深めることが難しいこともあると思うのですが？



Answer

道徳科の指導においては、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要があります。特に特別な教育的支援を必要とする児童生徒の場合は、教科等の授業の様子はもちろんのこと、教科等以外のあらゆる場面で、一人一人の言動や行為を含めた様子を見てくことも大切です。「継続的に」がポイントです。…ゲコ。



Question 6

特別支援学校での道徳科を実施するにあたって、学級の子供の実態に差がある場合、どのように題材や教材を設定すればよいのでしょうか？



Answer

道徳科では、児童生徒一人一人の障害の状態、生活年齢、学習状況や経験等に応じて指導の重点を明確にし、具体的なねらいや指導内容を考慮することが重要です。児童生徒の実態に差がある場合には、まず、グルーピングの工夫が考えられます。一つのグループでは、道徳科として行い、他のグループでは「各教科等を合わせた指導」の中で实际的な活動を通して、道徳科の内容を学習する方法もあります。取り扱う内容に関しては、下学年の内容項目や、実態に応じた自作教材を扱うことも考慮するとよいでしょう。…ゲコ。



教えて！ 道徳

Q & A

Question 7

道徳科の内容項目と関連させられそうな行事や学習などは、どのようなものがありますか？



Answer

休み時間、清掃活動、給食の時間、運動会や文化祭、宿泊を伴う学習、部活動などが考えられます。道徳科の授業での学びが、具体的な活動場面に生かされ、実践や体験などが行われることによって、道徳的实践力と道徳的实践との有機的な関連を図ることができ、効果的な面もあります。道徳科での学びと実践や体験などのそれぞれの特質を理解した上で、関連付けることが大切です。具体的には、修学旅行や宿泊学習では、内容項目のA(1)、B(8、9)、運動会や持久走大会では、A(5)、栽培などの生活科では、D(17、18)、外国語活動では、C(16)などがあります。(内容項目表を参照)・・・ゲコ。



Question 8

道徳科と自立活動の内容で重なってくる部分もあるように思うのですが・・・？



Answer

自立活動と道徳科の目標及び内容には重なってくるところがあります。また、学習指導要領にも、密接な関連を保つようにし、計画的、組織的に指導が行われるよう示されています。道徳科はスキルの獲得を目標としていないことから、自立活動の特質と道徳科の特質を踏まえた上で、それぞれの時間で養う力を明確にして、指導を行う必要があります。・・・ゲコ。





5. 実践事例集

これは、もっと詳しく実践について知りたい人のための実践事例集です。



実践事例集

- | | |
|--------------------------------------|---|
| ・実践例1・2
LINK▶▶▶ | 小学校 自閉症・情緒障害特別支援学級
「自作教材を活用した道徳科の実践」 |
| ・実践例3・4
LINK▶▶▶ | 小学校 通常の学級
「ICT 機器と思考ツールを活用した道徳科の実践」 |
| ・実践例5・6
LINK▶▶▶ | 小学校 自閉症・情緒障害特別支援学級
「小学校低学年における体験的な活動と
関連付けた道徳科の実践」 |
| ・実践例7・8
LINK▶▶▶ | 中学校 自閉症・情緒障害特別支援学級
「異学年の学習形態を取り入れた道徳科の実践」 |
| ・実践例9・10
LINK▶▶▶ | 中学校 交流学級
「交流及び共同学習における
ティーム・ティーチングによる道徳科の実践」 |
| ・実践例11・12
LINK▶▶▶ | 肢体不自由特別支援学校 中学部 準ずる教育課程
「準ずる教育課程における、対話的学びを深めるた
めの ICT を活用した遠隔型合同授業の実践」 |
| ・実践例13・14
LINK▶▶▶ | 知的障害特別支援学校 小学部
「自立活動と関連付けた道徳科の実践」
～道徳科と自立活動を合わせた4時間パッケージ授業を
通して～ |
| ・実践例15・16
LINK▶▶▶ | 知的障害特別支援学校 小学部
「パッケージ型（他の教科等や行事と合わせた単元設定）
で具体的な指導内容、体験的な学習活動を中心と
した道徳科の授業」 |



実践例 1	自作教材を活用した道徳科の実践	
	自閉症・情緒障害特別支援学級	小学校

1 主題名 うそは言っているの？ 内容項目 A-(2)正直、誠実

2 教材名 「うそと正直」

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

本主題は、「小学校学習指導要領解説特別の教科 道徳編」の内容「A 主として自分自身に関すること (2) 正直、誠実」で、小学校第 1 学年及び第 2 学年「うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直に伸び伸びと生活すること。」、小学校第 3 学年及び第 4 学年「過ちは素直に改め、正直に明るい心で元気よく生活すること。」をねらいとしている。

人は、うそをつくことはいけないこと、正直に生きることが大切であることは概念的には分かっている。しかし、頭では分かっているものの、時として「理屈」とは逆の対応が求められる状況や「人としての在り方」が交錯する場面において、自分で判断して行動しなければならないことがある。その時に対応を間違えると、人間関係においてうまくいかない状況に立たされることもある。特別支援学級の児童は特に、相手の意図を察することが難しい場合が多い。どのようなことに気を付けて言葉を選ぶべきなのか、また、建前と本音が混ざってきたときに、自分だったらどのように行動するだろうか考えることができるよう、うそと正直について様々な場面で問い直し、それぞれの言葉のもつ意味について話し合えるようにしたい。そして、友達の意見を聞くことを通して多様な道徳的価値にも目を向けていくことができるよう本主題を設定した。うそと正直について、自分の考えや意見に根拠をもって相手に伝えるときにも、自分と異なる意見について傾聴できるようにする。

(2) 児童の実態について

本学級には、1 学年男子 1 人、2 学年男子 1 人、3 学年男子 2 人、5 学年男子 2 人の計 6 人の異学年の児童が在籍している。実態も個々に違いがあるため、同じ内容で学習することは難しいが、日常生活や授業の中で関わり合う場面を設定し、良い関係がもてるような取組を進めている。人と関わるのは嫌ではないが、言動の表現方法が適切ではなく誤解を招きやすかったり、自分の思いを優先してしまったりする様子が学校生活の中で見られる。

児 童	実 態
児童 A (2 学年)	嫌なことや自分の思いと違う場面にあうと落ち着かなくなり、周りの物や人に八つ当たりをしてしまうことがある。
児童 B (3 学年)	身近な友達の言動に影響を受けやすく、乱暴な言動をとってしまうことがある。
児童 C (3 学年)	こだわりが強く、活動や学習を時間で切り上げることができない。納得しないと行動に移すことは難しい。

(3) 教材について

ねらいとする内容項目「正直、誠実」に関する動画や 4 コマ漫画等を活用して、児童の集中が継続できるようにする。また、児童のエピソードを基にした話し合い活動を中心にして、うそや正直に焦点を当てた発問や問い返しを行うことで、児童の思いを引き出し、多様な考えに触れることができるようにする。

4 道徳的価値に迫るための指導の工夫

- (1) 動画や 4 コマ漫画、児童のエピソード等を話題として話し合い活動を中心に展開する。
- (2) 思考を整理する板書構成を工夫する。

5 学習指導過程

(1) ねらい

うそと正直についてどのように考えるかについての話し合いを通して、自分の考えや意見に根拠をもって相手に伝えるときにも、自分と異なる意見について傾聴できるようにする。

(2) 準備・資料

ロイロノート・スクール、場面絵、モニター

(3) 展開

※道徳的価値に迫るための指導の工夫□

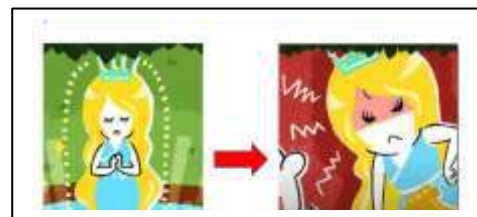
	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される児童の反応	指導上の留意点 ㊟評価
導入	1 「うそと正直」について話し合う。 ○正直ってどういうことか。 ○嘘はついてはいけないうか。 ①どんな嘘もついちゃいけない。 ②100%相手が喜ぶ嘘ならあり。 ③閻魔様がOKだったらあり。 ④難しくて分からない。 ⑤その他	- 正直はいいこと。 - 本当のことを言うこと。 - ごまかさないこと。 - でも言うとう損するかも。 - 嘘はだめだよ。 - 相手が喜ぶ嘘って何？ - 難しいから誰かに決めてほしい。	- ねらいとする価値への方向付けを行う。 - 児童の実態についての事前調査として「嘘はついてはいけないうか」についてアンケートを行う。
	2 エピソードを聞いて話し合う。 ○ ついていい嘘とよくない嘘ってどうやって見分けるの？ - 兄弟のおやつを食べたのに「食べてない。」と言う。 - 宿題をやっていないのに「やったけど持ってくるのを忘れました。」と言う。 3年とうげのトルトリは？ - 友達から好きじゃないプレゼントをもらった。「うれしい！」と嘘をついたら、友達は喜んでいた。 ◎ 正直に何でも言った方がいいの？ 「あんなにはっきり『へた』っていわなくても」と言うギギとパンタに「何がわるいッピ？ホントのこといっただけッピ。ウチ、うそいってないッピ。」と言うピッコラ。 「それが私のおのです。」と言うとなりのきこり。 - 怪盗キッドが予告状を出す。 - 兄弟のおやつを食べたと言う。 「宿題やるのを忘れました。」と言う。 - 背の低い友達に「チビ」。 「わあ、よく見付けたね！」と手柄をAちゃんに譲った上級生。 「カバじゃないの？」と言うののちゃん。	- 絶対ダメな嘘でしょ。 - 正直に言わなきゃ。 - 自分はあまり悪くないって言っているみたい。 - ごまかしても気持ち悪い。 - 嘘でも言われた方は喜ぶ。 - もらったことはうれしいけど。 - ちゃんと「好きじゃない。」って言わなきゃ。 - 嘘で相手を喜ばせるの？ - 自分もそう言うかも。 - ピッコラは言い過ぎ。 - 本当のことだけど、人から言われたくはない。 - 自分が得するための嘘だ。 - 正直でないのは罰があたる。 - 正直に言って、自分は良くても相手が嫌な気持ちになることもある。 - 自分が悪ければ言うべき。 - これが「相手が喜ぶ嘘」？ - Aちゃんが見付けたのはやらせでも本当？ - ののちゃんは正直なのに、言うのを止められてる。	- エピソードはイラストや動画を構図図にまとめて思考を整理する。 - それぞれのエピソードについて、ついていい嘘かよくない嘘か、正直に言った方がいいことかよくないことか相談して分類していく。 - 判断に迷うことは意見を整理して板書する。 - 意見が分かれるときはそれぞれの意見を受容する。 - どちらのきこりと友達になりたいか問うことで、自分が得をするための嘘は信頼されないことに気づくことができるようにする。 - 上級生のついた嘘は相手を喜ばせる嘘であり、きこりの嘘とは異なることを確認した上で、上級生は嘘つきかどうかを考えることができるようにする。 ㊟自分の考えや意見に根拠をもって相手に伝えている。 (発表、つぶやき)

展 開	3 これから自分が大切にしていきたいことを考える。 ○ よい正直ってどういうことなんだろう？	・本当のことを言う、言わないじゃない。 ・どうすればいいかが大事だ。	・思考が整理された板書を全員で見直すことで、これからどの点を大切にしていきたいかについて考えることができるようにする。
終 末	4 教師の説話を聞く。		・教師自身が、ごまかさずに正直に伝えた経験について話す。

6 内容理解や思考を助けるための指導方法の工夫

(1) 表情の変化に注目させる工夫

登場人物などの表情をカード(図1)にして示すことで、児童が注目し、相手がどう感じているのか読み取ることができるようにした。相手の反応によって、対応が正しいものだったのかを判断する材料にすることができた。



〈図1〉表情の変化を示したカード

(2) 思考を整理する板書構成工夫

各エピソードが、「①ついてはいけないうそ」、「②ついていうそ」、「③言わない方がいい正直」、「④言った方がいい正直」の4つのうち、どれに該当するのかを話し合いで分類していった(資料1)。選択肢を先に提示したことで考えが整理しやすくなった。

〈資料1〉思考を整理する板書構

/ うそと正直		ついてはいけないうそ		ついていいうそ		○良い正直ってなに？	
正直		ごまかし		相手が喜ぶ		・本当のことをそのまま言う、言わないではない。 ・自分のよき心に向き合いながら、どうすれば良いかを考え、判断し、行動にうつすこと。	
・正直はいいこと。 ・本当のことを言うこと。 ・ごまかさないうそ。		おかし食べてない 宿題やったけど忘れた それがわたしのおのです		好きじゃないプレゼントでも「うれしい」 3年とうげのトルトリ わあ、よく見付けたね！			
うそはついてはいけないうそ		怪盗キッドの予告状 タマミー、へただっぴ！ チビ カバじゃないの？		わあ、よく見付けたね！ おかし食べちゃった 宿題やるの忘れました			
①どんな嘘もついちゃいけない。 ②100%相手が喜ぶ嘘ならあり。 ③閻魔様が OK だったらあり。 ④難しくて分からない。 ⑤その他。		つ相手が傷		真実			
		言わない方がいい正直		言った方がいい正直			

(3) 物語などの遠いところから、日常生活の場面へ汎化する工夫

少人数での道徳科の授業では、意見の広がりや、多角的な視点に触れる場面を意図的に取り入れた。特別支援学級では、児童一人一人への支援として、保護者から事前に児童の家庭での様子について聞いたり、事後に自分の考えを見つめ直す時間を確保したりする。

7 授業の実際

(1) 導入について

「正直とはどのようなことか。」や「嘘はついてはいけないのか。」について話し合った。また、事前に児童にアンケートをとった内容についても振り返った。「①どんな嘘もついちゃいけない。」「②100%相手が喜ぶ嘘ならありだと思ふ。」「③閻魔様がOKだったらありだと思ふ。」「④難しくて分からない。」「⑤その他」では、「①どんな嘘もついちゃいけない。」と回答した児童が一番多かった。

(2) 展開について

児童は、日常生活の中で起きそうなエピソードについて、ついても良いうそかどうか、正直に言った方が良いかどうかについて、グループで相談して分類した。また、それらをどのように見分けるのかについても話し合った。特別支援学級での少人数での道徳の授業は、交流及び共同学習を行っている通常の学級（以下、「交流学級」という。）においては参加が難しい児童も、自分の意見をつぶやきやすい環境の中で取り組むことができた。それぞれのエピソードに対して、〈図2〉のように、登場人物の表情を実際に見せることで時間をかけて確認したり、自分の体験を話したりして会話の中で分類が進んでいった。つぶやきを拾いつつ、『『金のおの』のきこりはどちらの方がより人間として好きか。』と問うなど、ゆさぶりをかけることで考えが深まり変容する様子が見られた。

また、分類を進めていくことで、うそにも様々なうそが存在すること、正直も時には相手が喜ばないことがあることに気付いていくことができた。



〈図2〉 登場人物の表情を確認する様子

(3) 終末について

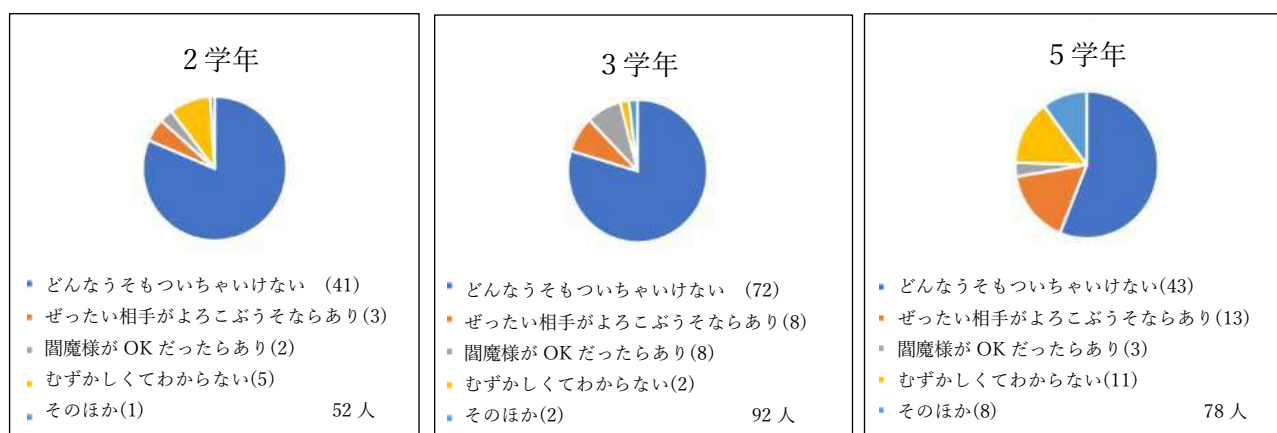
良い心に向き合って行動できた人物のエピソードを聞くことで、これから自分が大切にしていきたいことを考えた。

8 成果と課題

(1) 成果について

本学級は、複数の学年の児童が在籍するため、特定の学年の読み物教材を扱うのではなく、どの児童にとっても関心のある題材で話合いたいという発想から授業を組み立てた。事前アンケートから「どんな嘘もダメだと思う。」という考えが多く見られたので、多様な事例を用いて様々な視点から考えようとする展開をねらった。視野を広げるといいう点では有効であったが、児童の活動が多すぎたため、活動内容の精選が必要と思われる。また、座ったままの授業形態だけでなく、自分の考えが書かれた掲示物を黒板に貼るなど、児童の活動に動きを付けると、より集中力が持続できるのではないかと考える。

今回、事前アンケートを児童が在籍する学年の児童全員に依頼した（図3）。アンケートの結果から学年が低いほど「どんなうそもついちゃいけない。」と回答する児童の割合が高いことが明らかになった。



〈図3〉 学年別による事前アンケートの結果（令和4年11月12日実施）

そして、高学年では意見が複雑に分かれてくることが回答から確認できた。嘘をつくことは基本的には良くないが、人を傷つけないためには、ついて良い嘘があるのではないかという意見が見られた。また面白くて軽い冗談なら良い、兄弟ならば良いなど、時と場合に合わせてついて判断する様子も見られた。

授業の実践前に本学級在籍の5学年で授業を行った。本時の展開と比較すると、題材に対して「ごまかしはダメだな。」「言っていないか悪いかよく考えることが大切だ。」という、ねらいに迫る意見が述べられていた。

(2) 課題について

今回、準備した話合いの材料が多かったため、児童の集中力を持続させることが難しかった。特に自分が経験したことのない事例は想像することが困難であった。

児童の発達段階に応じ、答えが一つではなく、道徳的課題を一人一人が自分自身の問題として向き合える教材を追求していきたい。

目次にカエルときは
ここをクリック

LINK



実践例 2	自作教材を活用した道徳科の実践	
	自閉症・情緒障害特別支援学級	小学校

1 主題名 自分と向き合う 内容項目 A－（４）個性の伸長

2 教材名 「発表会には出たくない」

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」（以下「解説」という。）内容項目Aは、「主として自分自身に関すること」であり、第3学年及び第4学年A－（３）「節度、節制」内容「自分でできることは自分でやり、安全に気を付け、よく考えて行動し、節度のある生活をする。」、第5学年及び第6学年においてのA－（３）は、「安全に気を付けることや、生活習慣の大切さについて理解し、自分の生活を見直し、節度を守り節制に心掛けること。」をねらいとしている。この内容項目には、基本的な生活習慣に関わることと、進んで自分の生活を見直し、思慮深く考えて自らを節制し、ほどよい生活をしていくことの2つの要素がある。児童は、苦手なことにも挑戦し粘り強く努力することの大切さは知っているが、不安感から自分の苦手なことを避けてやりたいことを優先して実践できないことがある。他の人に言われなくても、自分で考えて健康で安全な生活をする心情を育てたいと考え本主題を設定した。

(2) 児童の実態について

	児童の実態
児童 A (3 学年)	・漢字練習やリコーダーの練習など繰り返しの練習が必要な課題は嫌がることが多い。 ・こだわりが強く、経験のないことや完璧でないことには参加を渋りがちである。 ・気持ちの切り替えが苦手なため、時間通りに行動することが難しい。
児童 B (5 学年)	・自己肯定感が低く、困っていることを伝えることができない時がある。 ・手先が不器用なため、細かい作業や技能が必要なことは避けたがる。 ・学校の支度や提出物は、忘れ物が多く、合奏の練習等に参加できないことがある。
児童 C (5 学年)	・練習したい気持ちがあっても、違う誘惑があると大変なことから逃避しがちである。 ・依頼心が強く、困ったことがあると、できないことをアピールして助けてもらおうとする。

話し合いでは、児童 B は積極的に考えを発表することができ、児童 A、児童 C も指名されれば話すことができる。本時は、順番に役割演技をすることで児童 A や児童 B の抵抗を減らし、考えたことを発表できる場の設定をしたい。

(3) 教材について（自作教材：「発表会には出たくない」）

けんじは、若葉小まつりに向けて苦手なリコーダーを練習することになったが気が進まない。練習の時間も思うように演奏できず、諦めの気持ちが強くなっていく。そんな中で友達のともりのりから言われたことと、母親から言われたことを布団の中で思い返す。話し合いを通し、漠然とした嫌だという感情が、苦手とするものへの嫌悪感であったり、予定の見通しの立たないことへの恐怖感であったりすることであり、それが自分以外の他者も有している感情であることに気付いていく。主人公の行事に対する姿勢や捉え方を自身の体験と重ね共感しながら、主人公の気付きを通して苦手さに対する生活態度を見つめ直したい。また、この後どうしたらよいかを考える活動を通し、生きていく中で待ち受ける苦手さや困難さに向き合い、助けを求めたり折り合いをつけたりすることは、社会生活を送る上で大切であることを押さえ、自分自身で考えて行動しようとする心情を育てていきたい。

4 道徳的価値に迫るための指導方法の工夫

(1) 登場人物にアドバイスをする活動を通して道徳的価値の理解につなげる

布団の中で若葉小まつりについて悩むけんじに、どうしたらよいかを教えてあげる活動を通して、

不安に思うことは誰にもあるが、できることを努力して増やす経験を積むことが大切であることを理解し、自分自身に不安があっても周りの人に協力を求めながらよりよく生活しようとする判断力と心情を育むことにつなげたい。

(2) 自分事として考えられるような問いをする

登場人物のどこに共感したのかについて、言葉で説明することは難しい。そこで、「自分も似たような思いをしたことがあるかな。」と問いかけ、登場人物の気持ちに共感したことを表す「あるあるカード」を貼ることで、登場人物の行動を自分事として考えたこと可視化できるようにした。

5 学習指導過程

(1) 本時のねらい

発表会を休みたいと考えるけんじの不安な気持ちに気付くことで、自分自身に不安があっても周りの人に協力を求めながらよりよく生活しようとする判断力と心情を育てる。

(2) 資料・準備

場面絵、登場人物の言葉の吹き出し、あるあるマーク、けんじ・お母さん・とものりのお面、ワークシート

(3) 展開

※道徳的価値に迫るための指導の工夫□

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される児童の反応	指導上の留意点 ②評価
導入	1 自分が苦手だなと思っているものについて話し合う。 ○自分が苦手だと思っているものは何ですか。	・習字。 ・持久走。 ・楽器の演奏。	・それぞれの活動に取り組んでいる時の気持ちを聞き出すことで、苦手意識は誰にでもあることを確認する。
展開	2 教材「発表会には出たくない」を聞いて話し合う。 (1)けんじの言動が自分と同じだと思ったところに、あるあるマークを付ける。 (2)けんじのお面をかぶり役割演技を行い、先生に注意された場面のけんじの気持ちを考える。 ○先生に「指が動いていない人は、見えてますよ。」と言われたとき、けんじは、どんな気持ちだったでしょう。 (3)夕食後、お母さんと会話する役割演技を行い、お母さんに発表会には出たくないと話すけんじの気持ちを考える。	・ぼくといっしょだな。 ・速くてついていけないよね。 ・自分も言われるよ。 ・だって難しいよ。 ・しまった。ぼくだ。 ・ばれている。 ・できないものはできない。 ・速すぎるよ。 ・周りの音が大きすぎる。 ・もうやりたくないなあ。 ・うまくできないところを見られたくない。 ・お母さんがいいと言ってくれてよかった。	・登場人物の吹き出しに注目して話を聞くように伝え、内容を捉えやすくすると共に、登場人物の気持ちを考えるよう助言する。 ・けんじと自分の似ているところを見つけてマークを貼る活動を通し、けんじに寄りそって気持ちを考えることができるようにする。 ・お面を付けて楽しい雰囲気の中で順番に役割演技をすることで、発表に対する抵抗を軽減する。 ・役割演技をすることで、母親に「いいよ」に言われた時の、けんじの安心した気持ちに共感できるようにする。

展 開	(4)授業中、友達と会話する役割演技を通して、とものりに対するけんじの気持ちを考える。 ◎「ぼくは…いっしょに出たいな。」と言われたけんじは、どんなことを考えていたでしょう。 ○心のものさしで考えてみよう。 (5)ふとんに入ってから2人の言葉を思い返しているけんじの絵に向かって、アドバイスをする。 - ワークシートに、けんじへのアドバイスを書く。 ○「発表会には出たくない。」と思っているけんじに、出るとしたらどうしたらよいかを教えてあげましょう。 - けんじが発表会に出られるようになるためのアドバイスを発表する。	・そう言ってくれるなら少し頑張ろうかな。 ・そう言われても、やっぱり休みたい。 ・どうしたらいいか分からない。 ・もう本番は休もうと思っていたのに。 ・とものりに言われて迷う。 ・どうしていいか困った。 ・休みたいけどどうしよう。 ・困っていることを先生に相談した方がいいよ。 ・練習を一緒にやってくれる人を見つけるといいよ。 ・完璧じゃなくても大丈夫だよ。 ・発表会に出ているけんじ君を見ることができたらお母さんはうれしいと思うよ。 ・けんじくんが出たら、とものりくんが喜ぶよ。	・友達役の先生と会話する中で、不安感は誰にもあることに気付くようにする。 ・心のものさしで前半からのけんじの心の動きを示すことで、視覚的に児童が分かるようにする。 ・「休みたい」という気持ちに大きく傾いていたところへ、とものりからの言葉を受け、けんじがどのように感じたか（迷う方へ心が動いたか）を、児童が操作を行い確認する。 ・「なんとしても休みたい。」という気持ちしか出ない場合も受け入れ、「なぜそう思うのか。」「どうしたら出られそうなのか。」と切り返し、不安の原因があることに気付くようにする。 ・発表できない場合でも、気持ちを書くことができるように、吹き出しのワークシートを渡す。 ・けんじにアドバイスをすることを通して、困った時には助けを求めて良いということに気付くようにする。 ・『いいけど。』と小さい声で言ったお母さんはどんな気持ちだったかな。」と声かけをし、身近で見守る家族の思いに気付くことができるようにする。 ・気持ちを書くことができるように、リード文を添えた吹き出しのワークシートを渡す。
--------	--	---	--

			・一人で発表することが難しい時には、教師と一緒に読むようにする。 ⑦ けんじの解決策を考えると、自分自身に不安があっても周りの人に協力を求めながらよりよく生活しようとする大切さを考えている。(ワークシート、発表)
終末	3 自分のことを振り返る。 ・交流学級の担任、友達、家族からの自分へのメッセージを聞く。(発表会の後のもの) (1) 振り返りシートのチェックリストに自己評価をすることで、自分の生活を振り返る。 ○この時間でどんなことを考えましたか。	・僕たちのことを大切に思ってくれている人たちがいるんだ。嬉しいな。	・振り返りシートのチェックリストに 自己評価をすることで、友達の意見を聞いて、自分の考えが深められたか、これから苦手なことがあった時にどうしようか自分を見つめることができるようにする。

6 指導方法の工夫

(1) 児童の特性による困難さを補い、思考を助ける工夫

道徳科の授業では、あらすじを聞いて話の内容を理解したり、自分の考えを表現したりする活動がある。しかし、聞きながら頭の中でイメージしたり、自分の考えを言葉で表現したりすることは、児童にとって難しい課題である。そこで、紙芝居を使って範読したり(図1)、挿絵と吹き出しであらすじを掲示したりすることで(図2)、話の内容が理解しやすくなるよう工夫した。また、「心のものさし」を用いることで、けんじが発表会に出るか出ないかの間で揺れている心の様子を視覚的に理解できるようにした(図3)。



〈図1〉紙芝居を使っ
ての判読



〈図2〉挿絵と吹き出しで構成する内
容理解を助ける板書



〈図3〉心のものさし(登場人物の心情)

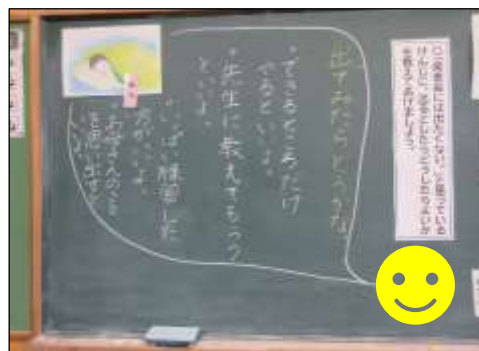
(2) 何のための表現活動かを理解し、安心して自分の考えを表現できる場の工夫

中心発問に対して自分の考えを述べたり、展開後半においてこれまでの自己の生き方を振り返ったりする場面では、積極的に発言する機会を設ける。自分専用のカードを用いたり、ワークシートに考えを書いたりすることで、自分の考えを客観視して、表現しやすくする工夫を行った(図4)。ワークシートは、書く量を減らしたり、一文目を記入したものを活用したりした。これらの工夫を行うことで、自分は、主人公が発表会に出られるように応援する立場なのだということが明確にな

り、励ます言葉を想起しやすくなった。また、ワークシートと黒板を同じ構成にした上で、黒板の吹き出しの場所に立つことで（図5）、どの箇所を伝えれば良いのが明確になり、安心して発表することができた。



〈図4〉一文目を書いてあるワークシート



〈図5〉黒板の吹き出しの場所

(3) 道徳的価値を実感する場の設定

少人数の道徳の授業では、意見の広がりや、多角的な視点に触れる場面を意図的に取り入れた。個別支援の特別支援学級では、事前にメッセージをもらっておいたり（図6）、事後に自分の考えを見つめ直す時間を確保したりすることがしやすい（図7）。



〈図6〉教室に掲示した保護者、交流学級担任、友達からのメッセージ



〈図7〉あるあるカードを授業が終わってから貼る児童の様子

7 授業の実際

(1) 導入について

自分が苦手だなと思っているものについて話し合った。また、苦手な活動をしている時の自分の気持ちについて話し合うことで、登場人物の気持ちに寄り添うことができたようにした。

(2) 展開について

教材「発表会には出たくない」を聞き、けんじの言動に共感する箇所に、「あるあるマーク」（図8）を挿絵と吹き出しが掲示してあるホワイトボード（図9）に貼り付けた。次に、お面を被って役割演技を行った（図10）。「お母さん」、「先生」、「とものり」の役は教師が行い、児童は「けんじ」の役割だけを演じることで、けんじの心情を考えることに集中するようにした。けんじの役割を実際に体験することで、けんじが発表会に出たくないのは、不安からくるものだということや、友達のとものりの言葉を聞いて、気持ちが揺れているということに気付くようにする。

けんじへのアドバイスについて発表する際は、メガホンなど、応援する時に用いる小物を用いた（図11）。

小物を手にしながら伝えることで、より気持ちを込めて発表するこ



〈図8〉あるあるカード（共感の意思表示）



〈図9〉挿絵と吹き出しで掲示したあらすじ

とができた。「いっぱい練習するといいよ。」「先生に教えてもらったら?」「自分はできないところもあるけどできるところだけやればできるよ。」等、これまでの自身の経験を生かした言葉をアドバイスしていた。

(3) 終末について

交流及び共同学習を行っている通常の学級（以下、「交流学級」という。）の担任、友達、保護者からの自分へのメッセージを聞いた。自分の努力を認めてもらえたことや、自分の頑張る姿を見て喜んでくれる存在がいることに改めて気づき、どの児童も表情をほころばせて聞いていた。メッセージが書かれたシートを帰宅後すぐに嬉しそうに見せてくれたと、保護者から後日連絡が届いた。



〈図 10〉役割演技で活用したお面



〈図 11〉発表で使用したメガホン

8 成果と課題

(1) 成果について

教材作成では、複数学年に児童が在籍していることから、児童の実態に合わせることで、登場人物の心の動きについて理解し、考えやすくなるのではないかと捉えた。共通の体験をもつような行事や同じような特性があることで起こるエピソードに関係する教材を自作することは、特別支援学級に在籍する児童にとって、教材の理解もしやすくなる。また、自分の経験と重ね合わせることで考えを広げやすくなるのが本実践で実感できた。交流学級での授業を通して多様な意見に触れることも必要ではあるが、少人数で行われる話合いを通して、児童一人一人に寄り添い、自己肯定感を高められる時間も大切にしていきたい。

交流学級での授業において、デジタル教科書による範読を一度聞いただけでは、教材の内容を理解できず、登場人物の心情を考えて発表することは難しい。今回の実践では、あらすじの挿絵に台詞を表示したことで、どの登場人物の言葉なのかが視覚化され、交流学級での道徳科の授業よりも内容の理解がしやすかったとの感想が児童全員から出た。

(2) 課題について

登場人物に共感できることを表示する「あるあるマーク」を使用したのが、本時の中で使用することに躊躇する様子が見られた。また、自分達が登場人物のモデルになっていることは、客観的に考えられない様子であった。普段から、児童一人一人のよさや苦手さを言葉に出して伝え、誰にでも様々な面があることや、困った時に乗り越えていくにはどうしたらよいのかについて一緒に考えてくれる存在が周りにたくさんいることを伝えていきたいと感じた。

目次にカエルときは
ここをクリック

LINK



実践例 3	ICT 機器と思考ツールを活用した道徳科の実践	
	通常の学級	小学校

1 主題名 自由と責任について考える A－(1) 善悪の判断、自律、自由と責任

2 教材名 「みんなの自由な公園」

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」(以下解説という。)内容項目Aは、「主として自分自身に関すること」であり、第5学年及び第6学年においての(1)は、「自由を大切にし、自律的に判断し、責任のある行動をすること。」をねらいとしている。

指導に当たっては、「自由と自分勝手との違いや、自由だからこそできることやそのよさを考えたりして、自由な考えや行動のもつ意味やその大切さを実感できるようにすること」、また、「自由に伴う自己責任の大きさについては、自分の意志で考え判断し、行動しなければならない場面やその後の影響を考えることなどを通して、多面的・多角的に理解できるようにすることが重要である。」としている。

(2) 児童の実態

本学級6学年1組は、男子7人、女子21人、うち特別支援学級在籍児童が5人である。自閉症・情緒障害特別支援学級在籍の児童Aは、授業中に集中が継続しないことが多い。また、児童Bは、頑固で譲れず、相手の意見を受け入れられないことがある。

事前の実態調査の結果では、多くの児童が、自由な考えや行動は大切だと感じていた。自由とはどういうことかという質問には、「マイペースに行動することだと思う。」「好きなことをすることだと思う。」や「他から制限されないことだと思う。」「自分の意志で考える・行動することだと思う。」など、他からの制限がなく自由に行動できることと捉える児童が多かった。中には、「ルールを守りつつ、自分の思う行動をすることだと思う。」と、自由とはルールがある上で通用することであると理解している児童もいた。また、情報活用能力についてのアンケートの結果によると、約8割の児童がタブレット端末の操作に慣れている。これまでの授業において、児童は、タブレット端末に自分の回答や意見を入力して比較検討したり、発表プレゼン資料を作成して発表したりという経験がある。しかし、操作の場面では個人差があり、友達や教師の手助けを必要とする児童もいる。また、操作に慣れているように見える児童でも、「どちらかといえばできない。」と感じている児童も数人いる。

(3) 教材について(ココロ部! NHK for School)

本教材は、公園の利用者が自由に過ごすあまり、互いの利用者に不満が噴出したため、主人公である公園の管理人が、快適な公園にするために悩み考えるという内容の動画である。この教材を通し、「本当の自由」について考え、自由と責任の関係に気づき、責任感のある自律した行動をしようとする心情を育てていきたいと考え、本主題を設定した。

4 道徳的価値に迫るための指導方法の工夫

(1) ICT機器を用いて提示することで、一人一人の考えをクラス全体で共有できるようにする。

(2) 思考ツールを用いることで、その考えに至った経緯を可視化できるようにする。

(3) 動画教材を用いることで、児童が登場人物の立場や設定を把握しやすくする。

5 学習指導過程

(1) 本時のねらい

自由について様々な視点から考えることで、自他の自由を尊重するとともに、自律的に判断し、責任ある行動をしようとする心情を育てる。

(2) 資料・準備

掲示用資料、ワークシート、ロイロノート・スクール、モニター

(3) 展開

※道徳的価値に迫るための指導の工夫□

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される児童の反応	指導上の留意点 ㊟評価
導入	1 課題を確認する。 「本当の自由」について考えよう。 2 自分をもつ「自由」のイメージについて話し合う。 ○「自由」と聞いて、どんなことを想像しますか。	【自由とは】 ・楽しい ・好きなことをすること ・やりたくなければやらなくてもいいこと ・自由ばかりではいけない	・自分をもつ自由のイメージについて想起させることにより価値の意識付けを行う。 ・イメージを共有できるように黒板に板書し可視化する。 ・自由がないと困るかという補助質問も投げかけ、自由は必要なものである、大切であることを確認する。
	3 教材「みんなの自由な公園」を視聴し、自分の考えを整理する。 ○たくさんのルールが決められた「ココロ自由公園」は、本当に自由な公園と言えるのでしょうか。「自由である。」と「自由ではない。」に分かれて、その理由も考えましょう。 ・自分の考えをクラゲチャートに整理する。 4 整理した考えをもとに、ディベートで議論する。 ○「ココロ自由公園」は「自由である。」か「自由ではない。」かに分かれて、その理由も合わせて話し合ひましょう。 ・クラス全体で議論する。 5 「本当の自由」のもつ意味や大切さについて自分の考えをまとめる。 ◎「本当の自由」とは、どういうことでしょうか。自分の言葉でまとめてみましょう。 ・「本当の自由とは」という書き出しに続けて自分なりの考えを書く。	【自由である】 ・自分だけではなく、みんなのための公園だから ・ルールがないと、自分勝手になってしまうから 【自由ではない】 ・ルールがありすぎて、自分が好きなことができないから ・ルールが多くて、窮屈に感じるから ・議論が進むにつれ、視点が広がったり、立場が変わったりすることも予想される。 【本当の自由とは…】 ・自分勝手ではいけない ・自分のことだけでなく、周りの人のことも考えること ・みんなが気持ちよく過ごせること ・ルールの中で好きなように過ごすこと ・もしルールがなければ、みんなで作ったほうがいい	・動画視聴の際は、登場人物について資料を掲示し、複数の立場があることを可視化する。 ・「自由である。」「自由ではない。」は機械的に割り当て、新しい視点をもつことができるようにする。 ・クラゲチャートへの記入はワークシートとタブレット端末から、使いやすい方を自由に選べるようにする。 ・自由という言葉の前に「本当の」という言葉を付け、真の自由とは何か考えられるようにする。 ・出てきた意見を「自由」「自律」「自他」などをキーワードとしてつなげながら板書に整理し、自由と自分勝手の違いや、自由だからこそできることのよさなどにも気付けるようにしたい。 ・『「本当の」ココロ自由公園』にするためには、どうしたらよいかという解決策を考えることだけにならないようにする。 本当の自由とは」という書き出しを提示し、価値に迫ることができるようにする。 ㊟「自由」について、自分なりの考えをもつことができたか。 (発言・ワークシート)

終 末	6 学習の振り返りを書く。		・使い慣れた形式の振り返りシートを使い、自分と向き合い今後に生かしたいという気持ちをもてるようにする。
	7 教師の話を聞く。		・動画の終末の部分を視聴し、本時で出てきた児童の意見とつなげる。

6 指導方法の工夫

(1) ICT機器の活用

児童は、全ての教科において、一人一台のタブレット端末を日常的に使っている。道徳の授業では、「ロイロノート・スクール」の「テキスト」を、自分の考えを書くワークシートとして使用した。また、本時のねらいや振り返りをまとめる〈図1〉のようなワークシートも用意し、授業の導入と終末で使用した。記入したテキストはアプリの「提出」機能で提出し、グループワークやクラスワークの際に座席が離れていても共有できるようにした。

(2) 思考ツールの活用

〈図2〉は「クラゲチャート」という思考ツールである。児童は、これまでに道徳科の授業で「Yチャート」「ウェビング」「座標軸」「くまでチャート」「ベン図」などの思考ツールを使用してきた。今回の授業では、過去にも使用したことがある「クラゲチャート」を使用した。パーソナルワークの時間に、クラゲの頭の部分に自分の考え、脚の部分にその理由を記入し、その後のクラスワークの時間に、アプリ上に提出した思考ツールを共有化した。思考ツールのワークシートは、紙とタブレット端末の使いやすい方を選べるようにした。書字が苦手な児童も入力し、他の児童と共有することができた。

(3) 動画教材の活用

高学年の読み物教材は内容が長く複雑で、支援を必要とする児童にとっては、内容理解が難しいことがある。そこで、NHK for School の動画教材を使用することで、児童があらすじを理解しやすくなるようにした。今回使用した「みんなの自由な公園」は、登場人物の立場や設定が分かりやすく提示されている。また、主人公が自由と責任の間で揺れ動き悩む姿を視聴することで、自分事のように捉えられる効果があると考えた。

7 授業の実際

(1) 導入について

授業は〈図3〉のような流れで行うことを確認した。まず、「自由」のイメージを想起させることにより、価値の意識付けをした。また、「自由がないと困るか。」という補助質問を投げかけ、自由は必要であり、大切なことを確認した。

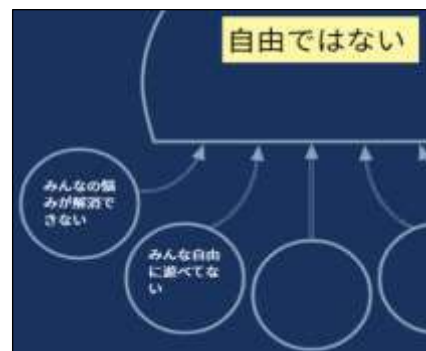
(2) 展開について

教材の内容理解として動画教材を活用した。普段は授業中に寝入ってしまう児童Aも、寝ることなく最後まで動画を視聴していた。クラゲチャートを取り入れたワークシートは、紙媒体とタブレット端末の使いやすいほうを選べるようにした。21人中二人は紙媒体を、他の児童

第24回 道徳 発表()回

「みんなの自由な公園」
☆「本当の自由」について考えよう。
◎**本当の自由**とは、どういうことでしょう。
(本当の自由とは、)
◎**これから**、どんなことを大切にしたいですか。
()
◎振り返り
4そう思う3まあまあ2あまり思わない1まったく思わない
①真剣に考えることができた。()
②友達の意見が参考になった。()
③いろいろな面から考えることができた。()
④自分の考えが深まった。()

〈図1〉ねらいや振り返りを書き込むワークシート



〈図2〉クラゲチャート(頭部に考え、脚部に理由を記入)

【授業の流れ】

- ①課題を確認する。
- ②「自由」のイメージについて話し合う。
- ③動画を視聴する。
- ④考えをクラゲチャートに整理する。
- ⑤ディベートで議論する。
- ⑥「本当の自由」とは何か、まとめる。
- ⑦授業の振り返りをする。

〈図3〉授業の流れ

はタブレット端末を選択した。クラゲの頭部には、公園が「自由である。」か「自由ではない。」のどちらかを記入し、脚部にはその理由を記入した。少なくとも一つ、多くて五つの理由を記入していた。支援を必要とする児童もクラゲチャートへの記入はできていたが、その後のディベートでは発言がなかった。また、発言する児童に偏りが出てしまった。導入時に配付した〈図1〉に記入した。「本当の自由とは」という書き出しに続くように、自分なりの「本当の自由」を言葉でまとめた。

(3) 終末について

振り返りの時間には、導入時に配付した〈図1〉に記入した。「本当の自由とは」という書き出しに続くように、自分なりの「本当の自由」を言葉でまとめた。児童Aは事前調査では、「自由とは友達と仲良くなれそう。」と答えていたが、授業後は「本当の自由とは、みんなが仲良く楽しく過ごす。」ことであると答え、自分本位の考えから他人本位の考えへと変容が見られた。

8 成果と課題

(1) 成果について

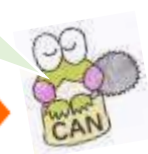
- ・ ICT機器と思考ツールの活用により、考えを述べた書字がはっきりして、思考の視覚化・共有化がしやすくなった。
- ・ 動画教材の活用により、登場人物の設定や話の流れが分かりやすくなった。範読だけで内容を理解することが難しかったり集中できなかったりする児童にとって、効果的であったと思われる。

(2) 課題について

- ・ クラスワークのディベートによる議論は、発言する児童に偏りが出てしまい、児童A、児童Bともに発言ができなかった。思考ツールに書かれた内容を読み上げたりすることで、発言する児童以外の考えも学級内で共有していきたい。
- ・ 本学級在籍児童の話す速度が速かったり、情報量が多かったりすることで、特別支学級在籍児童の理解が追い付いていなかった。他の児童が発言した内容について教師が繰り返し言ったり、思考ツールを提示したりすることで、友達がどのように考えたかについて理解しやすくなるようにしていきたい。
- ・ 心情の変化の見取りが難しかった。児童が記入した内容について、さらに問い返しをすることで、どのように考えが変わったかについて見取りたい。

目次にカエルときは
ここをクリック

LINK



実践例 4	ICT 機器と思考ツールを活用した道徳科の実践	
	通常の学級	小学校

1 主題名 広い心 B－(11) 相互理解、寛容

2 教材名 「折れたタワー」

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」(以下解説という。)内容項目Bは、「主として人との関わりに関すること」であり、第5学年及び第6学年においての(11)は、「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重すること。」をねらいとしている。指導に当たっては、「広い心で自分と異なる意見や立場を尊重することで、違いを生かしたよりよいものが生まれるといったよさや、相手の過ちなどに対して、自分にも同様のことがあることとして謙虚な心、広い心で受け止め、適切に対応できるように指導することが大切である」としている。

(2) 児童生徒の実態

事前の実態調査の結果では、ほとんどの児童が過ちを犯した際に「許した。」「許してもらった。」経験があった。「わざとではないことや謝ってもらえたときは許すことができる。」と答えた児童もあり、これまでの生活の中で相手を受け入れたことがあるようだ。また、大体のことは許せると答える児童もあり、「許せる。」「許せない。」の基準は一人一人違うことが分かった。特別支援学級在籍の児童Aは「広い心とは、どんなことでも許す。」と答え、児童Bは「広い心とは、牢屋で言うと12畳分の心をもつ人だと思う。」と答えており、広さを数的なもので捉えてしまっていた。

(3) 教材について(「相互理解、寛容」 小学道徳「生きる力⑤」 日本文教出版)

本教材は、児童の日常生活においてありそうな場面が描かれている。ひろしは給食当番でマスクを忘れたことを、のりおに強く責められる。数日後、のりおに一生懸命作った作品を壊されてしまう。ひろしは悔しい思いをするが、のりおの故意ではない失敗を許す、という内容である。児童の実態についての事前アンケートで「状況によって許すか許せないか迷う。」と答えた児童が多くいたが、本教材では、まさに児童が迷いそうな場面が描かれている。授業の展開後半では議論するためのツールとしてディベートを取り入れることで、自分とは異なる意見を聞き、様々な視点から考えられるようにしたい。ディベートで出た児童の発言をつながけながら、本教材を通して、人間は誰でも失敗をしてしまうことがあるということに気付かせ、広い心で相手の過ちを許す心情や態度を育てていきたい。

4 道徳的価値に迫るための指導の工夫

(1) ロイロノート・スクールの思考ツールを活用し、ユニバーサルデザイン化(焦点化・視覚化・共有化)された授業を展開する。

(2) グループワークでの話し合い活動とクラスワークでのディベートを取り入れることにより、議論を通して、様々な視点から考えられるようにする。

5 学習指導過程

(1) 本時のねらい

自分の作品を壊された登場人物の気持ちについて、ICT機器の思考ツールなど様々な方法を用いて考える活動を通して「広い心」のもつ意味や大切なことについて自分の考えをもつことができる。

(2) 準備・資料 タブレット端末、挿絵の掲示物

(3) 展開

※道徳的価値に迫るための指導の工夫□

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される児童の反応	指導上の留意点 ㊦評価
導 入	1 「許せること」と「許せないこと」について話し合う。 ・「許せること」と「許せないこと」には、どんなことがあるか考える。 2 課題を確認する。 「広い心」について考えよう。	・わざとでなければ許す。 ・初めての失敗なら許す。 ・一生懸命やっているのにバカにされると許せない。 ・友達を悪く言われると許せない。	・ねらいとする価値への方向付けを行う。 ・事前のアンケートの結果を数例紹介することで、自分の中の「許せること」「許せないこと」の基準をイメージできるようにする。 ・課題の「広い心」と「許せる・許せない」がどのようなつながるか意識できるように、呼びかけてから展開に入っていく。
展 開	3 「折れたタワー」のひろしの立場になって、自分だったら、のりおを「許せる。」か「許せない。」かについて理由とともにスケール上に入力することで考えを整理する。 ○自分だったら、作品を壊したのりおを許せますか。 4 整理した考えをもとに、話し合う。 ・グループで考えを共有する。 ・「許せる。」と「許せない。」に分かれてディベートをする。 ・ディベート後の自分の考えをスケール上に入力する。 5 「広い心」のもつ意味や大切なことについて自分の考えをまとめる。 ◎「広い心」とは、どういうことか、まとめましょう。	【許せる】 ・ふざけていたわけではないから。 ・掃除をしていてぶつかってしまったから。 ・自分も忘れ物をして迷惑をかけてしまったから。 【許せない】 ・大切な作品だから。 ・持ち帰って家族に見せるのを楽しみにしていたから。 ・自分が忘れ物をしたときには許してもらえなかったから。 ・議論が進むにつれ、視点が広がったり、立場が変わったりすることも予想される。 ・はじめは許せないと思っていたが、わざとではなさそうだし、謝っているから許してもいいかなと思った。 ・はじめは許せると思っていたが、自分は謝っても許してもらえなかったときのことを思い出して、やっぱり許せないと思った。 【広い心とは】 ・わざとではないことを許すことである。 ・謝ることを受け入れること ・自分とは違っても認めることである。	・教材文は事前に読んでおき、本時では内容を簡単に確認するだけにし、考えを整理したり話し合ったりする時間を多くとれるようにする。 ・教材文の終末部分のひろしがのりおを許した部分は伏せておき、先入観をもたずに自分の立場で考えられるようにする。 ・スケールへの記入はワークシートとタブレット端末から、使いやすい方を自由に選べるようにする。 ・クラスワークの前に、少人数のグループで考えを共有し、安心してディベートに入れるようにする。 ・ディベートが勝ち負けではなく、自分と違う考えを知ったり新しい発見をしたりする場であることをおさえない。 ・「広い心とは」や「大切なことは」の書き出しを提示しておき、スムーズに書き始められるようにする。 ◎ 「広い心」について、自分なりの考えをもつことができたか。(発言・ワークシート)

終 末	6 学習の振り返りを書く。		・使い慣れた形式の振り返りシートを使って本時の振り返りをし、自分と向き合えるようにする。
	7 教師の話を聞く。 ・教材文の終末部分を読む。		・事前アンケートで出てきた児童の意見とつなげる。

6 指導方法の工夫

(1) 特別支援学級における事前学習の工夫

今回は、教科書の読み物教材を使った授業であるが、特別な支援を必要とする児童には、内容理解が難しいことが予想された。そのため、特別支援学級での事前学習を行った。特別支援学級担任と事前に教材を読み、おおまかな内容の把握をしておいた。

(2) 授業の初めにスタートをそろえる工夫

導入では、挿絵に簡単な文字情報を入れた挿絵を使ったスライド（確認後は印刷したものを黒板に掲示）で、登場人物や話の流れを確認した。特別支援学級在籍児童が事前学習をしていた内容を、ここで他の児童と再度確認し、スタートをそろえてから授業に入った。

(3) グループワークによる話合いの工夫

学級全体の前で発言することは緊張するが、少人数の前では安心して発言できる児童もいる。そこで、クラスワークでのディベートの前に少人数でのグループワークを行い、安心して取り組めるようにした。

7 授業の実際

(1) 導入について

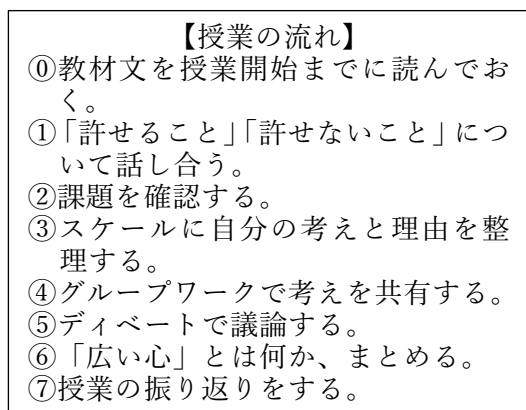
〈図1〉は授業の流れである。見通しをもって授業に臨めるように全体で授業の流れを確認した後に、「許せること」と「許せないこと」にはどのようなことがあるか考えた。

(2) 展開について

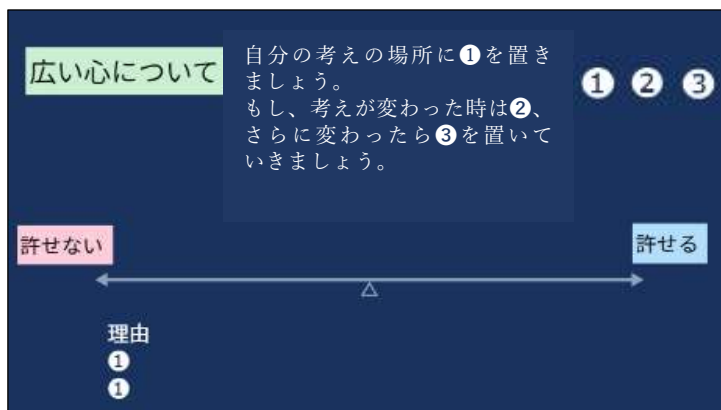
スケール〈図2〉は、ICT 機器のアプリであるロイロノート・スクールにある思考ツールである。スケールの一番右を「許せる。」、一番左を「許せない。」として、自分の考えに最も近い位置に①を入力して自分の意思を示した。また、その下にその理由を記入することで、なぜそう考えたのか思考を整理した。クラス全体で話し合う前に少人数グループで自分の考えを伝え合い、考えを共有した。グループワークやクラス全体での話合いをする中で、もし自分の考えが変わったら、スケールに②や③を記入することにした。「もう1回作ればいいから許す。」という意見が出た。

(3) 終末について

授業を通して、「広い心」とはどういうことなのか考えたことをワークシートに記入した。事前調査で、「広い心とは、牢屋で言うと12畳分の心をもつ人だと思う。」と答えていた児童Bが、授業後は「広い心とは、少しのことなら許せることと、リトライできるものだったら許せる。手伝ってくれるものなら許せる。」と答え、本来の心の「広さ」を捉えられたという変容が見られた。



〈図1〉 授業の流れ



〈図2〉 スケール（思考ツール）

8 成果と課題

(1) 成果

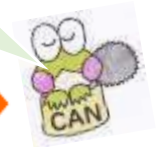
- ・ 事前に特別支援学級で教材文を読んだ上で、授業の導入で挿絵を利用したスライドを見せたことで、より深い内容理解ができ、授業中の考えを深め合う時間を確保することができた
- ・ 前回の授業でディベートに参加できなかった児童も少人数のグループワークを取り入れたことで、ディベートで自分の考えを積極的に発言することができた。また、他の児童との意見交換を行うことで、本来の心の「広さ」を捉えることができた児童もいた。
- ・ スケール上に心情の変化の見取ることができた。自分の考えを数字で入力することで、言葉による表現が難しい児童にとっても、意志決定がしやすかった。

(2) 課題

- ・ 児童A、児童Bともにグループワークでは発言できたが、クラス全体の話し合いにおける発言はなかったため、自信をもって発言できるような工夫が必要であると感じた。
- ・ 今後も心情の変化を確かめる時間を十分に確保することが必要であると感じた。
- ・ 揺さぶりをかける発問の工夫について、引き続き研究していきたい。

目次にカエルときは
ここをクリック

LINK▶▶▶



実践例 5	小学校低学年における体験的な活動と関連付けた道徳科の実践	
	自閉症・情緒障害特別支援学級	小学校

1 主題名 気持ちのよいあいさつ 内容項目 B－8「礼儀」

2 資料名 「あいさつはだれのため？」

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

本主題は「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」の内容項目 B「主として人との関わりに関すること」であり、第 1 学年及び第 2 学年においての(8)は、「気持ちのよい挨拶、言葉遣い動作などに明るく接すること」をねらいとしている。

「礼儀は相手の人格を尊重し、相手に対して敬愛する気持ちを具体的に示すことであり、心と体が一体となって表れそのよさが認められる。礼儀正しい行為をすることによって、自分も相手も気持ちよく過ごせるようになる」、また「よい人間関係を築くためには、まず相手に対して真心がこもった気持ちのよい応対ができなければならない」と記されている。

人との関わりの中で困難さを抱えている本学級の児童に対して、まず人と人との関わりの第一歩となる挨拶の学習を、体験を通して実感的に理解を深めさせることで道徳的实践意欲を深めたい。

(2) 生徒の実態について

本学級には 1 学年児童男子 5 人が在籍している。挨拶の大切さについては理解しているが、自分から進んで挨拶する児童は 5 人中 3 人である。しかも、その挨拶は自分と関わりのある人に対しての挨拶であり、関わりの少ない人に対しては進んで挨拶をすることは難しい。他の 2 人の児童は自分から挨拶をすることが苦手で、相手から言われて挨拶を返すことが多い。

交流及び共同学習を行っている通常の学級（以下、「交流学級」という。）の道徳の時間に「挨拶」の授業は実施しており、一日の生活の中でどのような挨拶があるかも学習している。また、毎月の目標の中で「あいさつ」を目標に掲げている時もあり、挨拶の大切さは十分認識していると思われる。しかし、実際の生活場面になると、朝の挨拶などパターン化されたものはできていても、場に応じた挨拶となると促されて行っていくことが多い。5 人の児童の交流学級での道徳科の授業の様子は、他者の視点で考えることの難しさ、友達の発表を聞いて考えを深めることの難しさ、気持ちを言葉に表すことの困難さがある。

(3) 教材について（NHK for School の動画教材「あいさつはだれのため？」）

本教材は、友達に挨拶をされても考えごとをしていて挨拶を返さなかった主人公が、夢の中で誰からも挨拶をしてもらえず悲しい思いをすることで挨拶の大切さに気付くという内容である。視覚優位の児童が多いので、動画や場面絵を用いることで状況を把握しやすくする。

登場人物の役割演技をして、挨拶をする方と挨拶をされる方のどちらの気持ちも体験することで、相手から挨拶を返してもらった時の気持ち良さを感じられるようにしたい。また、どのような表情や声の大きさで行うとお互いに気持ちが良いのかも味わえるようにしたい。授業が終わった後の日常の生活においても、誰に対しても自分から気持ちのよい挨拶をしようとする態度を養っていきたい。

4 道徳的価値に迫るための指導の工夫

(1) 動画や場面絵を使用することで、児童が教材の内容を容易に理解できるようにする。

(2) 登場人物の気持ちになりきって役割演技を行うことで、自分事として考えられるようにする。

5 学習指導過程

※道徳的価値に迫るための指導の工夫□

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される児童の反応	指導上の留意点 ④評価
導 入	1 今日の挨拶の様子を発表する。 ・今朝、学校に来るまでに、誰にどのような挨拶をしたか共有する。	・おかあさんに「おはよう」と言った。 ・校門の前で校長先生に「おはようございます」と言った。	・起床時から登校中まで、具体的な場면을提示することで考えやすくする。
展 開	2 「あいさつはだれのため？」を見て話し合う。 ○夢の世界で、みんなから挨拶してもらえないとき、がんこちゃんはどうな気持ちだったでしょうか。 ○目が覚めて、がんぺーから「おはよう」と挨拶を返してもらった時、がんこちゃんはどんな気持ちだったでしょうか。 3 がんこちゃんとがんぺーちゃん役割演技をする。 ◎挨拶をされないとどんな気持ちになるか考えてみよう。 ○ヒポ先生に『笑顔でおはようと言ってくれたことが、もっと嬉しい』と言われたとき、がんこちゃんは、どんなことを考えたでしょう。	・さみしい。 ・嫌な気持ち。 ・みんなに無視されて悲しい。 ・うれしい。 ・大切にされている気がする。 ・あいさつは、ちゃんとしてよう。 ・挨拶をされないとやっぱり嫌な気持ちがした。 ・挨拶をしてもらったほうがうれしい気持ちになった。 ・喜んでもらえてうれしい。 ・笑顔で挨拶をしてよかった。 ・これからも毎日挨拶をしよう。	・児童が教材の内容を容易に理解できるように動画教材を使用する。 ・挨拶をしても返してもらえない時の気持ちをがんこちゃんになりきって考える。 ・挨拶を返してもらった時の気持ちをがんこちゃんになりきって考える。 ・全員にがんこちゃんとがんぺーちゃんの演技をすることで両方の気持ちを理解できるようにする。 ・挨拶をしたことで自分だけでなく、相手も喜んでくれたことに気付くことができるようにする。
終 末	4 自分の生活について振り返る。 ・ワークシートに記入する。	・友達の鉛筆を拾ってあげた時ありがとうと言われてうれしかった。 ・あいさつをしたらほめられてうれしい気持ちになった。	④挨拶をしてよかった経験や、これからの自分の行動について考えることができたか。 (発表・ワークシート)

6 指導方法の工夫

(1) 児童の特性に応じた教材の工夫

視覚優位の児童が多い実態から、読み物教材ではなく NHK for School の「新・ざわざわ森のがんこちゃん」の動画「あいさつはだれのため？」を使用した。児童が親しみを感じるキャラクターなので、興味をもって見ることができ、内容を理解しやすくなった。また、場面絵を時系列に沿って黒板に貼ることで(図1)、状況を把握しやすくなった。



〈図1〉黒板に場面絵を貼って状況を把握しやすくした

(2) 相手の立場や気持ちを体感する工夫

登場人物のお面を被ることで、児童は役割を意識して、より積極的に活動に取り組んだ(図2)。また、役割演技を交替して、両方の立場を体験することで、挨拶をする側とされる側という両者の気持ちを考えることができた。

(3) 自立活動につなげる工夫

自立活動で「めざせ、あいさつの達人」という授業を設定し、相手にとってどのような挨拶が気持ちのよい挨拶なのかを学習した（図3）。相手の顔を見て、笑顔で自分から進んで行う挨拶を最高のレベル4の挨拶と位置付けて、挨拶の練習を行った。

今回の道徳科の授業の後に実施したことで、児童の実践意欲も高まり、自分から進んで挨拶ができるようになった。



〈図2〉役割演技の様子



〈図3〉自立活動で使用した掲示物



〈図4〉ワークシート

7 授業の実際

(1) 導入について

「今日、学校に来るまでに誰にどんな挨拶をしたか。」について質問することで、挨拶に関する自分の行動を振り返ることができるようにした。

(2) 展開について

動画を視聴した後にあらすじを確認した。今回の教材では、現実の場面と夢の中の場面という二つの場面が出てきた。児童が混乱することが予想されたため、二つの場面の違いを丁寧に確認した。板書構成では、場面絵を提示することで状況を把握できるようにした。役割演技の場面では、お面を用意することで、自分と相手が誰の役割を行うのかについて分かるようにした。役割を交替することで挨拶をする側と挨拶をされた側の両者の気持ちを体感できるようにした。ワークシート（図4）では吹き出しに気持ちを記入できる形式にして、書くことへの負荷を軽くした。また、言葉で書くことが難しい場合には、表情マークで記入するようにした。

(3) 終末について

自分の生活について振り返り、ワークシートに記入した。挨拶をしてよかった経験や、これからの自分の行動について考えることができた。

8 成果と課題

(1) 成果について

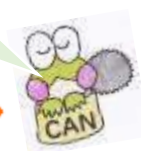
- ・ 動画教材を用いたことで、児童は興味をもって資料に入り込むことができた。
- ・ 役割演技を取り入れたことで、児童が登場人物の気持ちを理解しやすくなった。
- ・ 自立活動の授業と関連付けて行ったことにより、挨拶についての意識が高まり自分から進んで挨拶をしようという態度や意欲が見られるようになった。

(2) 課題について

- ・ 登場人物が多かったことと、現実の場面と夢の中の場面が出てくることから、内容を理解するのが難しい児童もいた。内容を理解しやすい資料の精選が必要である。
- ・ 児童のつぶやきが拾える工夫が必要である。授業の中では本音と思われるつぶやきがたくさん聞かれたが、ワークシーに記入する時になると記入できない様子だった。今後は録音や録画等、ワークシート以外の活用も検討していく必要がある。

目次にカエルときは
ここをクリック

LINK



実践例 6	小学校低学年における体験的な活動と関連付けた道徳科の実践	
	自閉症・情緒障害特別支援学級	小学校

1 主題名 「ありがとうの気持ちをつたえよう」 内容項目 B－（7）「感謝」

2 資料名 「いつもありがとう」 自作資料

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

本主題は「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」の内容項目Bは「主として人との関わりに関すること」であり、第1学年及び第2学年においての(7)は「家族など日頃世話になっている人々に感謝すること」をねらいとしている。

「よい人間関係を築くためには、互いを認め合うことが大切であるが、その根底には、相手に対する尊敬と感謝の念が必要である。人々に支えられ助けられて自分が存在するという認識に立つとき、相互に尊敬と感謝の念が生まれてくる。そしてそれは日々の生活、あるいは自分が存在することに対する感謝へと広がる。感謝の気持ちは人が自分のためにしてくれるという事柄に気付くこと、それはどのような思いでしてくれているかを知ることによって芽生え育まれる」と記されている。ここでは、家庭や学校などで、日頃お世話になっている人々の存在に気付かせ、その人たちの自分に寄せる思いを知ることによって「ありがとう」という感謝の気持ちをもつことの大切さを考えさせたい。

(2) 児童の実態について

本学級の1学年男児5人は、相手から何かをしてもらった時に自分から「ありがとう」と伝えられる児童は5人中2人である。伝えられない3名については、感謝の気持ちを感じていても自分から言葉に出して伝えられない児童が1人、相手に何かしてもらっても当然と考える児童が1人、相手に何かしてもらっても「ありがたい」と思えない児童が1人である。何かをしてもらうことが当たり前のように思っていたり、自分のやりたいようにわがままを通してしまったりしている実態がある。交流及び共同学習を行っている通常の学級（以下、「交流学級」という。）で過ごすときには、様々な面で助けてもらうことの多い児童たちなので、自分から「ありがとう」という言葉が出てくるようにしたい。

(3) 教材について

児童にとって日常生活で関わってくれている人はたくさんいるが、児童の実態を考えると直接的な関わりがない人に対しては感謝の思いを抱きにくいことが考えられる。そこで、今回は児童にとって一番身近な存在である、家族と交流学級の先生を取り上げ、具体的に自分にどんなことをしてくれていたかを思い出すことによって、自分に寄せられた思いについて考え、そのとき感じた感謝の気持ちについて考えられるようにする。また、自立活動の「感謝の気持ちを伝えよう」で、感謝の気持ちを相手に伝える方法や態度を学び、実際に感謝の気持ちを伝える活動と連携することで、相手に感謝する気持ちをもち、具体的に言葉や態度で表そうとする気持ちを育てたい。

4 道徳的価値に迫るための指導方法の工夫

(1) いかに多くのことを自分のために家族や先生がしてくれていたかに気付くことが、実感を伴った理解につながると考える。日常生活の様々な場面を提示することで、その時の様子を思い出すことができるようにする。

(2) 自分の気持ちを考える活動では、言葉で記入することが難しい場合には表情マークで記入できるように、自分の分かりやすい方法を選択できるようにすることで、児童の思いを引き出すことができるようにする。

5 学習指導過程

(1) ねらい

家庭や学校など身近で日頃お世話になっている人々が、日頃自分に何をしてきているかを考え、その人たちの自分に寄せる思いを知ることによって、「ありがとう」という感謝の気持ちをもつこと

の大切さを考えさせたい。

- (2) 準備・資料
人物の拡大写真、短冊、ワークシート
- (3) 展開

※道徳的価値に迫るための指導の工夫□

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される児童の反応	指導上の留意点 ㊦評価
導 入	1 身近な人について考える。 ○「一日の中で一緒に過ごす時間が長い人は誰でしょう。」	・お父さん、お母さん ・おじいちゃん、おばあちゃん ・兄弟 ・先生 ・友達	・一日の中でどのような活動を誰と行っているかを振り返ることで、家族や教師と長い時間一緒に過ごしていることに気付くことができるようにする
展 開	2 交流学級の担任と家の人について考える。 ○「クラスの先生は、いつもどんなことをしてくれていますか。」 ○「家の人は、いつもどんなことをしてくれていますか。」 ○「クラスの先生や家の人に何かしてもらった時、どんな気持ちになりましたか。」 ○「その時に、何か言えましたか。」 3 感謝の気持ちを伝えよう。 ○「ありがとうの気持ちを伝えるにはどんな方法があるでしょうか。」 ○「誰に、何を伝えるか考えて、書いてみましょう。」	・勉強を教えてくれる。 ・困っているときに助けてくれる。 ・頑張ったときにほめてくれる。 ・ごはんを作ってくれる。 ・洗濯をしてくれる。 ・どこかに連れて行ってくれる。 ・いい気持ち ・嬉しい気持ち ・うれしいな ・ありがとう ・言えなかった。 ・ありがとうと言葉で伝える。 ・手紙を書く。 ・プレゼントを渡す。 ・お母さん、いつもご飯を作ってくれてありがとう。 ・お母さん、いつも送ってくれてありがとう。 ・担任の先生、勉強を教えてくれてありがとう。	・交流学級の担任や家族が、自分にしてくれたことを具体的に思い出させることで、普段は当たり前に行っていることにも感謝の気持ちをもてるようにしたい。 ・ワークシートにどんな気持ちがあったかを記入する。言葉で記入するのが難しい時には、表情マークで記入できるようにする。 (発表・ワークシート) ・言えなかったと答えた場合には、自分が感じた気持ちが相手に伝わっていないことを伝える。そのままでもいいのか揺さぶりをかける。 ・友達の発表を聞くことによって自分が考えた以外の方法にも気付けるようにする。 ・誰に伝えたいのかを明確にしてワークシートに書くようにする。 ㊦ ワークシートに自分のありがとうの気持ちを書くことができたか。 (発表・ワークシート)

		・おじいちゃん、お風呂に一緒に入ってくれてありがとう。	
終末	5 交流学級の先生からのメッセージを聞く。		・交流学級の先生からのメッセージを聞くことで、自分のことを見守ってくれたことに気づき、暖かい気持ちをもてるようにする。

6 指導方法の工夫

(1) 感謝の気持ちを伝える工夫

今回の授業の後、「自立活動」の授業に関連付けることで、児童が感謝の気持ちを伝える時間を設けた。以下は、実際に行った「自立活動」の目標と活動内容である。

○目標

- ・1年間お世話になった人に感謝の気持ちを伝える。

○活動

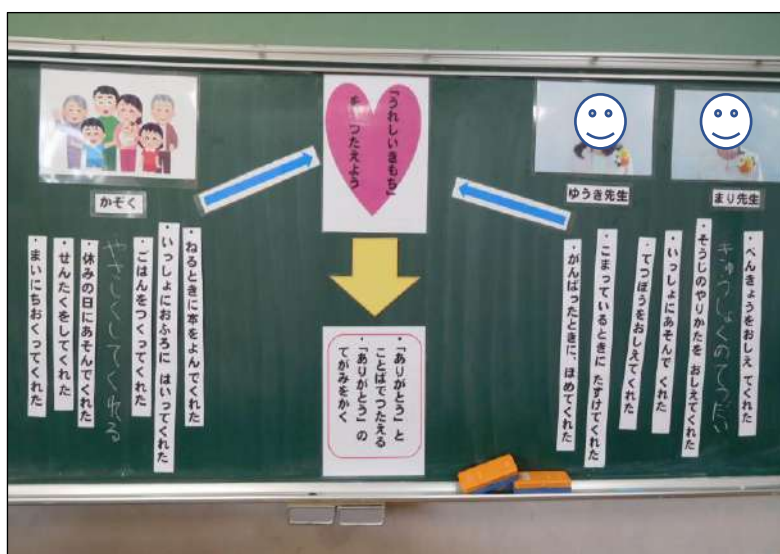
- ・自閉症・情緒学級の6年生、交流学級の先生に感謝の気持ちを伝える方法を考える。
- ・感謝の気持ちを伝える手紙とプレゼントを作る。
- ・感謝の気持ちを伝える態度について考え、実際に練習する。

(2) 視覚的に捉えやすい板書構成の工夫

視覚優位の児童が多いことや、板書の時間が長いと児童の集中が途切れてしまうことから、〈図1〉のように、キーワードとなる言葉は短冊で掲示した。また言葉だけでなく、写真や矢印等の記号を用いた。普段様々なことをしてもらっていることに気付くことで、「嬉しい気持ちを伝えよう」という思いにつながった思考の推移を可視化できる板書構成を心掛けた。

(3) 終末の工夫

児童と深いかわりのある交流学級の担任に、ビデオレターの製作協力の依頼をして、入学当初と比べて児童ができるようになったことや、その成長への思いを伝えてもらった。ビデオレターを児童に見せることで、自分の成長を支えてくれる人の気持ちや思いに気付かせ、感謝する気持ちを育てたいと考えた。



〈図1〉板書の工夫

7 授業の実際

(1) 導入について

「一日の中で一緒に過ごす時間が長い人は誰か」と問いかけることで、様々な人と接しているが、家族や交流学級の先生と長い時間かかわっていることに気付くようにした。児童が自ら気付くことで、本時の展開に自然に入っていけるようにした。「こんなに長い時間、学校にいるんだ」と改めて学校で過ごす時間の長さに気付いた児童もいた。

(2) 展開について

家族や交流学級の教師がどんなことを自分にしてくれているかを具体的に振り返る活動を行った。家族に対しては「毎日ごはんを作ってくれる、洗濯をしてくれる、休みの日にはどこかに連れて行ってくれる、寝るときに本を読んでもくれる」など自分に対してしてくれていることを振り返ることができた。交流学級の先生についても「勉強を教えてくれる、掃除の仕方を教えてくれ、休み時間に遊んでくれる、困った時に助けてくれる、頑張ったときにほめてくれる」など、それぞれが自分に対してしてくれたことや声をかけてもらったことを思い出しながら発表をすることができた。



〈図2〉 交流の学級の先生からのビデオレターの様子

(3) 終末について

〈図2〉は交流学級の教師からのビデオレターの様子である。児童たちはとても嬉しそうな表情で、目を輝かせながら集中して見ていた。自分たちのよさや大切にされていることに改めて気づき、「嬉しい気持ちが出た」「大事にされていると感じた」と温かい気持ちになったことを感じた。すると「何かしてあげたい」、「自分の感じたこの嬉しい気持ちを伝えたい」という言葉が、児童たちから自然に出てきた。

8 成果と課題

(1) 成果について

- ・ 児童にとって身近な存在の人を対象にしたことで、お世話になったことや関わってもらったことを、実体験に基づいて考えることができた。
- ・ 交流学級の先生からのビデオレターは、児童にとって心に迫るものがあった。「早く自分の気持ちを伝えたい。」という、感謝の気持ちが自然にわき起こってくるのに有効であった。
- ・ 自立活動と関連付けて授業を行ったことで、その後の感謝の気持ちを伝える活動にも意欲的に取り組むことができた。どんな態度で気持ちを伝えると良いかについて自分たちで考え、〈図3〉のアイロンビーズのキーホルダーを作ることにした。手紙を添えて渡し、児童たちはとても満足した様子だった。相手が喜んでくれたことが、児童の道徳的心情や実践意欲と態度を養うことにもつながったと考えられる。



〈図3〉 制作したアイロンビーズ（のキーホルダー）

(2) 課題について

- ・ ワークシートにマス目がある方が記入しやすい児童もいた。また、書き出しの文を書いておくなどの手立てがあると、何を書いたら良いのかが分かりやすくなる。児童の実態に応じたワークシートの工夫を行っていきたい。
- ・ 道徳科の授業は、言葉で自分の気持ちを伝え合う場面が多い。日常生活を通じて語彙を増やし自分の気持ちを言葉で伝えられるようにする必要がある。また、言葉を知っていても、直接の行動と結び付いていない傾向が見られるので、言葉と行動を丁寧に繋げていく必要がある。

目次にカエルときは
ここをクリック

LINK



実践例 7	異学年の学習形態を取り入れた道徳科の実践	
	自閉症・情緒障害特別支援学級	中学校

1 主題名 公平・不公平の判断で大切なことは何か 内容項目 C—(11)公正, 公平, 社会正義

2 教材名 「公平と不公平」

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

本主題は、「中学校学習指導要領解説特別の教科 道徳編」の内容「C 主として集団や社会との関わりに関すること (11) 公正、公平、社会主義」の「正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること」をねらいとしている。

人は他者とのかかわりにおいて生きるものである。公平に接するためには、偏ったものの見方や考え方を避けるように努めること、好き嫌いの感情にとらわれず、誰に対しても分け隔てなく接し続けようとするのが重要である。中学校の段階では、公の事と自分の事との関わりや、様々な社会の中における自分の立場に目を向け、その場の状況や相手の立場を考慮した判断ができるようにすることが大切であると考え。本時では、「公平か、不公平か」と決めることだけにとどまらず、それらを判断する際に大切なことについても考えることができるようにしたい。また、自分の考えを他者に伝え合う活動を通して、よりよく生きたい、差別や偏見のない社会にしたいという思いにつながるような道徳的実践意欲を育てたいと考え、本主題を設定した。

(2) 生徒の実態 (第1学年4人 第3学年2人 計6人) 実態調査 実施日 令和3年9月22日

1 「公平・不公平」とは、どんなことを意味しますか。

生徒A 公平とは良いこと、不公平とは悪いこと。

生徒B 公平とは平等、不公平とは不平等。

生徒C 公平とはみんなが同じ扱いのこと、平等。公平とはみんなが同じじゃないこと、不平等。

生徒D 公平とは相手と同じようにすること。不公平とは、相手とは違う行動や言動をすること。

生徒E 公平とは差別もなく誰もが同じ扱いを受けること。不公平とは他の人とは違う特別な扱いを受けること。

生徒F 公平、不公平と聞いたら、「人権」という言葉が浮かんだ。

2 最近、不公平だと感じたことはありますか。

はい (3)、いいえ (3)

3 具体的には、どのようなことについて最近、不公平だと感じましたか。

生徒B 親が「お兄ちゃんでしょ」と妹をひいきする。

生徒C 弟は自分をバカにしているし、相手によって態度を変える。

生徒D 妹と比較をされている。

本学級の生徒は、自分に自信がもてず人間関係に不安を感じていたり、好ましい人間関係を築けなかったりすることが多い。「公平・不公平」について自分なりの考えをもっていても、大きな集団の中で自分の意見を表すことは難しい。そのため、周囲に不正があっても多数の意見に同調したり、傍観したりするだけで、勇気を出して制止することはできない。生徒一人一人が安心して意見を述べ、互いに学べる場として、異学年による小集団の学習形態を設定する。生徒が「公平とはどのようなことなのか」について様々な場面を通して考えを深め、自ら判断し、実践しようとする意欲や態度を育てたい。

(3) 教材について (「公平と不公平」 中学校道徳「あすを生きる①」 日本文教出版)

本教材は、3つの場面を想定した事例から構成されている。事例Aは「年齢の違いによってお年玉をもらえる金額が違う」、事例Bは「コンサート会場に入場する際、車いすの人は優先して

入場できる」、事例Cは「字が上手だからという理由で学級の班活動でのまとめを一人で行う」場面である。まず、事例Aを本時の「導入」で取り扱う。生徒は年齢の違いによってお年玉もらえる金額が違うことは公平か不公平かについて考え、自分の考えを発表する。次に、「展開」で事例Bと事例Cに取り組む。公平か不公平か判断した理由をワークシートまたはロイロノートに記入する。そして、話し合いを通して他者の意見を聞くことで、自分の考えを深めることができるようにする。事例A、B、Cのそれぞれの場面において、主人公や主人公とかわる登場人物の立場から考える活動を通して、相手の立場や状況を理解して考え、判断することの大切さに気付けるようにしていきたい。

4 道徳的価値に迫るための指導の工夫

- (1) 事例内容を日常に置き換えて説明し、身近な自分事として考えられるようにする。
- (2) 小集団の中で、互いの考えを伝え合い、自分の考えを深められるようにする。
- (3) ワークシートまたはICT機器であるロイロノートを選択し、自分の考えを記入する。

5 学習指導過程

- (1) ねらい
公平か不公平は何に基づいて判断するのか考え、伝え合う活動を通して、差別や偏見のない社会にしていきたいという願いをもち、よりよく生きようとする道徳的実践意欲を育てる。
- (2) 準備・資料
ICT機器（ロイロノート）、ワークシート、場面絵、モニター
- (3) 展開

※道徳的価値に迫るための指導の工夫

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点 ④評価
導入	1 「公平」とはどんなことを意味するのかを考える。 【事例A】 年齢の違いでお年玉の額が違うことは公平か。	- 平等であること。 - 差別もなく誰もが同じ扱いを受けること。 【事例A】 - 同じお年玉なのに額に差があるのは不公平だ。 - その歳になって、増額してもらえるならば納得する。	- アンケート結果を紹介する。 【事例A】では主人公と主人公のお姉さんの気持ちや考えを問いかけながら公平か不公平かについての考え方を引き出す。 - 生徒にとって身近な内容について取り扱うことで、興味や関心を高め、価値への方向付けをする。
展開	2 教材「公平と不公平」を読み、話し合う。 ○ 私たちは生活の中で様々な場面に出会う。次の場面は「公平」といえるか。 【事例B】 コンサート会場に入場する際、車いすの人は優先して入場できる。	【事例B】 - 他のお客さんが大勢いるのなら、特別扱いはせず並ぶべきだ。 - 体の負担を考えれば、配慮として必要である。	- 事例を身近な日常に置き換え確認する。 - 考える時間を十分に確保し、公平かどうか、その判断の理由も考え、生徒自身が大切にしている価値に気付くことができるようにする。 - 公平、不公平の判断ができない生徒は、その理由を丁寧に聞き取り、尊重する。

	【事例C】 字が上手だからという理由で学級の班活動でのまとめを一人で行う。 ・「公平」といえるのかを判断する。 ・判断した理由を、ワークシートまたはロイロノートに記入する。 ・ホワイトボードの「公平」か「不公平」かの場所に自分のネームを貼る。 3 考えたことを話し合う。 【事例B】 障害があることで優先して会場に入ることについて、どう思うか。 【事例C】 字が上手だという理由で、班長がCさん一人にまとめをお願いすることは公平か。 ◎3つの場面から「公平」「不公平」を判断するとき大切にしなければならないことは何だろう。	・同じお金を払っているのに不公平だ。 【事例C】 ・本人を含めて話し合いの結果なら良いと思う。 ・本人が納得しなければ不公平だと思う ・他の人が別の役割をするなら公平にできる。	・記入しやすいのは、ワークシートかロイロノートかを生徒が自ら選択することで、書字が苦手な生徒も取り組みやすいようにする。 ・発表が苦手な生徒には、視点カードを参考にするように伝える。 ・事例Bでは主人公と車椅子の人、係員などの気持ちや考えを生徒から引き出せるような問いかけをする。 ・立場が逆転した場合はどうなのかなど、様々な視点で考えをもてるようなアドバイスをする。 ・生徒一人一人が公平か不公平かを判断した理由について、発表を通して聞き取り、さらに状況に応じて質問し、具体的な意見を引き出せるようにする。 ・話し合いでは、意見が偏らないよう逆の立場になって考えてみるように促す。 ・誰に対しても公平にするためには相手の立場や状況をよく理解していくことが大切であることを生徒の意見を基に気付くことができるようにする。
終末	4 振り返りながら、自分の考えをまとめる。 ワークシートまたはロイロノートに記入する。	・相手の立場や状況を理解する。 ・差別や偏見をしない。	◎公平・不公平を判断するためには、相手の立場や状況を理解することが大切であることを考えることができたか。 (発表、記述) ・記入しやすいのは、ワークシ

			ートかロイロノートかを選択させることで、書字が苦手な生徒も取り組みやすいようにする。
--	--	--	--

6 指導の工夫

(1) 自分の考えを基に表現することができる工夫

異学年による小集団での学習形態を取り入れ、互いの考えを伝え合い、自分の考えを深めることができるようにする。〈図1〉は、グループでの話し合いの様子である。第3学年と第1学年の生徒によるグループを編成した。グループ編成については、生徒が多様な見方や考え方に接しながら、更に新しい見方や考え方に触れることができることを願って教師が意図的に決めることとした。



〈図1〉グループでの話し合いの様子

(2) 自分の考えを表現しやすい方法で記入する工夫

自分の考えを表現しやすい方法で記入することができるように、ワークシートかロイロノートか、生徒が自ら選べるようにした。〈図2〉は、公平か不公平かについての判断理由を記入している様子である。生徒は自分の考えを表現しやすい方法を選んで、取り組むことができた。選択肢を作ること、発達性協調運動障害があり、ワークシートに記入することが難しい生徒も取り組みやすくなるように配慮した。



〈図2〉公平か不公平かについての判断理由を記入している様子

(3) 体験的行為を取り入れた工夫

〈図3〉は、車椅子の体験の様子である。車椅子に乗るだけではなく、車椅子を押してみることも体験できるように配慮した。体験的な学習を通して、様々な立場で感じたことや考えたことを深め、話し合いに生かすことができるように工夫した。



〈図3〉車椅子体験の様子

7 授業の実際

(1) 導入について

「公平」の意味について考えたり、事例Aを通して学習の進め方を確認したりした。

(2) 展開について

事例Bと事例Cについて考える時間を十分に確保し、公平かどうか、その判断理由も考えることができるようにした。判断理由はワークシートまたはロイロノートに記入することで、書字が苦手な生徒も取り組みやすくなった。まず、判断理由を話し合う前に、「公平」「不公平」について自分が判断した方に、ホワイトボードにネームを貼ることで他者の考えを視覚的に知ることができるようにした。「公平」「不公平」の判断ができない生徒には、その理由を聞き取り、「悩む」という項目を設定した。3つの事例から「公平」「不公平」を判断するときに大切なことを考え、発表した。〈図4〉は、生徒の判断や話し合いの内容を視覚的に示した板書である。生徒は板書を見ることで、生徒それぞれの考えや、話し合った内容について理解しやすくなった。話し合うグループは意図的に教師が決めたことで、多様な考えを知ることができた。

(3) 終末について

終末の振り返りでは、生徒がワークシートまたはロイロノートに記入することとした。以下に示すような記入や発言が見られた。

生徒A：判断する時は、いろんなことに注目して優先したいことを決めていきたい。

生徒 B：授業を通して、相手の気持ちや立場を考えることが大切であることがわかった。

生徒 C：判断理由が決まらず名札を「悩む」に貼った。これまで「公平」「不公平」などをあまり考えることがなかったので、これからは少し考えてみようと思う。

生徒 D：授業を通して相手のことを理解して、尊重することが大切だと改めて感じる事ができた。

生徒 E：自分が不公平だと感じたことでも、相手の立場や状況を理解して行動していきたい。

生徒 B、D、E は、相手の立場や状況を理解することが大切であることについて、記入したり発言したりしており、本時のねらいは達成できた。生徒 A、C は、これまでより視野を広めて考えていきたいという記述や発言から、相手の立場や状況について考えることができた。



〈図 4〉生徒の判断や話合いの内容を視覚的に示した板書

8 成果と課題

(1) 成果について

- ・ 第1学年と第3学年による異学年の学習形態とすることで、良い緊張感があり、生徒が多様な見方や考え方に接することができた。
- ・ 名札を掲示することで、自分の判断と他の生徒の判断を比較し、どこが同じでどこが違うのかななどを視覚的に確かめることができた。
- ・ 車椅子体験は事例の内容を理解する手立てとなり、生徒が自分の感じ方、考え方を交えながら話合いを深めることができた。

(2) 課題について

- ・ ロイロノートを用いた質問では、事例ごとにシートを分けたため、入力に時間がかかった。シート1枚に記入できるように改善したい。
- ・ ICT機器を活用すれば、ミニホワイトボードを使用しなくても画面上で共有することができ、活動時間増やすことができる。
- ・ 終末で自らの生活や考えを見つめ直すために、振り返りができる時間の確保が必要である。

目次にカエルときは
ここをクリック

LINK



実践例 8	異学年の学習形態を取り入れた道徳科の実践	
	自閉症・情緒障害特別支援学級	中学校

1 主題名 つながる生命 内容項目D－(19) 生命の尊さ

2 教材名 「ゆうへー生きていてくれてありがとうー」

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

本主題は、「中学校学習指導要領解説特別の教科 道徳編」の内容「D 主として生命自然、崇高なものとの関わりに関すること (19) 生命の尊さ」の「生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること」をねらいとしている。

中学生の時期は比較的健康的に過ごせるため、生きていることが当たり前で自分の命が危険にさらされる状況になることは考えにくい時期といえる。また、身近な人の死に接したり、人間の生命の有限さやかけがえのなさに心を揺り動かされたりする経験をもつことも少なくなっている。人間の生命のみならず、生きとし生けるものの生命の尊さや、生命のあるものは互いに支え合って生き、生かされていることに気付くことができるように指導していきたい。本時では、生徒が筆者や家族の思いについて考える活動を通して、周りの人々の思いの上に自分が生きていること、誰もがかけがえのない存在であることを理解できるようにする。そして、互いの存在を大切にしようとする道徳的心情を育てたいと考え、本主題を設定した。

(2) 生徒の実態 (第1学年5人 第3学年2人 計7人) 実態調査実施日 令和4年1月20日

1 突然、家族を失うことになったら、自分はどうなるだろう。

生徒A (第1学年) 絶望。

生徒B (第1学年) 悲しい。

生徒C (第1学年) 悲しくて、言葉も何も出なくなる。

生徒D (第1学年) 一人ぼっちで寂しい。悲しくてずっと家族に会いたいと思い続けている。

生徒E (第1学年) 悲しい。

生徒F (第3学年) 悪いことをしていないのに、一瞬にして命を奪われてしまったことを受け入れられない。

生徒G (第3学年) 分からない。考えたことがない。

本学級の生徒は、情緒面で不安定だったり、自立心が十分に育っていなかったりするなど、実態に個人差がある。また、朝から毎日登校することが難しい生徒が3人いる。学校生活においては、自分に自信がもてないことや同級生と互いの存在を尊重できずに人間関係を上手く築けない生徒もいる。在籍生徒は、家族からかけがえのない存在として深い愛情をもって育てられていることが心の支えとなり、特別支援学級を居場所として過ごすことができる。他者へ考えを整理して伝えることが苦手な生徒もいるが、互いを受け入れながら活動することができる。

(3) 教材について

阪神・淡路大震災によって息子を失った、筆者・たかいちづさんの手記に基づいた絵本や動画を活用する。筆者が息子を救えなかった後悔と、自分は生きていることの自責の念に挟まれ、生きる希望を失ったことが書かれている。また、亡くなった息子と双子で、助かったもう一人娘も苦しみを抱えながら自分を励まし続けてくれていたことを知り、これからの時間を大切にすることが、亡くなった息子も含めた、自分たち家族の人生を輝かせることになると気付いたことが書かれている。この手記から、生きていることは当たり前ではなく、多くの人々の支えによって「生かされている」存在だと気付くことができる。また、保護者からの東日本大震災の時の我が子への思いを事前アンケートにより調査した。保護者の思いは、我が子を守る強い思いとかかけがえのない存在であることが記されている。

4 道徳的価値に迫るための指導の工夫

(1) 補助的な教材として、筆者の絵本や動画を使用することで、状況を把握しやすようにする。

(2) 保護者の協力を得て、東日本大震災直後に考えたことや万が一我が子を失っていたらどんな生

き方になっていたかを答えてもらい、「保護者からのメッセージ」として展開の部分で活用する。

(3) 生徒が安心して意見を伝えられる雰囲気と互いに学び合える場作りを心掛ける。

(4) 自立活動と関連させ、事後の学習を行う。人間関係の形成 3－(2)

5 学習指導過程

(1) ねらい

多くの人々の支えによって生きていると気付くことで、誰もがかけがえのない存在であると理解し、互いの存在を大切にしようとする心情を育てる。

(2) 準備・資料

大型モニター、ワークシート、保護者からのメッセージ

(3) 展開

※道徳的価値に迫るための指導の工夫

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点 ㊦評価
導入	1 阪神・淡路大震災について知る。「1・17 再現」(39 秒) 2 本時のめあてを確認する。 生命のつながりとは何か	・怖い。 ・阪神・淡路大震災を初めて知った。	・震災の動画を視聴することで、教材への関心を高め、不慮のできごとで、命の危険にさらされることに気付くことができるようにする。
展開	3 教材「ゆうへー生きていてくれてありがとうー」を読み、考える。 ○しょうくんを失った、たかいさんの気持ちを想像してみよう。 ○突然、家族を失うことになったら、自分はどのようなだろう。 ○たかいさんはどんな思いから、しょうくんのもとには行かず、ゆうちゃんと一緒に生きることを選んだのだろう。 ○東日本大震災は、たかいさんの心にどんな影響を与えたのだろう。 ○東日本大震災で我が子を失っていたら、親はどん	・生きていることが辛い。 ・助けることが出来なかったことへの後悔。 ・守れなかった。 ・絶望、悲しい。 ・言葉が何も出なくなる。 ・一人ぼっちで寂しい。 ・家族に会いたいと思いつけている。 ・命を奪われてしまったことを受け入れられない。 ・生きているゆうちゃんや家族をもっと悲しませてしまう。 ・しょうくんのことは忘れられないし辛いけど、目の前にいる家族を大切に生きていきたい。 ・ゆうちゃんがずっと励ましてくれていたことに気づいた。 ・成長したゆうちゃんとして話そうと決意した。 ・立ち止まっている自分に気づいた。 ・悲しんでいると思う。	・阪神・淡路大震災で息子を亡くした、高井さんの思いを感じとることができるように教師が朗読をする。 ・しょうくんを失った筆者の深い悲しみに共感できるようにする。 ・東日本大震災が発生した 11 年前は、幼い子供であったことを伝え、自分事として考えることができるようにする。 ・生徒の言葉を復唱することで、他の生徒の思いを感じ取ることができるようにする。 ・高井さんは生きていく上で、娘のゆうちゃんをはじめ周りの人の存在が大切だと気付いたことで、前向きになれたことを共感できるようにする。 ・年表を使い、時間の流れを視覚的に知ることで、簡単に立ち直ったわけではないことを押さえた上で、高井さんの思いを考えることがで

	な気持ちで生きていたの だろう。 ◎今の自分が存在するの は、どうしてだろう。	・考えたことがないから分からない。 ・助けることができなかったことに責任を感じている。 ・家族が支えてくれている。 ・友達がいるから頑張れている。 ・家族の一員であるペットも大切な存在で支えてくれる。	きるようにする。 ・保護者からのメッセージを読むことで、自尊感情を高めることができるようにする。 ・生きていくうえで親をはじめ周りの人の存在が大切であることに気付くことができるようにする。 ◎生きていることがあたりまえでないことに気づき、命のつながりや支え合いに関する発言や記述が見られたか。(ワークシート)
終 末	4 今日の学習の内容を振り返る。	・自分は支えられて生きている。 ・生きていることがあたりまえではない。	・今生きている自分について考えることをワークシートにまとめることで、命のつながりについて振り返ることができるようにする。

【板書計画】

生命のつながりとは 私たちは家族をはじめ、多くの人の支えによって生かされている。	二月十八日 金曜日 生命のつながりとは何か 「ゆうへ 生きていてくれてありがとう」 一九九五年 阪神・淡路大震災	○ しょうくんの死 ・生きていることが辛い。 ・守ってあげられなかった。 ・助けてあげることができなかった。	○ ゆうちゃんと一緒に生きる決意 ・生きているゆうちゃんや家族を悲しませてしまう。 ・目の前にいる家族を大切に生きていきたい。 ・ゆうちゃんがずっと励ましてくれていたことに気づいた。 二〇一一年 東日本大震災 ・成長したゆうちゃんとしてしっかり話そうと決意した。 ・立ち止まっている自分に気づいた。
--	--	--	--

6 指導の工夫

(1) 補助的な教材の工夫

補助的な教材として、筆者であり、震災で双子の一人である1歳半の息子を亡くした、たかいちづさんの手記に基づいた絵本「笑顔の向こうに」書籍「ゆうへ」やNHK for schoolの動画「学ぼう BOSAI (命の大切さを伝える～震災遺族 たかいちづさん～)」を使用することで、生徒が震災における状況を把握しやすくなるようにした。

(2) 保護者からのメッセージの活用

資料1は、東日本大震災直後に考えていたことなどについての保護者からの回答の一部抜粋で

ある。保護者の協力を得て、東日本大震災直後に考えたことや万が一我が子を失っていたらどんな生き方になっていたかを答えてもらった。この回答を基に、特別支援学級担任が「保護者からのメッセージ」としてまとめて本時の展開で活用した。

〈資料１〉東日本大震災直後に考えていたことなどについての保護者からの回答（一部抜粋）

（ ）は人数

1 東日本大震災（2011.3.11）の時、お子さんは何歳でしたか。

2歳（5）、4歳（2）

2 地震発生時、どのようなことを考えていましたか。

- ・とにかく子供を守らないと思い、2階にいたのですが、抱きかかえて急いで外に逃げないと必死でした。これからもっと大きな地震が発生するのか、どのくらいの被害が起きたのかととても不安でした。
- ・〇〇は、家族は大丈夫だろうか。地震発生時、工作中でした。すぐに〇〇の託児所に行、会えた時には涙が止まりませんでした。おんぶしながら、仕事をしながら、家族のことばかり考えていました。家族は生きているのか。今、茨城はどうなっているのか。不安な気持ちが大きかったです。
- ・何が起きたのか、起きているのか分からずにパニックになりました。また、子供の〇〇のことが気になり、同時に恐怖・不安になり、このままどうになってしまうのだろうと考えました。

3 あなたにとって、子供や家族はどんな存在ですか。

- ・かけがえのない大切な存在です。いて当たり前というか何でも打ち明けられるし、信じてなんでも話せる。一緒に笑ったり泣いたりできる。そんな宝物です。
- ・生きがいであり、大切な存在です。辛い時、悲しい時に子供の笑顔を見ると、頑張らないと思う気持ちに変わります。
- ・かけがえのない大切な存在です。頑張れるのも、〇〇と家族がいるから。一人だったら、今の自分はいません。

(3) 安心して学ぶことのできる場作り

学級経営を通して、安心して意見を伝えられる雰囲気と互いに学び合える場作りに努めた。言語はコミュニケーションや感性、情緒の基盤となるため、自立活動の指導として、自分の考えを伝えたり書いたりするなど、表現する学習を1学期に位置付けた。表現力が未熟な生徒A、生徒Bには、休み時間の様子を観察して、その場で適切な表現の仕方を提示し、相手意識をもつことの大切さを繰り返し指導した。さらに教科指導でも、教科の目標を達成するための手立てとして、互いの存在を認めたり、意見を交流し合ったりする活動を取り入れることで、相互にかかわり合う素地が形成され、一人一人が安心できる学びの場となるようにした。

(4) 自立活動の指導における事後学習の実施 人間関係の形成 3－（2）

NHK for school の動画「学ぼう BOSAI(命の大切さを伝える～震災遺族 たかいちづさん～)」の視聴を通して（図1）、たかいさんの言葉や表情からたかいさんが考えていることや感情を理解できることを目標とした。視聴後に保護者へ伝えたいことをワークシートに記入した（図2）。授業後、生徒が書いたメッセージを封筒に入れて、保護者に渡した（資料2）。



〈図1〉動画を視聴している様子



〈図2〉保護者へ伝えたいことをワークシートに記入している様子

東日本大震災が発生した時、双子のわが子は2歳。何が起きたのか、起きているのか分からずパニックになりました。また、子供の安否が気になると同時に恐怖と不安が押し寄せてきました。

地震発生後から停電・断水。子供が小さかったため、ミルクの用意や生活用品の購入がとても大変でした。

あの東日本大震災でわが子を失っていたら、これから先どうやって生きていけばよいのか分からず、先の見えない絶望感になっていたと思います。わが子は生きがいてあり大切な存在です。辛い時、苦しい時に子供の笑顔を見ると、頑張らなきゃという活力に変わります。 母より

このメッセージをを読んで、本当に私のことを一番に考えてくれていると感じました。大人になったらたくさん恩返しをしたいです。今、私が存在できるのは周りの人や家族の支えがあるからです。授業を通して、自分の命は一つしかないのだから大切にすることを学びました。家族には「たくさん心配させてしまったけど、それ以上にたくさんの愛情をありがとう。これからも心配かけてしまうかもしれないけど、温かく見守っていてください」と伝えたいです。

7 授業の実際

(1) 導入について

阪神・淡路大震災の動画を視聴することで、教材への関心を高め、不慮のできごとで命の危険にさらされること気付くことができるようにした。

(2) 展開について

教師が筆者の思いを感じとることができるように教科書と絵本の一部を朗読した。

筆者であるたかいちづさんの気持ちを問いながら、東日本大震災が発生した11年前は、生徒たちは幼い子供であったことを伝えた。そして、自分事として考えるための問いを生徒に投げかけた。筆者は、阪神・淡路大震災で我が子を失い、東日本大震災を通して、新たな心の動きがあったことを考えられるようにした。最後に、東日本大震災で我が子を失っていたら、親はどんな気持ちでいたかなどについて書かれている保護者からのメッセージを手渡した。さらに多様な考えに触れるために、保護者のメッセージを生徒間で共有できるようにした（図3）。どの生徒も、保護者からのメッセージを真剣に読んでいた様子が見られた。



〈図3〉保護者からのメッセージを生徒間で共有して読んでいる様子

(3) 終末について

学習の振り返りをワークシートに記入した（図4）。生徒Aは、書くことに苦手さがあるため、本人のつぶやきを教師が加えた。以下は、生徒がワークシートに記入した内容である。

生徒A：親が自分のことをとても大切にしてくれていたことを知ることができた。

生徒B：命の尊さを知り、他者を思いやることの大切さに気付くことができた。

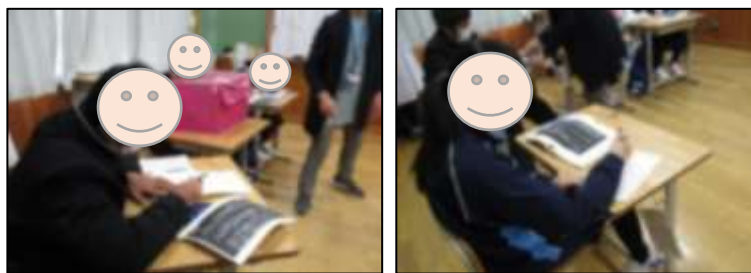
生徒C：自分が存在するのは親や弟、周囲の人がいるからと気付くことができた。

生徒D：命の大切さを知り、家族の存在があって今の自分がいることを改めて感じることもできた。

生徒E：帰る家があり、支えてくれる人がいることに感謝することができた。そして東日本大

震災をあまり覚えていなかったが、保護者のメッセージを通して、とても不安で怖いのもだということを知ることができた。

授業を通して、全員の生徒が気付いたことや知ったこと、改めて感じたことがあり、生命のつながりや支え合いに関する発言や記述が見られた。



〈図4〉ワークシートに記入している様子

8 成果と課題

(1) 成果について

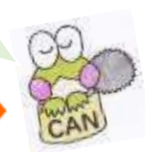
- ・ 補助的な教材として、筆者の手記に基づいた絵本や本、動画の活用により、その状況をより具体的に把握することができた。
- ・ 保護者の協力を得て、アンケートに答えてもらい「保護者からのメッセージ」として生徒に伝えたことは、自分事として考える機会となった。さらに他の生徒の保護者のメッセージを共有することで、多様な考えに触れることができた。
- ・ 自立活動を事後の指導に位置づけたことで、指導内容を生徒が自分との関わりで捉え、切実感をもって学習に取り組むことができた。
- ・ 異学年の学習形態による道徳科授業について、1学年の生徒は、「3年生と一緒にいることで、自分とは違う視点で学べる時間」「先輩の意見を聞くことができるのは新鮮」「3年生のしっかりとした態度を見習いたい」という意見や感想を聞くことができた。教師と1対1で行う授業が多い3学年の生徒にとっては、「意見を発表し合う場面では、自分とは違った視点での意見を聞くことができ、自分の意見にこだわらず視野を広げて考えることができ時間」という感想を聞くことができた。

(2) 課題について

- ・ 「なぜ」「どうして」と、更に深く自己や他者と対話する発問の工夫が必要である。
- ・ 教材中に描かれている筆者の生き方や保護者の生き方を手掛かりに、様々な視点から自分自身の考えを練り上げていく力に個人差がある。個に応じた指導の工夫が必要である。
- ・ 異学年の学習形態をより効果的にするために、学んだ道徳的価値に照らして、自分の生活を振り返り、自らの良さや課題を把握できる自立活動を位置付ける。

目次にカエルときは
ここをクリック

LINK



実践例 9	交流及び共同学習における ティーム・ティーチングによる道徳科の実践	
	交流学級（自・情学級在籍生徒）	中学校

1 主題名 いのちを考える（内容項目D－（19）生命の尊さ）

2 教材名 「いのちって何だろう」

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

内容項目D（19）は、「生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること」をねらいとしている。中学生になれば、ほとんどの生徒が「いのちが大切である」ということを理解している。しかし、「いのち」の尊さについて真剣に考え、議論することは多くない。ここでは、「いのち」には輝かしい面だけではなく、時には辛さを感じる苦しい面もあるが、人間にはそれを受け入れて乗り越えていく力があるということを理解できるようにしたい。その上で、「いのち」の大切さについての理解を深めていきたい。また、様々な視点で議論することで、自らの生命の大切さを深く自覚させるとともに、他の生命を尊重しようとする心情を育てたいと考え、この題材を設定した。

(2) 生徒の実態について（自閉症・情緒障害特別支援学級在籍 男子2人）

生徒Aは、小学校の頃は、善悪の判断ができず、周りに影響されてきまりを守れないことがあった。中学校に入学してからは、落ち着いて生活できるようになってきた。生徒Bは、思考や行動にこだわりがあり、自分のやり方に合わないことでトラブルになって友達が傷つけてしまうことがあった。2人とも、友達とのかかわりは消極的で受け身なことが多い。また、集団の中では指示が通りにくく、個別の声かけが有効である。事前アンケートでは、次のような結果である。

<事前アンケート> 令和3年9月1日実施 1年3組 男子16人 女子16人 計32人

	項 目	主な回答	生徒A	生徒B
1	いのちについて考えたことはありますか。	ある（28）、ない（4）	ない	ある
2	あなたにとっていのちとは何ですか。 （複数回答）	大切なもの（16） 1つしかないもの（7） 生命をつなぐもの（4）	わからない	200年にはもう失ってしまうもの
3	いのちがなくなるのはどんな時ですか。 （複数回答）	けがや病気や事故（14） 死ぬ時（13）	交通事故にあった時	血のめぐりが悪い時
4	なぜ、あなたにはいのちがあるのですか。 （複数回答）	親が与えてくれたから（11） 生きているから（9） 自分の人生を送るため（6）	わからない	一生を過ごすため

生徒Aは生活経験の乏しさのためにいのちに対する関心が低い。友達の意見を参考にしながら自分事として考えることを通して、いのちがかけがえのない大切なものであることを理解できるようにしたい。生徒Bはいのちに限りがあるものだと知っているが、生命の尊さを自覚するにいたっていない。生命について様々な人の考えを聞き、自分事として考えることを通して、かけがえのない生命を尊重しようとする心情を育てたい。これらのことから、本時の指導にあたっては、指導体制や話し合いの工夫、構造的な板書構成に留意しながら授業を進めたい。

(3) 教材について（「いのちって何だろう」 新しい道徳1 東京書籍）

中学2年生の夏に病気で小児科に入院したことで、子どもにも死があることを実感し、寂しさを感じた作者。小柄だったが中学3年生のマラソン大会では1着になり、自分の体に秘められている力に驚く。医者として働き、毎日のように「いのち」と向き合っている作者の「いのちとは何だろう。」という問いに対し、自我関与しながら議論することを通して、「いのち」とは何か、「いのち」の尊さを守るためにどのように考えていくかについて理解を深め、かけがえのない「いのち」を大切にしようとする道徳的心情を育てたい。

4 道徳的価値に迫るための指導の工夫

(1) 指導体制の工夫

学習内容を理解し話し合い活動に主体的に参加することができるように、配慮を要する生徒へのティーム・ティーチングによる支援を行う。

(2) 話し合いの工夫

グループによる話し合いでは、話し合いが苦手な生徒でも、意思表示をしたり相手の考えをよく聞いたりすることができるように話し合いメモを活用する。

(3) 板書の工夫

場面絵を提示したり、登場人物について短い文章で説明したりすることで内容を捉えやすくする。また、生徒から出た多様な考えを整理して黒板に示すことで可視化しやすくし、さらに考えを深めることができるようにする。

5 学習指導過程

※道徳的価値に迫るための工夫

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点 ㊦評価
導入	1 アンケート結果について考える。 ○そもそもいのちって何だろう。	- 大切なもの 1つしかないもの - 他にどんな考えがあるのだろう。	- 事前アンケートの結果について共通理解を図る。 - いのちとは何かについて問うことで、生徒が生命の尊さという価値について問題意識をもち、ねらいとする価値の方向付けを行うことができるようにする。
展開	2 資料を読んで、議論する。 ○1位でゴールした時、ぼくはどう思ったか。 ○「いのちは自分勝手にならない」とはどういうことか。 ○いのちはどこかに売っているか。 ○いのちの反対語はなんだろう。 ○みんなはいのちを誰にもらったか。 ○なぜ、いのちがあるのだろう。	- うれしい。 - 驚いた。 - 病気、事故、災害で突然なくなってしまうこともあり、思い通りにならない。 - 生きたくても生きられない人がいる。 - 親が産んでくれたから。 - 生きる権利があるから。	- T 2 が読み聞かせをする。 ※これまでに僕に起きた出来事を思い出すことができるようにする。 - 場面絵を提示したり、登場人物について説明したりすることで内容を捉えやすくする。 「うれしい」だけでなく、これまでの生き立ちから思う自分にそんな力があつたかという「驚き」や「体がもつ力」に気付くことができるようにする。 - T 2 は、生徒 A や生徒 B の表情の変化を観察し、必要に応じて補助発問をしながら一緒に考える。 - 様々な問い返しを行うことで、なぜいのちが大切なのかという問いを深め、考えを広げる。

終末	4 教師の説話を聞く。	※いのちの誕生について語る。	・教師の経験を語り、今後いのちを大切に行動していこうとする意欲につなげたい。
授業後			・T2は、生徒Aと生徒Bに対し、チェック表による評価を個別に行う。

6 指導の工夫

(1) ティーム・ティーチングによる指導の工夫

特別支援学級在籍の生徒はいつも、交流及び共同学習を行っている通常の学級（以下「交流学級」という。）で道徳の授業を受けている。しかし、授業の様子を観察してみると、教材の内容を理解したり、話し合い活動に主体的に参加したりすることが難しい状況である。そこで、個に応じた指導をするために、道徳科でもティーム・ティーチングを取り入れ、役割分担をしながら授業を行うことにした。T1（交流学級担任）は、ユニバーサルデザインを考慮し、学習形態や発問などを工夫しながら全体指導に当たるようにした（図1）。T2（特別支援学級担当）は、同じ視点を持ちながら、生徒Aや生徒Bに対して個別の支援に当たることにした。また、T2は、全体にかかわることとして、教材の読み聞かせ（図2）や作成した「議論カード」（資料1）の使い方の説明なども担当した。



〈図1〉 T1による全体指導の様子



〈図2〉 T2による教材の読み聞かせ

(2) 話し合いの工夫

グループによる話し合いを活発にするため、「議論カード」と副読本に掲載されている「話し合いの手引き」を活用した。「議論カード」は、主発問についての自分の考えをメモしておき、グループでの話し合いの際に見ながら発言できるようにするための手立てである。「いのちって何だろう。」という主発問に対し、全体で話し合ったことを整理し、一人一人が確実に自分の考えをもつことができるように、書く時間を確保した。また、生徒A・生徒Bとも、自分の考えを伝えることはできるが、相手の意見を聞くことが苦手なため、自分と友達の考えを比較することできるように、◎（自分とは違うが納得する意見）、○（自分と同じ意見）、△（自分と違う意見なので質問したい）などの約束を決めた。

「話し合いの手引き」は、副読本に綴じ込んであるものを使用した。司会者になった生徒は、「司会カード」を見ながらいつも同じ流れで話し合いを進めている。今回、生徒Aはグループの中で司会者となったが、手引きを活用しながらスムーズに話し合いを進めることができていた。

(3) 板書の工夫

教材の内容を理解することが難しいという生徒A・生徒Bの実態を踏まえ、視覚的に内容を捉えやすくするために、場面絵を提示し、登場人物について短い文章で説明した。また、目には見えない「いのち」をハート型に置き換え、生徒から出た意見をその周りに構造的に示すことで、多様な考えを可視化しやすくした。

〈資料1〉議論カード

7 授業の実際

(1) 本時の学習について

いのちについて考えを深めていく過程では、T2は、すぐに適切な支援ができるように、生徒Aや生徒Bの近くに控えた(図3)。T1の発問の意味を理解することが難しいと思われる場面では、同じ発問を繰り返して伝えたり、補助的な発問を組み入れたりした。また、T1が、「友達と一緒に考えてごらん。」という指示をした際には、近くの席の友達の話を聞くように促した。主発問である「いのちって何だろう。」に対して、生徒Aは、事前アンケートでは「分からない。」と答えていたが、議論カードには、「親からもらった大切なもの、一つしかないもの。」と記述していた。生徒Bは、事前アンケートでは「200年たったら消えてしまうもの。」と答えていたが、「人にはなくてはならないもの。」という記述に変化した。先生や友達との対話を聞き、いのちに対する捉え方が変化したためと考える。



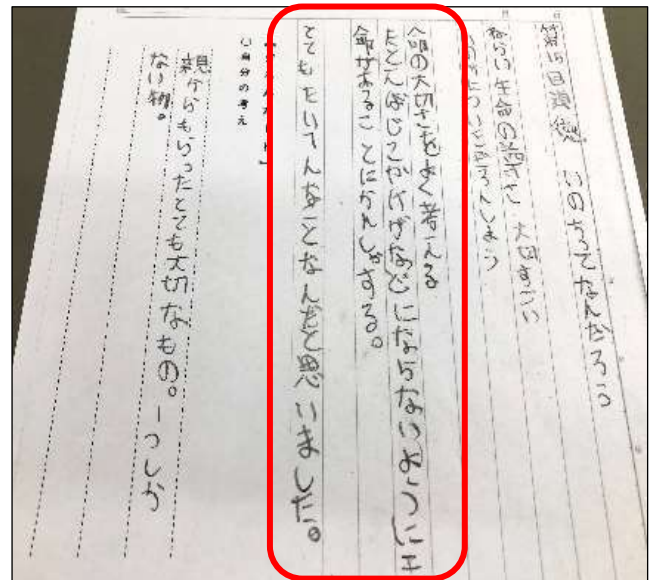
〈図3〉個別に助言をするT2

グループになって議論する場面では、生徒Aは司会者となり、「話し合いの手引き」を見ながら話し合いを進めることができた。友達の考えもしっかりと聞くことができた。生徒Bについては、やや集中力が途切れてしまったが、「議論カード」を見ながら自分の考えをグループの友達に伝えることができた。

終末の振り返りの場面では、「これからどのようなことを心がけていきたいですか。」という問いに対し、生徒Aは、「いのちの大切さをよく考える。例えば、事故や怪我に気を付けて生活する。いのちがあることに感謝する。」と記述していた(図4)。生徒Bは、「長生きしたい」と記述していた。

(2) 終末の工夫について

いのちの大切さについて、グループを中心に議論してきたが、目に見えないものなので実感を伴うことが難しい。そこで、授業の終末に、生命誕生時の動画を全体で視聴することで、いのちの尊さへの理解を深めることができるようにした(図5)。特に生徒Aは、赤ちゃんの泣き声に反応し、「いのちってすごいな。」とつぶやいていた。



〈図4〉生徒Aの道徳ノート



〈図5〉モニターに映した動画

(3) 評価について

生徒 B については、発語が少なく文章による見取りも難しいので、授業後にチェック表による振り返りを行った（資料 2）。生徒 B は、振り返りの項目「②自分のいのちは、かけがえのない大切なものだと思いますか。」「③これから、自分のいのちを大切にしようと思いますか。」では「1」に丸を付けた。また、「①いのちについて考えることができた。」こと、「④自分だけでなく、他の人のいのちも大切にしようと思いますか。」についても「2」に丸を付けた。チェック表による振り返りを行ったことで、生徒が道徳的価値を理解できたか、道徳的心情が育ったかについて評価するために役立てることができた。

〈資料 2〉 生徒 B の授業後の振り返り

<どうとくアンケート>		はい			いいえ
① いのちについて考えることができた。	1	②	3	4	
② 自分のいのちは、かけがえのない大切なものだと思いますか。	①	2	3	4	
③ これから、自分のいのちを大切にしようと思いますか。	①	2	3	4	
④ 自分だけでなく、他の人のいのちも大切にしようと思いますか。	1	④	3	4	

8 成果と課題

ティーム・ティーチングの体制で授業を行ったので、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する 2 人の生徒に対し、役割分担をしながら必要な指導や支援を行うことができた（資料 8）。特に、T 2 が補助的な発問をしたり対話をしながら一緒に考えたりしたことから、生徒 A も生徒 B も、最後まで思考が分散せず、課題を自分事として捉え、考えることができた。

板書については、場面絵を貼り、生徒から出た意見を構造的に記述したので、多様な考えが可視化された。生徒 B は、振り返りの際、板書の内容を見ながら自分の考えを書いていた。また、終末の動画視聴も、いのちについて実感を伴って捉えるために有効であった。T 1 の我が子に関する体験談を、生徒 A も生徒 B も真剣な表情で聞いていた。

「議論カード」については、話し合うための 1 つの手段として、有効に活用できた。生徒 A や生徒 B も、話し合いに入る前に、自分の考えを整理し記述することができていた。「話し合いの手引き」については、生徒 A だけでなく、どのグループの司会者も、活用しながら話し合いを進めることができた。

ティーム・ティーチングによる授業を行うことは有効であるが、毎時間の実施は難しい現状がある。ティーム・ティーチングを効果的に取り入れる教育課程の在り方を検討していきたい。



〈図 6〉 グループに支援をする T 1・T 2

目次にカエルときは
ここをクリック

LINK



実践例 10	交流及び共同学習における ティーム・ティーチングによる道徳科の実践	
	交流学級	中学校

1 主題名 思いやる相手について考える（内容項目 B-(6)：思いやり，感謝）

2 教材名 「だれを先に乗せる？」

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

内容項目 B(6)は「思いやりの心をもって人と接するとともに，家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し，進んでそれに応え，人間愛の精神を深めること」をねらいとしている。身近な人とのかかわりの中で，相手の気持ちに共感し思いやりの心をもつことは，社会で生きていく上で必要なことである。しかし，思いやる行動は大切だと分かっているにもかかわらず，自己中心的になりやすく，他を思いやったり気かけたりすることができない場合が多い。そこで，思いやる相手の立場に立ち，外見や人間関係の深さにとらわれず，親切にすることの大切さを理解することができるようにしたい。また，発問に対して「自分ならどうするか。」と，自我関与しながら考えたり，他者の意見に触れることで自分の考えを振り返ったりすることができるようにしたい。

(2) 生徒の実態について（知的障害特別支援学級在籍 生徒 A：男子 生徒 B：女子）

生徒 A は，大部分のことについて行動が遅く，面倒なことはやりたがらない。学校生活では，周りの友達に助けをもらうことが多いが，誰かのために何かをするということはほとんどない。生徒 B は，仲の良い友達には親切にすることができるが，自分本位なところがあり，相手の状況を推し測るに至っていない。また，二人とも自己表現が苦手で，大勢の前で自分の考えを発表することはあまりできない。集団の中では指示が通りにくいので，個別の声かけが有効である。

<事前アンケート> 令和3年12月3日実施 1年1組 男子15人 女子15人 計30人

	項 目	1年1組	生徒 A	生徒 B
1	駐輪場に名前の書いていないタスキが落ちていました。あなたならどうしますか。	①拾う。(29) ②拾わない。(1)	拾わない。	拾う。
2	①と答えた人に聞きます。その後どうしますか。(複数回答)	持ち主を探す。(28) 先生に届ける。(9) 自分で使う。(1)		先生に渡す。
	②と答えた人に聞きます。それはなぜですか	遅刻するから(1)	面倒くさいから。	
3	仲良しの友達が、いつもより元気がありません。あなたならどうしますか。 (複数回答)	理由を聞く、話しかける。(18) そっとしておく。(5) 何もしない。(3) いつも通りに接する。(7)	何もしない。	何もしない。
4	それは、なぜですか。 (複数回答)	気になるから。心配だから。 話したくないかもしれないから。など	どうしたらいいかわからないから。	何をしたらいいのかわからないから。

生徒の発達段階を考慮して、生徒 A や生徒 B については、小学校高学年の内容項目「親切、思いやり」の「誰に対しても思いやりの心をもち、相手の立場に立って親切にすること」をねらいとする。生徒 A は、自分の意見を伝えることは苦手だが、友達の意見を参考にしながら自分事として考えることを通して、相手の立場に立って親切にすることの大切さを理解できるようにしたい。生徒 B は、思いやりについて様々な友達の意見を聞くことで、自分にできることを考え、親切に

しようとする心情を育てたい。

(3) 教材について（「だれを先に乗せる？」NHK for school「ココロ部！」）

主人公のコジマ君は、ある朝、車で会社に向かうために山道を急いでいた。その道中、バスが故障して立ち往生していることに気付く。声をかけると、替わりのバスが来るまであと1時間以上はかかるという。乗客5人はみんな急いでおり、とても困った様子である。コジマ君は、自分の車で乗客達を乗せていくことを提案するが、3人しか乗せることができない。乗客5人全員に「車に乗りたい。」とお願いされたコジマ君が、だれを先に乗せたらいいか悩むという内容である。

4 道徳的価値に迫るための指導の工夫

(1) 指導体制の工夫

学習内容を理解したり、話し合い活動に主体的に参加したりすることができるように、配慮を要する生徒へのティーム・ティーチングによる支援を行う。

(2) 個に応じた指導

生徒の学習上又は生活上の困難を改善・克服するために、道徳科の授業と関連付けて自立活動の指導を行う。

(3) ICT の活用

動画教材を使用することで内容を捉えやすくする。また、タブレット端末を活用して生徒の考えを提示することで可視化しやすくし、さらに考えを深めることができるようにする。

5 本時の学習

(1) 目標

誰を優先して乗せるべきか悩んでいる主人公の行動を追体験することを通して、思いやる相手について、外見や都合にとらわれることなく、相手の置かれている状況を推し量り、親切にすることの大切さを捉える。

(2) 準備・資料

登場人物の挿絵、大型モニター、タブレット端末、ワークシート

(3) 学習指導過程

※道徳的価値に迫るための工夫 個への配慮☆

過程	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点 ④評価	特別な配慮を要する生徒への配慮
導入	1 アンケート結果を確認する。 ○たすきを拾って届けてくれた人はなぜそのような行動をしたと思いますか。	・持ち主が困るだろうと思ったから。 ・人の役に立ちたいと考えたから。	☆アンケート結果を大型モニターに表示することで、視覚的に結果を捉えやすくする。 ・実際に中学校生活で起き得る事例を取り上げ、思いやりのある行動には、必ず相手が存在することや、相手が目の前にいなくても、状況を推し量ることができることを紹介し、本時のめあてにつなげる。	・生徒 A、生徒 B については、自立活動の時間において、相手の立場や考えを推測し、場に応じた適切な行動をとることができるようにするための学習を行う。

展開	2 本時のめあてを確認する。 「思いやり」について議論しよう。 ○「思いやり」とはどのようなことですか。 3 教材序盤を視聴しアンケートに答える。 ○あなたがコジマくんの立場だったら、誰を優先しますか。アンケートに入力しましょう。	・優しくすること。 ・相手のしてほしいことをしてあげること。 ・こわそうな男性 ・体格のいい男性 ・やさしそうなおばあさん ・お世話になった佐藤さん ・笑顔の素敵な女性	・「思いやり」について考える1時間であることを強調する。 ☆タブレット端末のアンケート機能を使うことで、互いの考えを可視化し、自分の考えと比較しやすくする。 ☆写真やイラストを活用して、人物像を整理する。 ・「誰が、どのように思いやる相手について考えているか」に注目することを生徒に伝えてから、教材を視聴する。 ・急いでいても人を助けようとしているコジマくんのよさをおさえる。その上での判断ということを確認する。	・特別支援学級で教材前半を視聴し、あらすじや登場人物について思い起こすことができるようにしておく。また、「思いやり」の意味について補足説明をしておく。 ・乗客の写真や急ぐ理由を整理した表を用意し、見ながら考えをまとめることができるようにする。 ・タブレット端末の操作状況を見守る。戸惑っている時には、個別に声をかける。
	 こわそうな男性  体格のいい男性  やさしそうなおばあさん  お世話になった佐藤さん  笑顔の素敵な女性			
	4 教材前半を視聴し、あらすじを確認する。 ○コジマくんはどうしてこの3人を選んだのでしょうか。 5 教材後半を視聴し、主人公の気持ちや行動について考える。 ◎コジマくんは誰を優先すべきだと思いますか。理由も合わせて議論しましょう。	・「おばあさん」お年寄りだから。 ・「佐藤さん」昔、お世話になってかわりがあるから。 ・「女性」女性だから。通勤途中だから。 ・「女性」一生を決める大切な就職試験。 ・「体格のいい男性」具合が悪い。すぐに手当てが必要。 ・「おばあさん」お年寄りは優先。ゲートボールメン	・優先理由を聞き合うことで、自分の大切にしたい考えを明確にする。 ・「思いやり」とはどのようなことかについて、自分の考えを深めるための議論であることを助言する。 ・考えが変わったらワー	・生徒Aについては、主人公の立場になって考えるように助言する。ワークシートに書くことは難しくても、自分の考えをもつことができるようにする。 ・生徒Bについては、そばに寄り添い、や

	○議論を経て、考えが変わりましたか。理由もあわせてまとめましょう。 6 教材終盤を視聴し、自分の考えをまとめる。 ○あなたがコジマくんの立場だったら誰を優先しますか。アンケートに入力しましょう。 7 自分の生活について考える。 ○今後相手を思いやるために、どのようなことを大切にしていこうと思いますか。	バーが必要。 ・「佐藤さん」恩返しできるチャンス。奥さんのための買い物。 ・「怖そうな男性」人に会う用事がある。 ・「女性」試験は大切。交通機関のトラブルなら許される。 ・「体格のいい男性」健康は大切。急病ではない。 ・「おばあさん」お年寄り優先。試合に出るほど元気。 ・「佐藤さん」お世話になった。急用ではない。 ・「怖そうな男性」母が病気。態度が悪い。 <期待したい記述> ・見た目や自分との関係だけで決めるのではなく、相手の立場や状況をよく知ってから判断できるようになりたい。 ・自分の都合ばかり考えず、相手の事情を聞いたり想像したりしながら、相手のことを思いやるのだと思った。 生徒 A：友達の意見を聞いて、親切にすることは大切だと分かった。 生徒 B：思いやりの心をもって、友達に親切にしていきたい。	クシートにメモするように伝える。 ・タブレット端末のアンケート機能を使うことで、議論前後の考えの変化を可視化し、変化の理由と共に発表することで、相手の置かれている状況を推し量ることの大切さに気付くようにする。 ⑨「思いやり」について考え、議論したり意見を聞いたりすることを通して、自分事として考えをまとめることができる。(ワークシート、観察、発表) ・自分の生活を振り返ることで自我関与し、今後の生活について自己内対話をするようにする。 ・数人の生徒の発表をもとに議論することで、「思いやり」による道徳的行為を理解し、価値の一般化を図る。	りとりをしながら選んだ理由をワークシートに書くことができるようにする。 ・生徒 A や生徒 B のグループに入り、議論の様子を見守る。順番に発言したり友達の意見を聞いたりすることができるように声をかける。 ・議論の後に、考えが変容したかどうかを個別に確認する。 ・発問について、個別に補足説明をする。生徒 A や生徒 B のワークシートに目を通し、ねらいにそった振り返りを書くことができているか確認する。書くことが難しい場合は、聞き取りをしながら自分の考えをまとめることができるようにする。
--	--	--	---	--

終末	8 教師の説話を聞く。	※「思いやり」について語る。	・教師の経験を語り、今後思いやる相手について、外見や都合にとらわれることなく、相手の置かれている状況を推し量り、親切に行動していこうとする意欲につなげたい。	・生徒 A、生徒 B については、自立活動の時間において、卒業生への手紙作成につなげる。
----	-------------	----------------	--	--

6 指導の工夫

(1) ティーム・ティーチングによる指導の工夫

道徳的価値を理解し、自己を見つめ主体的に考えることができるように、交流及び共同学習を行っている通常の学級（以下「交流学級」という。）の担任（T1）と特別支援学級担任（T2）とのティーム・ティーチングによる授業を行った。授業の前には、「打合せシート」を活用し、ねらいとする道徳的価値の捉えや生徒の実態についての共通理解を図った。また、発問についても検討し、「自分なら→主人公なら→自分なら」と段階的に分けることで、道徳的価値について自我関与しながら考えられるようにした。T1は、全体指導を担当し、思考を練り上げるための発問や合意形成を促す問い返しを行った。T2は個別指導に専念し、支援する生徒のそばに寄り添い、学習状況を観察したり必要に応じて助言を行ったりした（図1）。



〈図1〉 T2による個別支援

(2) 個に応じた指導

知的学級では「相手の立場や考えを推測しながら、他者とかかわる具体的な方法を身に付けることができるようにする」ことをねらいとして自立活動の指導を行っている。道徳科の授業と関連しており、以下のような学習指導過程を計画した。

○道徳科と自立活動を関連付けた学習指導過程

時間	学習活動・学習過程	場所・内容	
1	教材を通して、相手の立場や考えを推測することができる。		知的学級での自立活動①
2	教材を活用し、道徳的価値を理解し、よりよい生き方を考える。	交流学級での道徳科	
3	相手の立場や考えを推測し、具体的な方法で関わるができる。		知的学級での自立活動②

(3) ICTの活用

読み物教材に関心を示さないという生徒Aのため、「NHK for school ココロ部！」の動画教材を使用し、題材の内容を捉えやすくした（図2）。生徒Bや交流学級の他の生徒にとっても、動画教材は分かりやすく効果的だった。さらに、生徒Aや生徒Bについては、動画教材の序盤を視聴しておいたため、いつもより、問題意識をもって授業に臨んでいた。また、展開前後の生徒の思考を、タブレット端末のアンケート機能を活用し、円グラフで提示した（図3）。生徒が選んだ思いやる相手についての変容が可視化しやすくなった。生徒Aも、モニターに表示されたアンケート結果を、身を乗り出して見ていた。



7 授業の実際

(1) 自立活動①について

自立活動では、場に応じた適切な行動をとることが苦手な生徒 A・生徒 B の実態に応じて、自立活動の内容では区分「3 人間関係の形成」での項目「(2) 他者の意図や感情の理解に関すること」に関連付け、「相手の立場や考えを推測しながら、他者とのかかわる具体的な方法を身に付けることができるようにする。」ことを目標としている。まずは、相手の立場や考えを推測することができるよう、教材として日本昔話を活用した(図4)。資料の内容は、主人公が体の不自由な母を思いやり、治したいと願う。他の登場人物からも願いを聞いたが、自分を含めて4つの中から3つしか叶わないと知り、主人公が迷うというものである。



〈図4〉 日本昔話を教材として活用

〈資料 1〉 生徒 B の自立活動のワークシート

自立活動 ワークシート

1年()組 番号()

① 相手の立場になって考えよう。

「こいちは、だれの願いを何人にもえたか」を考えてしよう。三人選んで〇で囲みましょう。

自分	どんな願い	あなたが選ぶ理由
自分	かかこの目を治す	
お友だち	焼肉を食べたい	えらい人はよくいたねうまいぞう
お母さん	おまんががほしい	おまんががほしいからこころがすくすくする
大きなお兄さん	天にのぼりたい	しんやこうきょうさんがよくて、おれがいきなりおれにのぼりたい

あなたたちは、(大)者・(巨)姓・(大)きな(お)客を遊びました。

理由は、……です。

2 友達や先生と議論をして考えがかわりましたか、どちらか〇で囲みましょう。

変わった ☐ → ☐ ()

変わらなかった ☐ ()

3 今日の学習で、感じたことや考えたことを書きましょう。

自分の願いは後まわして三人の願いをきいたが……。かかさんの目が見えるようになった。

願いを選び、生徒 B は、自分以外の 3 つの願いを叶えると決めた。最後に、教材の後半を視聴し主人公の選択と自分の選択を比較した。主人公は自分以外の 3 つの願いを叶えたが、思いやる行動が報われ、母の病気が治ったという結末だった。終末時に、役割演技をしながら登場人物の気持ちを考えた。生徒 A は、「動画を見ても考えは変わらない。」としていたが、主人公の立場から「次は必ず願いを叶えてあげるね。」と発言した。生徒 B は、他の登場人物の立場として「願いが叶ってうれしい。ありがとう。」と発言した。資料 1 は、生徒 B の自立活動のワークシートである。生徒 B は、今日の学習で感じたことや考えたこととして「自分の願いは後まわしにして 3 人の願い事をきいたから、母の目がみえるようになった。」と記入した。

これらのことから、誰かのために行動することのよさを知り、親切にするときには、相手の気持ちや状況を考えることが必要であることに気付くことができる。

(2) 道徳科の実践について

動画教材の初めの部分の 10 分程度を事前に視聴し、場面設定と登場人物を確認したため、学習の見通しをもつことができた。

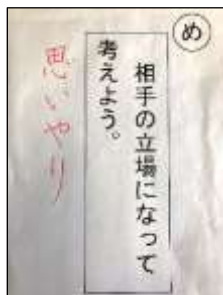
道徳科の授業では、「思いやる相手について考える」という目標を設定し、思いやる相手に対し配慮すべきことについて話し合った（図5）。生徒A・生徒Bは、「思いやり」という言葉の意味について事前に確認していたので、目標を意識して考えることができていた。生徒Aは、「自分なら誰を選ぶか。」という最初のアンケートでは、自分の好きな見た目から3人を選んでいった。ところが、「主人公なら誰を選ぶか。」という発問に対しては、3人目に誰を選ぶべきか決めかねている。や友達との対話を聞いたりしているうちにゆさぶられ、めだと考えられる。しかし、グループの話合いの中で「好みではなく相手の状況を考えることが大切である。」を選ぶことができていた（図6）。最後の「自分なら誰れた。これらのことから、生徒Aは、話合いを通じて、ることができたと考え。また、生徒Aは途中で集中返して伝えたり理由を聞いたりしながらやりとりを重取り組むことができた。また、生徒Bはワークシートいか。」について自分の考えを記入することができた（図

【個に応じた支援について】

ア 座席や班編制の工夫…そばに寄り添い、必要に応じて声をかける。

イ ヒントカードの提示…視覚的な手がかりにより、考えを深めることができるようにする（図6）。

ウ ワークシートの活用…自分の考えを整理し、教師側が思考の変容を見取ることができるようにする（図7）。



〈図 6〉 生徒 A・生徒 B に提示したヒントカード

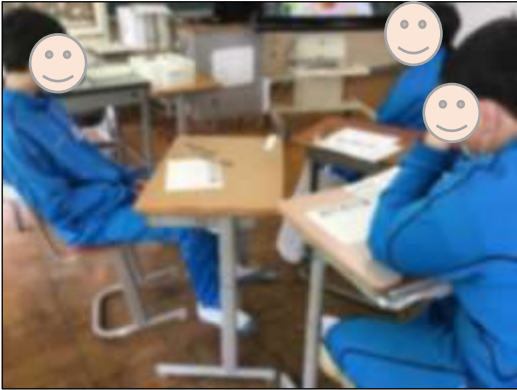


〈図5〉グループでの話合いの様子



〈図7〉生徒Bが道徳科のワークシートに記入している様子

交流学級での道徳科の授業中に、生徒 A の変容を見取ることができたが、ワークシートに「今後どのようなことを大切にしていきたいか」について理解したり、書き表したりすることが難しかったため、知的学級で再度動画の終末部分を見て（図 8）、生徒 B とともに振り返りを書く時間を設けた。生徒 A の「親切にすることは大切だ。」という記入や、生徒 B の「思いやりの心をもって親切にしていきたい。」という記入から、心情や実践意欲に望ましい変化があったと判断した。このことから、思いやりの心をもつことや相手の立場になって親切にすることの大切さに気付くことができたと考え。さらに、生徒 B は、以前は友達に対して消極的で一人で行動することが多かったが、最近は移動教室の際に廊下で友達を待っていたり、荷物をもってあげたりするなど行動について変容が見られるようになった。



〈図 8〉動画教材を視聴している様子



〈図8〉 動画教材を視聴している様子

(3) 自立活動②について

自立活動の内容における区分「3 心理的な安定」の項目「(3) 自己の理解と行動の調整」と関連付けて、「相手の立場や考えを推測しながら、他者とのかかわる具体的な方法」として、生徒 A や生徒 B が成就感を味わうことのできる活動を設定した（図 9）。「卒業する知的学級に在籍する 3 学年生徒 C のためにできることはないだろうか。」と投げかけ、交流会を計画することにした。生徒 C は、2 人にとって小学校からよく知る先輩である。できることを 2 人で話し合った結果、高等学校受検を控えた生徒 C のために、合格を祈願して励ましのメッセージを書き、折り鶴を添えて送ることにした。後日交流会を実施し、2 人は生徒 C にプレゼントを手渡すことができた。生徒 C はとても喜んでいた。

【交流会の実施】



【プレゼントを準備する】



【プレゼントを手渡す】



〈図 9〉 自立活動での様子

8 成果と課題

話し合い活動に主体的に参加することが難しいという生徒 A や生徒 B の状況から、交流学級担任と特別支援教育担当とのチーム・ティーチングで授業を行った。T 1 と T 2 が役割を分担しながら一人一人への支援を行ったため（図 10、11）、生徒 A や生徒 B も、道徳的価値を理解し自分のこととして主体的に考えることができるようになった。交流学級での道徳科の授業は、話し合いを通して多様な考えにふれることができるよさがある。しかし、生徒の実態によっては、チーム・ティーチングによる指導形態を交流学級において取り入れても、内容を理解することが難しかったり、自分の思いや考えを表出することが難しかったりすることも考えられる。内容項目によっては、特別支援学級においての少人数による道徳科の実践も検討する必要があると考える。今後も、様々な考えに触れ、自分の考えを深めることができるように支援していきたい。

自立活動と関連付けて道徳科の授業を行うことで、成果は見られたが、他の授業でも同様に取り組むためには時間の確保が難しい。生徒の実態に合わせて、自立活動の内容と道徳的価値の関連について、更に研究していきたい。



〈図 10〉 全体指導を行う T 1



〈図 11〉 個別指導を行う T 2

目次にカエルときは
ここをクリック

LINK



実践例 11	準ずる教育課程における、対話的学びを深めるための ICT を活用した遠隔型合同授業の実践	
	肢体不自由特別支援学校	中学部

1 主題名 情報モラルについて考えよう 内容項目 B-(1)思いやり、感謝、B-(6)礼儀

2 教材名 「商品レビューから考える」

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

昨今ではインターネットが急速に普及し、スマートフォンやタブレット端末、それから SNS などでは他者とコミュニケーションをとることが当たり前になってきている。世界中の誰とでもつながることができるが、同じ価値観を共有することが可能な反面、インターネットの「匿名性」が、無責任な発言や誹謗中傷などの問題を生んでいる。画面の向こうには「相手」がいるということに気づき、対面でコミュニケーションする際と同じように礼儀や相手のことを考えた発言や行動をする情報モラルを身に付けることが必要であると考え。

(2) 生徒の実態について

新型コロナウイルス感染症の拡大により、リモートによる学習に取り組む機会が急激に増えたことで、ICT 機器が身近な存在になった。しかし、情報モラルについての内容を学ぶ時間や生活経験の少なさから、知らぬ間に危険な使い方をしてしまうことが散見された。これまで、インターネットや SNS の安全な使い方についての学びを積み重ね、情報モラルの重要性について少しずつ理解してきているところである。

道徳科の授業における実態としては、間違いを恐れ、教師が望むような答えを答えたり、友達と自分の意見を比較させたりしながら考えを深めていくことに難しさが見られるとともに、自己肯定感の低さが感じられた。次に身体機能的側面から見ると、生活経験や実体験の少なさから、内容や心情、道徳的価値の理解に至らないことがあった。また、授業中に書字をすることに意識が集中してしまい、内容の理解がおろそかになることも見受けられた。さらに学級の人数が3人であることから様々な意見を聞き、考えを深めることが難しい面もある。

これらのことから、話し合い活動において意見の偏りが生じたり、道徳的諸価値をより自分事として考えたりすることに難しさがあると考え。

(3) 教材について

指導に当たっては、「商品レビュー」を題材として取り上げる。実際のレビュー画面を提示し、それをもとにインターネット上における適切な行動について考え、話し合い活動を通して他者と共有する。この活動から、「投稿者や投稿された側（商品の生産者等）、閲覧者等それぞれの立場に立って適切な投稿の仕方について考えを深められるようにする。また、気持ちよくインターネットを利用するために大切なことについても他者の意見を参考にしながら自分の考えを深められるようにする。

4 道徳的価値に迫るための指導の工夫

(1) インターネットのショッピングサイトに掲載されている実際の商品レビューの画面を資料として提示する。

(2) 意見の共有をタブレット端末のアプリ（ロイロノート・スクール）で行い、話し合い活動を行う。

(3) オンラインで県内特別支援学校（協力校）1校と合同で学習を行う。

5 学習指導過程

※道徳的価値に迫るための指導の工夫

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点 評価 ○：全体、●：個別、 □：教材
導入	○「欲しい商品がある時、みんなはどうしてる？」	・お店で買う、親が買う、インターネットで買う。	

	○「オンラインショッピングをしたことはある？」 ○「その中でよかった経験、悪かった経験はある？」	・ある、無い、親は買っている。 ・すぐに届いた、箱が壊れていた、開けたら使えなかった。	○答えたくない内容は答えなくてよいことを伝える。 ○話しやすい雰囲気作りに努める。
展開	学習課題：インターネット上での適切な行動や発言について考えよう！		
	1 口コミやレビューが商品購入時の参考になることを知る。 ○「買いたい商品を選んだり、飲食店を決めたりする時にどのように選びますか。」	【選び方】 ・欲しいものを選ぶ、親が決める、口コミを見る。	○例として実際のレビュー画面を提示する。
	2 実際のレビューを見て、良い点や悪い点を個人で考え発表する。 ○「このレビューを見てどう思いますか？」	【レビューを見て】 ・表現が刺々しい、もう少し優しい表現でもいい。 ・言葉遣いが悪いものがある、不快な気持ちになる。	○不適切な表現がなされている実際のレビュー画面を提示する。
	3 投稿者・投稿される側・閲覧者の中からテーマを決めて、二つのグループで議論し、発表する。 ○「このレビューを見たときに、それぞれの立場だったらどう思いますか。」 ①ロイロノート・スクールのスライドにグループの考えをまとめる。 ②グループごとに考えを発表する。	【それぞれの立場】 ・投稿者：商品の欠陥などに対する怒りはあるかもしれないが、表現を考えた方がいい。 ・投稿される側：きっと迷惑をかけたことに対して申し訳なく思っているはずだが、言い方がきついと思う。 ・閲覧者：読んでいて気分が悪くなる。	●スライドへの入力の手書き・キーボード入力の中からやりやすい方法を選択して行うように話す。 ●話し合いでは教師が生徒の考えを整理したり、補助発問を投げかけたりすることでスムーズに話し合いが行えるようにする。 ○スライドの提出が終わり次第、発表や意見交換を行う。その際教師は生徒同士の話し合いを促す。 ○発表時には感想などを聞き取る。 □アプリ「ねずみタイマー」を使って考えをまとめる時間などを視覚的に示す。 ④議論を通してそれぞれの立場の視点で、適切な投稿の仕方について考えを深めようとしている。 (発表、記述)
	4 インターネット上で互いに気持ちの良いやりとりをするために大切なことを考え、発表する。 ◎「それぞれの立場が、嫌な思いをせずに済むためには何が大切だと思いますか。」	【大切だと思うこと】 ・言葉遣い、相手を思いやること、文末表現に気を付ける、第三者も不快にさせないように気を付ける、誰に見られてもいいような文章を意識する。	○スライドの提出が終わり次第、発表や意見交換を行う。その際教師は生徒同士の話し合いを促す。 □アプリ「ねずみタイマー」を使って、考えをまとめる時間などを視覚的に示す。

	①ロイロノート・スクールのスライドに自分の考えをまとめる ②考えを発表する。		□ロイロノート・スクールのスライドに入力して提出して欲しい発問には、アプリ内の提出箱のマークを示す。 ②意見交換を受けて、適切な投稿の仕方について自分の考えを深めようとしている。（発表、記述）
終末	・授業を振り返り、スライドに記入後、提出箱に提出する。		【使用するアプリ】 ・ロイロノート・スクール ・ねずみタイマー ②提出されたスライドの記載内容も併せて個人内評価を行う。（記述）

【板書計画】

The image displays a collection of 12 digital board images arranged in a 4x3 grid, numbered 1 through 12. Each board contains text and graphics related to a lesson plan on digital literacy and moral education.

- Board 1:** Titled 'オンライン道徳授業のお決まり' (Online Moral Education Summary). It lists rules for online communication: listen to the other person, think before speaking, raise your hand to speak, and use reactions. It includes a small graphic of a person with a speech bubble.
- Board 2:** Titled '情報モラルについて考えよう' (Let's think about Information Morality). It focuses on '商品レビューから考える' (Thinking from Product Reviews) and lists content items: good/bad reviews, gratitude, and politeness.
- Board 3:** Titled '学習の流れ' (Flow of Learning). It outlines three steps: 1. What did you learn? 2. Think about 'reviews' (ディベートタイム). 3. Review/Reflection (振り返り). It includes a small graphic of two people talking.
- Board 4:** Titled 'オンラインショッピングをしたことはありますか?' (Have you ever done online shopping?). It has a large empty box for writing.
- Board 5:** Titled 'オンラインショッピングをしてよかったことや悪かったことはありますか?' (Have there been good or bad things about online shopping?). It has a large empty box for writing.
- Board 6:** Titled '体験談' (Experience Talk). It shows a photo of a heater with a red circle highlighting a part. Text describes a problem with the heater and a solution found through a review.
- Board 7:** Titled '学習課題' (Learning Task). It asks 'インターネット上での適切な行動や発言について考えよう!' (Let's think about appropriate behavior and speech on the internet!).
- Board 8:** Titled '買いたい商品を選んだり、飲食店を決めたりする時はどのように選びますか?' (When choosing a product to buy or a restaurant, how do you choose?).
- Board 9:** Titled '商品を買おうとする時や飲食店を選ぶ時' (When buying a product or choosing a restaurant). It shows a screenshot of a product page with a 4.4 rating and a review.
- Board 10:** Titled 'ゲームアプリのレビュー' (Game App Reviews). It shows screenshots of game app reviews.
- Board 11:** Titled 'レビュー' (Review). It shows a screenshot of a product review page.
- Board 12:** Titled 'これらのレビューを見てあなたはどのように思いますか? (良い点、悪い点)' (When you see these reviews, how do you think? (Good points, bad points)).



6 指導の工夫と実践内容

(1) 他の特別支援学校との連携

事前打合せの内容については表1に示す。なお、新型コロナウイルス感染症予防の観点からオンラインによる遠隔合同授業を実施した。ビデオ会議ツールである「Zoom」を活用して、授業内容の確認や機材のセッティングに関する打合せを行った。また、授業に関する相談・調整や指導案・授業データについてはGoogle Chatを使用して担当者間で共有を図るようにした。

合同授業では、ロイロノート・スクール上にアップロードしたプレゼンテーション資料を画面配信しながら授業を進行した。また、発問に対する回答や話し合い活動時の各校の記録、振り返り等はスライドに記入してから提出箱に提出することとした。

(2) 学習計画と内容

本実践までの学習計画と内容については表2に示す。なお、第1時を実施した際には通信の不具合が起こり、円滑に授業が進められなかったため、別日で設定し、再度実施した。

「商品レビュー」を題材とし、インターネットショッピングサイトの実際のレビュー画面をもとにした話し合い活動を通してインターネット上における適切な言動について考えた。話し合い活動では⑦投稿者、⑧投稿される側、⑨閲覧者の三つの立場を学校ごとに一つ選択して、その立場に立って適切な投稿の仕方について考えるようにした。

〈表1〉打合せ内容

No	実施方法	打合せ内容
1	Zoom	・概要説明 ・学習計画・方法 ・実践研究の進め方
2	Zoom	・第1回授業について ・研究授業について (テーマ、実施方法他) ・ロイロノート・スクールの使い方、接続チェック
3	Zoom	・使用機器の確認、セッティングについて ・ロイロノート・スクールの画面配信テスト ・Meetの使用方法について

〈表2〉学習計画と内容

時間	学習内容
第1時 自立活動	○自己紹介カードを使った自己紹介・質問タイム ○グループエンカウンター「ルーレットトーク」
第2時 道徳科	○「こんなときどうする？」 事例：メッセージアプリでの悪口・仲間外れ（文末表現の誤解によるすれ違い） ・SNSによるすれ違いや誤解が起きてしまう理由について考え、発表し合う。 ・仲間外れになってしまった当事者・グループの仲間の心情を考える。 ・トラブルが起きなくて済む方法について考え、発表し合う。
第3時	○「情報モラルについて考えよう」

道徳科	題材：実際の商品レビュー ・実際のレビューを見て良い点・悪い点を考える。 ・三つの立場（㊦投稿者、㊦投稿される側、㊦閲覧者）の立場に立って考え、議論する。
-----	---

(3) 授業環境の整備

遠隔合同授業を行うにあたり、タブレット端末（生徒用3台、教師用1台）、PC（教師用）1台、モニター1台を準備した。タブレット端末（生徒用）は Zoom とロイロノート・スクールを常時起動させ、分割表示にして使用した。タブレット端末（教師用）では主にロイロノート・スクールで授業データの配信をしたり、提出物の回収等を行ったりした。また、PC（教師用）は Zoom のホスト機として使用した。モニターは必要に応じて使用することとした。教室内では生徒用タブレット端末を3台同時に



〈図1〉緩衝材を当てた様子

Zoom に接続した上で授業を実施したため、ハウリング防止のためにスピーカー付近に緩衝材を当て（図1）、音量を最小に設定するとともに、発言時以外はマイクをオフに設定した。

(4) 本実践における生徒の発言

学校ごとの話し合い活動において他者の意見を聞き、対話を通して自分の考えを深めている場面が二つあった。

一つ目は協力校の話し合い活動中の生徒Aの発言である。生徒Aの発言とその前後のやり取りを表3に示す。授業者の「実際のレビューを見て、それぞれの立場だったらどう思うか。」の発問を受けて、投稿者の立場で議論が始まった。生徒Bが投稿者の心情に寄り添う発言をすると、生徒Cが閲覧者側の視点を加えて発言した。その後、生徒Aが閲覧者の辛辣なレビューを見たときに抱く感情を具体的に示し、適切な投稿の仕方について考えを述べた。このように、投稿者の心情に理解を示しながらも、適切な投稿の仕方はどうあるべきかについて議論は変化していった。

二つ目は対象校における議論時の生徒Dの発言とその前後のやり取りを表4に示す。授業者の「実際のレビューを見て、それぞれの立場だったらどう思うか。」の発問を受けて、投稿される側の立場で議論が始まった。生徒Dはレビューの意義にも触れながら、表現の仕方について考えを述べた。その後、生徒Eがレビューの文面が閲覧者に与える影響について考えたことを発言した。全員でレビューをもう一度見直すと、生徒Dが表情の见えない中での、文字のみによる辛辣な表現の怖さ、冷たさに気付いた。しかし、その後の議論では授業者からの問いから逸れ、レビューが投稿された後の対応の仕方へと議論が流れてしまった。

〈表3〉他者の意見を聞き、対話しながら適切な行動について考えを深めている場面Ⅰにおける生徒の発言

発言者	内 容
生徒B	腹立つ気持ちは分かる。
生徒C	レビューは大勢の人が見に来るから、露骨に文句言っているのを見るとちょっとね。
生徒B	でもイライラすること出すことはあると思う。
生徒C	荒い口調は見る人にインパクトがあるから、身に染みて分かるかも。
生徒A	不快に思う人もいるかも。オブラートに包むとか。
生徒B	悪口じゃなくて、強く言うのはいいんじゃない？
生徒C	わかってほしそうに書くってことでしょ。悪かったところを。
生徒B	怒ってもいいけど、悪い言葉はだめ。

〈表4〉他者の意見を聞き、対話しながら適切な行動について考えを深めている場面Ⅱにおける生徒の発言

発言者	内容
生徒D	レビューって商品をよりよくするためにあるから、意見が大事だと思ってる。改善するために言ってもらえるのはいいけど、表現をもうちょっと柔らかくしてほしいなって思う。
生徒E	なんか、悪口のレビューばかりだと、貴重な意見だから参考にはできるけど、それでレビュー欄が埋め尽くされたら、閲覧者側がそれを見て買わない人が多くなるから。

生徒 D	やめてほしいなみたいな？
生徒 E	不利益になる。利益下がると思う。
生徒 F	生徒 D さんの意見に近いかな。
一同	レビュー欄を見直す。
生徒 D	改めてみると、だいぶ内容過激だね。

7 成果と課題

(1) 成果について

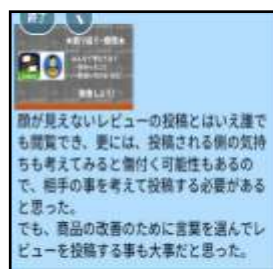
① 実践内容について

「インターネット上での適切な行動は何か。」という問いに対して意見を共有したり、ディベートしたりすることを通してそれぞれが考えを深めることができるということを期待した。題材は、どの生徒にとっても身近なものであり、授業を通して顔が見えない画面上の相手のことを思いやろうとする道徳的態度を養うことができたのではないかと考える。また、授業ではインターネットショッピングサイトのレビューや口コミの画面を授業データの中に組み込んで提示した。実際にオンラインでの買い物をすることがあまりないという生徒が多かったが、ゲームアプリのレビューは見たことがあるという生徒が多く、問いについて自分事として捉えられているようだった。

② 遠隔合同授業について（授業後アンケートより）

授業実施後に遠隔合同授業について、生徒自身がどう感じたかを知るために Google Forms を活用して授業後アンケートを実施した。具体的な回答の内容については表 5 に示す。

また、授業後の感想（図 2）では、協力校との遠隔合同授業を通して、複数の観点から物事を考え、共有し合うことの良さや普段の授業よりも議論が深まっていくことを実感していることが感じられる回答が寄せられた。普段なかなか関わる機会が少ない同年代の友達と一緒に活動をすることに新鮮さを感じ、賑やかで楽しかったというような意見もあった。

 顔が見えないレビューの投稿とはいえ誰でも閲覧でき、要には、投稿される側の気持ちも考えてみると無付く可能性もあるのでは、相手の事を考えて投稿する必要があると思った。でも、商品の改善のために言葉を選んでレビューを投稿する事も大事だと思った。	今回の道徳は、レビューについて二つの視点から意見を共有できたので自分では思いつかなかったような意見などを知ることができました。また、少しずつ zoom での合同も慣れてきたのでこの調子で交流を続けられたらいいと思います。	今回の道徳を通して、レビューは必要不可欠思っていたのですが、アンケート制度にしたりルールを決めておくべきだと思いました。書く側だけでなく書かれる側も注意を払うことが必要だと思います。
お互いに考えを深めあってとても充実した時間になりました。今日はどうもありがとうございました。	皆さんのレビューに対する意見がたくさんあってすごく共感できるし、そうだなと思いました！きつい言葉も必要だと思いますがオブラートに包んだ方がいいと思いました。	私もオンラインショッピングをして、買いたいものがあるのですが、買が悪かったら取り替えてもらってレビューには書かないと思います。気をつけてショッピングしたいと思います。きょうもありがとうございました。

〈図 2〉授業後の感想

〈表 5〉授業後アンケートに寄せられた生徒たちの回答

回答の内容
・複数の観点から物事を考える事で色々な意見を共有できたのでとてもよい経験になった。
・更なる議論の深まりを感じることができて良かった。
・今まで 3 人としかやっていなかったのもとても新鮮味があって面白かった。
・より多く他の友達の意見を知れた。
・お互いに考えを深め合えた。いろいろな意見があるということが分かった。
・遠く離れていても、初めて会った人でも一緒に授業を考えられて、仲も深まる。
・新たな発見があったことが良いと思いました。
・いろんな意見が出るので考えが偏らない。

(2) 課題について

① オンラインで授業を行うための適切な環境設定

今回は同一の教室内で複数のタブレット端末を使用して Zoom に接続したが、その際にハウリ

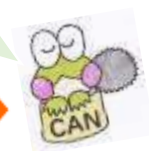
ングが頻発してしまい、その結果授業の進行を妨げたり、生徒の発言を遮ってしまったりということが起きてしまった。遠隔授業を行うために会議アプリは必須だと考えられることから、ハウリングをいかに抑えられるかを考えていく必要がある。また、ハウリングを抑えることを期待して、親機（T1）は別室から配信するという授業形態をとった。このことから、本実践以前の状態と比べると改善はされていたが、ディベート時に生徒のつぶやきや心の揺れ動き、思考する過程を即時的に拾い、思考を深めるための指導を十分に行うことができなかった。

② より対話的な学習活動の設定

今回実践校と協力校の二つに分かれてディベートを行ったが、話合いというよりも、考えの共有という形に近かった。より多様な意見を取り入れて自分事として落とし込むために、思考を整理（思考の可視化）しながら考えを深めていくことができる学習活動を取り入れる必要がある。また「合同授業」と考えた時に、1 単位時間の全てをオンラインで接続して授業を行わなければならないと思っていたが、より対話的・協同的に深い学びを得るためには、接続時間を減らして、自分の考えをしっかりとつ時間も重要だと考える。そこで、オンとオフを意識して「①テーマに対して個人で考える、②議論で他者の意見を取り入れる、③他者の意見を踏まえてさらに自分の考え（生き方等）を深める。」という流れを押さえた学習を展開していくべきだと感じた。

目次にカエルときは
ここをクリック

LINK



実践例 12	準ずる教育課程における、対話的学びを深めるための ICT を活用した遠隔型合同授業の実践	
	肢体不自由特別支援学校	中学部

1 主題名 普通って何だろう？ 内容項目 B-(9)相互理解、寛容

2 教材名 「自分の考えを深めよう」

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

本主題は、「中学校学習指導要領 特別の教科 道徳編」の内容「B 主として人との関わりに関すること (9)相互理解、寛容」の「自分の考えや意見を相手に伝えとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方を理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていくこと。」をねらいとしている。

人は他者と関わり合いながら生きている。また、育ってきた環境が異なる中で、それぞれの概念が形成されている。日常生活において相手の意見や立場を考えずに、「普通」という表現を使って自分の価値観を相手に押し付けてしまっていることも少なくない。昨今では「多様性」という言葉がよく聞かれる。自分とは異なる意見や価値観を排除するのではなく、違いを認め尊重し合う態度がこれからの社会を生きる上で必要であると考えている。

そこで、「普通」という曖昧な概念について協同的に思考したことをもとに、自己と対話する過程を通して互いに違いを認め合い尊重し合うことの大切さに気付くことができるよう、道徳的実践意欲を育てたいと考え本主題を設定した。

(2) 生徒の実態について (第3学年 男子2人、女子1人 計3人) R4.1.14 事前アンケートより

1 「普通」とはどのようなことだと思いますか。

生徒 A 自分の考える一定の基準のことだと思います。しかし、自分の普通と相手の普通は異なることが多いため、自分の普通を押し付けるのは良くないことだと思います。

生徒 B 人々の様々ある多数派の意見が普通と言いたいが、人によって普通はその人の数だけあると思う。なので、一概に言えることでは無いと思う。

生徒 C 楽しく過ごすこと

2 自分のことを「普通」だと思いますか。

思う 2人 思わない 1人

3 みんなと同じでなければ「変わっている」と思いますか。

思わない 2人 分からない 1人

本学級の生徒は、物事について自分の意見をもつことができる生徒である。しかし、話合いやその他の日常生活場面において、相手に自分の主張を伝えられずに多数派である周囲の意見に合わせてしまうことも少なくない。また、日常会話の中でも気付かないうちに自分の価値観や物事の基準について、他者に対して同調を求めている場面も散見される。しかし、上記アンケートからは「自分の価値観を相手に押し付けることは良くない」との回答も見られている。「普通」という概念はごく一般的で多数の意見がもとなる基準であり、その基準から逸脱することで周囲から「変わっている」と思われてしまうかもしれないことに心理的な不安があるのではないかと考察する。そこで、「普通」という概念について自分なりの考えを深めるとともに、学校生活や今後の社会生活における他者との関わり方について自ら判断し、実践していこうとする意欲や態度を育てたい。

(3) 教材について

指導に当たっては、3時間で同一の内容項目と道徳的価値をねらいとするユニット単元を設定した。本時は第3時である。「普通とは何か」を主題とし、第1時では「お正月に食べるお雑煮

についての意見の相違」を事例として取り上げ、「普通」という概念についての思考を進めてきた。本時の導入では、第1時及び第2時に話し合い活動を行った記録を提示することで、まずこれまでにどのような話し合いがなされたかを振り返る。そして再度「普通とは何か」というテーマに対して他者の意見や考え方を踏まえて自分の考えを整理する。また、今後の社会生活において様々な人と関わり合う中でどのように生きたいかを問い、自己との対話やワークシートに考えをまとめる活動を通して、「普通」の基準は人によってそれぞれ異なるということや、人にはそれぞれものの見方や考え方があるということに気付かせ、互いの考えや立場を尊重して生きていこうとする態度を引き出したい。

4 道徳的価値に迫るための指導の工夫

- (1) 前時までに整理した意見や思考した過程などを伝え合うことで、より自分の考えを深められるようにする。
- (2) 他者の意見を活用しながら、自己と対話することでより良い生き方について考えを深められるようにする。

5 学習指導過程

(1) ねらい

「普通」とは何を基準として判断するのかを、伝え合う活動を通して他者の意見に触れることで多角的に考え、人にはそれぞれ自分のものの見方や考え方、個性があるということに気付く、互いの考えや立場を尊重し、理解し合おうとする道徳的実践意欲を養う。

(2) 指導計画

3時間扱い (本時は第3時)	○「普通」って何だろう。・・・・・・・・全3時間 第1時 みんなで考えよう・・・・・・・・1時間 第2時 自分の考えを整理しよう・・・・・・・・1時間 第3時 自分の考えを深めよう・・・・・・・・1時間(本時)
-------------------	--

(3) 展開 ※道徳的価値に迫るための指導の工夫

	主な活動 ②主発問 ①発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点 ①：評価 ○：全体、●：個別、□：教材
導入	1 これまでの話し合いの記録を見て振り返る。 ②「普通ってなんだろう？」	・ いろんな考え方があるんだな。 ・ 参考になる。	□ロイロノート・スクール上で授業データを配信しながら進める。 ○第1時の Jamboard のデータや第2時の話し合いの内容等を提示し、これまでに行われた話し合いの内容を振り返ることができるようにする。
	学習課題：多様な考えに触れ、自分の生き方を考えよう！		□Meet で接続して合同で行う。
展開	2 「普通」とは何か。の問いについてこれまでに整理した考えを発表する。 ○「これまでに整理した「普通」についての考えを発表しましょう。」 ②「考える中で、参考になった意見や心に響いた意見について、また、自分の考えが	・ 第1時及び第2時でワークシートに整理した現時点での自分の考えを発表する。 ・ ○○さんの○○という考え方が参考になった。	○話しやすい雰囲気作りに努める。 □ロイロノート・スクール上に、ワークシートを一覧で提示する。 ●ワークシートを提示した上で発表することで、思考の過程やどんな心の揺れ動きがあったかを視覚的に示す。 ●教師は考える過程や理由を引き出すような言葉かけを行う。 □Meet で接続して合同で行う。 ②他者の意見を取り入れ、自分

	どう変わったかについても教えてください。」		の意見を深めようとしている。 (発表、記述)
	3 ①今後の生き方について、自分の考えをワークシートに整理する。 ○「様々な意見や考え方を踏まえて、自分の考えを整理しましょう。」 ◎「社会生活を送る中で、様々な人と関わりながら生きていくと思いますが、どのように生きていきたいですか？」 ②整理した自分の考えを発表する。	・発表を聞いて、違う考えが浮かび、考えが変わった場合、補足したいことをワークシートに記入する。 ・「普通」は人によって違うから、自分の「普通」を押し付けないようにしたい。 ・互いの考え方を理解し、尊重したい。 ・誰かに合わせる必要はないと思う。自分らしくありたい。	○考える時間を十分に確保し、「普通」について考えたことを、今後の生活にどう活かしていくかについても考えさせる。 □考えを整理しやすくするために、前時までの Jamboard の記録や、[展開2]で発表した意見のスクリーンショットをホワイトボードに投影する。 ●個別に考えるポイントを投げかけ、自分自身で対話し考えを深めることができるようにする。 ●教師は考える過程や理由を引き出すような言葉かけを行う。 □アプリ「ねずみタイマー」を使って考えをまとめる時間を視覚的に示す。 □発表場面のみ Meet で接続して合同で行う。 ●生徒の考えを共感的に受け止めるようにする。 ○考えた過程や理由を認めるような言葉かけをする。 ⑦他者の意見を活用したり、自分の考えを深めたりしながら今後の自分の生き方について考えを深めようとしている。 (発表、記述)
終末	4 授業を振り返る。 ・スライドに記入し、提出箱に提出する。	・みんなと考えが違っていてもいい。 ・「普通」という考え方はそれぞれ違うもの。 ・自分にとっての「普通」は他者にとっては「普通」ではない。	・発表する時間の確保が難しい場合は、後日提出箱に提出するようにする。 ⑦提出されたスライドの記載内容も併せて個人内評価を行う。 (記述)

【板書計画】

普通って何だろう？

—自分の考えを深めよう—

内容項目：様々理解、寛容

学習の流れ

- 1 前時までの意見を振り返る。
- 2 整理してきた考えを発表しよう！
- 3 これからの自分の生き方について考えよう（発表のみ）
- 4 振り返り
・スライドに記入し、提出する。

活動1

これまでの話し合い・意見を振り返ろう！

・異感、発見、納得、感心etc. できるような意見はありましたか？

普通って何？ Season2

学習課題

多様な考えに触れ、
自分の生き方を考えよう！

活動2

どんな風に考えましたか？

これまでに整理してきた、みなさんの「普通」についての考えを発表しよう！

◎考える中で、参考になった意見や心に響いた意見。また、友達
の意見を聞いて自分の考えがどう変わったかについても教えて
ください！

「普通」についてみんなが考えたこと（まとめ）

- ・多数派の意見が常識というところがあったが、それぞれの個人がもっている基準が「普通」ということにあるのではない。
- ・大多数の人と同じ意見になる＝普通（暗黙の了解的）
- ・自分がもつ（あたりまえな）基準や価値観＝普通
- ・他者と意見が違った場面では意見を合わせたくなくなってしまう。（普通からそれることは悪？）
- ・自分と他者の「普通」についての考え方は違う。

活動3-①

今後、どのように周りの人と関わりながら、生きていきたいですか？

※みんなの発表を聞いて、さらに自分の考えが変わった場合は
ワークシートの項目2を訂正し直してからかまいません。

活動3-②

整理した自分の考えを発表しよう！

よくある「普通」って

・知識としての常識
・生活の中での常識（振舞い方や生き方）
・悪い込みの常識

自分と他人が思う「普通」は違うということを前提に生活すれば、もっと互いに歩み寄って、理解し合おうことにつながるかもしれないですね。

★振り返り・感想★

テーマについて考えてみて
・分かったこと
・気付いたこと など

発表しよう！

6 指導の工夫と実践内容

(1) 協力校との連携

事前打合せの内容については表1に示す。

ビデオ会議ツール「Meet」で2回打合せをし、授業内容の調整や、授業環境の共有・調整、アプリの使用方法について確認した。また、この他に授業内容の相談・調整や指導案・授業データについては Google Chat を使用して担当者間で共有を図った。

(2) 学習計画と内容について

〈表1〉打合せ内容

No	実施方法	打合せ内容
1	Meet	・第1回授業研究の反省 ・関係作り（自立活動）の授業について ・Jamboard の使い方 ・第2回授業研究について
2	Meet	・第2回授業研究について（授業展開、指導のポイント等の共有）

授業は Meet で協力校と繋ぎ、ロイロノート・スクール上にアップロードしたプレゼンテーション資料を画面配信しながら進行之た。また、ワークシートはロイロノート・スクールで生徒全員に共有し、意見や振り返り等はスライドに入力してから提出箱に提出するようにした。

時間	学習内容
自立活動	グループエンカウンター「朝起きて月だったら？」 ※Meet 接続チェック、Jamboard 使用チェックも兼ねる。
第1時 道徳科	普通って何だろうーみんなで考えようー ・「普通」についての自分の考えをもつ。 ・Jamboard を活用して協力校の生徒と自分の考えを共有し合う。
第2時 道徳科	普通って何だろうー自分の考えを整理しようー（学校ごと） ・第1時で共有し合った考えや価値観を踏まえて、再度自分の考えを整理する。 ・Jamboard を使って議論する。
第3時 道徳科	普通って何だろうー自分の考えを深めようー ・第2時で整理した自分の考えを発表し合う。 ・これまでの学びを踏まえて、今後の自分の生き方について考える。

実際に、教師はファシリテーターとしてサポートし、生徒たちが自分たちで類似した意見同士



140

をまとめたり、線で繋げて整理したりしながら議論を進めるうちに、それぞれが考えを活発に表出し、生徒が主体となって対話しながら考えを深めていた。

Jamboard を活用のメリットとしては、カードを並べることで思考した過程が視覚化され、誰がどのように思考したのかが一目で分かることが挙げられる。

(4) 思考の軌跡が分かるワークシート

3時間のユニット単元で授業を進める上で、「普通とは何か」というテーマに対する連続した学びの過程で、生徒の思考が回を追うごとにどのように変化し整理されたかを分かりやすくするために3時間完結型のワークシート（図2）を作成した。

ワークシートの構成としては「①『普通』についての自分の考え（第1時）」、「②話し合い活動で他者の考えを踏まえた上での自分の考え（第2時）」、「③自分の今後の生き方についての考え（第3時）」の三つの項目で構成した。生徒自身も自分が思考した過程や他者の意見を受けて自分の考えが変化した点などが一目で分かり、回を追うごとに自分事として考えが整理されていった。全ての枠の記入を終え、ワークシートが完成した時には達成感があったようである。

〈図2〉思考の軌跡が分かるワークシート

7 成果と課題

(1) 成果について

① 生徒の変容について

本実践ではテーマについて思考した自分なりの考えをワークシート（図2）に記入した。対象校の生徒の思考の変容を表3に示す。

第1時では、それぞれが思う「普通」について考えている。第2時では、第1時で考えた意見を協力校の生徒と伝え合った後に、話し合った内容を踏まえて考えを整理した。第1時の考えと比較すると、他者の考えや価値観に影響を受けて思考に変容が見られたことが分かる。

本実践ではユニット単元を設定し、「普通とは何か」というテーマについてじっくり掘り下げて思考した。「普通とは何か。」という問いに対して他者の考えを踏まえて思考する過程で、生徒たちが自分と他者の「普通」は違うということに気が始めていた。そこで第3時に教師は「これから社会生活を送る上で、様々な人と関わりながら生きていくと思いますが、どのように関わりながら生きていきたいですか。」という問いを投げかけた。その問いに対しての生徒たちの考えはこれまでのものと比較して、明らかな変化が見られた。どの生徒も自分の「普通」と他者の「普通」は異なるが、自分と考えが違っていても排除するのではなく、他者の「普通」を尊重しながら生きていきたいという、問いを自分事として捉え自分なりに考えて記述した結果が見られるなどそれぞれが自分事として落とし込むことができたと感じている。

「問いに対する明確な答えはなく、また正解や不正解もない。自分なりの考えをしっかりともつことが大切。」とこれまで授業の中で繰り返し伝えてきた。自分の意見や本音を表出することに抵抗感のあった生徒Eが、授業を重ねる中で臆することなく堂々と自分の意見を発表したり、友達の意見に対しても共感したりする様子が見られた。また、授業の中で相手の話に耳を傾け、自分の意見もしっかり伝えることを繰り返し行ってきたことで、学校生活の中でも互いの意見を尊重しながら会話をする場面も見られるようになった。

〈表3〉ワークシートにおける生徒の思考の変容

時間	生徒D	生徒E	生徒F
第1時 「普通」につ	・自分の思っている基準や価値観のこと。	・自分が思う「当たり前」なこと。	・多数派と同じ考えになること。

いての自分の 考え	・価値観は人それぞれ違う。 ・公共でのマナーなど暗黙の了解的な普通がある。	・世の中の人と思う大多数の意見。 ・自分に障害があるということ	
第2時 他者の意見を 踏まえて整理 した考え	・多数の人と同じ意見になること＝共通の普通 ・自分だけがもつ基準や価値観、固定概念	・「普通」について他の人と意見を合わせたくなくなってしまう。 ・場違いな感じがしてしまうから。	・一人一人がもっている基準が「普通」なんだと思った。
第3時 今後の自分の 生き方	・時や場合にもよるが、相手の「普通」も考えながら生活していきたい。	・もし意見が合わなくても、「そういう意見もある。」と受け入れられる社会になると良い。 ・誰かに合わせなくてもいいということに気付いた。これからは自分らしく生きていこうと思った。	・これから生きていく中で、様々な意見をもつ人と出会うと思うが、その人の「普通」を否定せずに接していきたい。 ・自分にとっての「普通」を考え、流されずに生きていきたい。

② ICT・協力校との連携について

本実践では ICT 機器（ビデオ会議ツール・ロイロノート・スクール・Jamboard 等）を使って遠隔合同授業を実施したことで、学校も住む地域も異なる同学齢の生徒同士で学び合うことができた。また、授業を受けた人数が2倍（対象校比）となったことで多様な価値観に触れる事ができた。これは生徒にとってとても新鮮であり、大きな刺激となったことが生徒の反応から見るに明らかだった。このことから、準ずる教育課程が抱えている在籍人数が少ないために他者と価値観を共有することに困難さがあるという課題にも対応できたと考えている。

遠隔合同授業を実施するにあたって、最初に抱いたイメージは「手続きが煩雑なのではないか。」ということだった。しかし、実際に授業を行うために必要な手続き（指導案や授業データ・教材の共有、打合せ）については全てオンライン会議及びチャットで行ったため、比較的負担も少なく進めることができた。

③ 授業後アンケートより

授業実施後に遠隔授業について、生徒自身がどう感じたかを知るために Google Forms を活用してアンケートを実施した。具体的な回答の内容については表4に示す。

3時間の同一の内容項目と道徳的価値についての連続した学びの過程で、生徒たちが「普通」の基準は人によってそれぞれ異なるということや、人はそれぞれにものの見方や考え方をもっているということに気付くことができた。また、互いの考えや立場を尊重しながら自分らしく生きていこうとする道徳的実践意欲の高まりを感じた。

〈表4〉授業後アンケートに寄せられた生徒たちの回答

Q1 ICT を活用した授業について
・iPadなどの機器を使用して行う授業は新鮮でとても面白かったです。 ・簡単に意見の共有・修正などができ双方向で色々な意見を聞き、考えを深める事ができて良かったです。 ・意見の共有がしやすく自分の考えの幅を広げられました。 ・みんなが書いたものを共有しながら意見を出し合ったりできて、良いコミュニケーションが取れました。
Q2 遠隔合同授業を通して
・相手の意見を聞き「こういう考えもあるな。」と、いろいろな角度から物事を考えられるようになった。 ・他者の考えを受け入れる。多角的に物事を見る視野が広がったと思う。 ・6人の意見を交わし合いながら、話し合ったので3人のときより、意見に共感できたり意見が変わった

りして、道徳での話合いが弾むようになりました！

Q3 「普通とは何か」というテーマについて

- ・今まで自分が考えてきた中に「普通ではない意見」ということがありましたが、自分にとっての普通があるということが分かった。
 - ・普段、普通を考えることはなかったですが、考える良い機会をもらったなと思います。
 - ・自分の考えがいかに関定観念に囚われているのかを改めて実感する事ができた。
 - ・自分なりの考えを見付けられました。
-

(2) 課題について

① 他校と連携する際の年間指導計画の擦り合わせや役割分担、手続きの難しさ

ICT 機器を活用して遠隔合同授業を行うことについてメリットが多数ある反面、授業を実施するに当たっての協力校への依頼や、どの時期にどの単元で授業を行うのか、役割分担はどうするのか等を擦り合わせていく必要があり、その手続きに難しさを感じた。

② 生徒の内面をさらに引き出すための指導の工夫

今回の実践により生徒の思考の深まりや授業に取り組む態度に成果が見られた反面、まだ自分事として捉え、考えることが難しい生徒もいた。生徒の生活経験の少なさから、正論を論じている生徒もあり、さらに自分事として考え、内面的な部分を引き出すことができるような、ねらいに迫る指導の工夫が必要だと感じた。

目次にカエルときは
ここをクリック

LINK 



実践例 13	自立活動と関連付けた道徳科の実践 ～道徳科と自立活動を合わせた4時間パッケージ授業を通して～	
	知的障害特別支援学校	小学部

1 主題名 家族で協力しあって

内容項目 C- (15) 家族愛、家庭生活の充実

自立活動 2 心理的な安定①～③、3 人間関係の形成①～④、5 身体の動き③、6 コミュニケーション①～⑤

2 教材名 「家族にっこり、家族に協力しよう」(1時間目、道徳科)

「家族にっこり、お手伝い大作戦！」(2・3時間目、自立活動+道徳科)

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

本学習は、小学校学習指導要領の内容項目 C-(15)家族愛、家庭生活の充実「父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つこと。」を主なねらいとしている。自分を含めた家族が笑顔で過ごすための自分の役割について考え、必要な要求に応じて家族の役に立ったり、支えたりすることに主体的に参加しようとする意欲と態度を育てたい。また、自立活動と合わせて内容を深めることで、やってもらうことが多い生活の中で、自分ができることを見付け、進んで行動しようとする心情を育て、活躍できる場を増やしていきたい。

(2) 児童の実態について

小学部6学年は、男子10人、女子6人の計16人で構成されている。課題について自分の考えや気持ちを表出し、教師の支援を受けて話し合い活動を行うことができる児童もいれば、気持ちや考えを表出したり、質問に答えたり、会話をしたりすることなどが困難な児童もあり、より実態に応じた内容で学習ができるように、2グループに分けて授業を行うこととした。

本グループは6人で構成され、自分から意志表出をしたり、行動したりすることが難しい実態である。意志表出については、選択肢を設けたり、イラストや文字で説明したりすることで、伝えようとする児童もいるが、内容によっては本心で選んでいるかどうかの読み取りが難しいこともある。日常生活上の動きに関しては、教師からの言葉かけや指さしなどの支援を受けることで、行動することができる。一方で、「やってもらう」ことに慣れており、自分からやろうとする力(自主性)、手伝おうとする力(奉仕の心、思いやり等)はこれから身に付けたり伸ばしたりすべき課題である。

(3) 教材について

ねらいにある「家族の役に立つ」という部分に着目できるように、「協力する」を「手伝いをする」と結び付けた学習を行う。どんな言動が家族の役に立つのかをペープサートを用いて紹介したり、主人公の言動で家族が笑顔になる場面とそうでない場면을提示したりすることで手伝いをする事への実践意欲や道徳的心情を芽生えさせたい。また、自立活動と合わせた指導を行うことで、コミュニケーションスキルや日常に必要な動きのスキルの向上を目指したい。

4 道徳的価値に迫るための指導の工夫

前時までに使用したウサギの掲示物を用い、自分の言動で相手がどういう表情(気持ち)になるのかや手伝いをする事で相手が、「助かる」や「喜ぶ」、「嬉しい」などの気持ちになることが分かるようにする。また、体験活動を取り入れ、具体的にどのようなことをすれば、家族の役に立てるのかということを考えることができるようにする。

1時間目の道徳科では、どのような状況が家族と協力することなのかを考えたり、選んだり、他者の意見を聞いたりすることで、家族で協力することの大切さについて捉えることができるようにする。また、協力しようとする意欲を高めることができるように、自分だったら「この手伝いをしたい」、「このお手伝いができる」という気持ちを表現できるワークシートを用意する。

2時間目の自立活動では、道徳科の学習内容に触れ、協力することの大切さを再度確認する。主に相手からお願いされて手伝いをする場面を設定し、体験活動を行う。言動による相手の表情や気

持ちの変化を可視化して表示し、手伝いすることへの意欲を高めながら活動に参加できるようにする。

3時間目の自立活動では、自分から手伝おうとする気持ちを高めるため、手伝いの内容が書かれたカードを数種類用意し、どの内容で自分が役に立とうとするかを考えて、選択して体験活動ができるようにする。

4時間目の道徳科では、家族から手伝いに対する感謝の手紙をもらい、手伝いをすることで家族が喜んでいる、感謝していることを実感できるようにする。さらに、感謝を受けて自分がどんな気持ちになったかにも触れ、協力することで生まれる自他の気持ちを考えることができるようにする。

5 学習指導過程（1時間目：道徳科）

※道徳的価値に迫るための指導の工夫

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される児童の反応	指導上の留意点 評価
導入	1 動画や掲示物を見て、困った顔のうさぎが、どうしたら笑顔になるのかを考える。 2 「協力する」という意味や場面を知る。 3 協力場面のイラストを見てそれをした時の家族の気持ちや表情を考える。 ○協力すると家族はどんな気持ちになるのかを考えよう。	・「ありがとう」「助かる」「一緒に」などうさぎが笑顔になるような言葉を選ぶ。 ・協力している場面絵を選ぶ。 ・表情カードを選ぶ。	・台詞カードを数種類用意する。 ・協力する場面が理解できるよう、手伝いの場面等を絵で提示する。 ・気持ちを考えることができるように文字カードや表情カードを使用する。 ◎家族の気持ちを考えて選んでいるか。（発表、カード）
展開	「かぞくにっこり、かぞくにきょうりょくしよう」 4 本時の課題を確認する。 5 家族のために自分がすること（できること）を考える。 ◎家族に協力するために自分ができることややりたいことは何でしょう。	・自分がやろうとすることを選んでワークシートに貼る。	・自分の考えを明示し、手伝いへの意識と意欲を高めることができるように、ワークシートを使用する。 ◎協力したい手伝いを選ぶことができたか。（発表、ワークシート）
終末	6 自他の考えを知り、それぞれが手伝いをすることで家族が喜ぶことを知る。 ○あなたがその手伝いをすると家族はどんな気持ち（表情）になるだろう。	・教師の支援を受けて、発表する。 ・他者の考えを見たり聞いたりする。 ・「にっこり」と言ったり、笑顔を見せたりして表情を伝える。	・選んだ行動が家族の役に立つことに気付けるように、発表者に「家族が喜ぶね」「家族は助かるね」などと言葉を掛ける。 ・発表の後、笑顔カードを渡し、ワークシートに貼ることで、選んだ手伝いで家族が笑顔になることを伝える。

学習指導過程（2時間目：自立活動＋道徳科）

※道徳的価値に迫るための指導の工夫

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される児童の反応	指導上の留意点 評価
導入	1 前時の学習内容を振り返り、本時の課題を知る。 「かぞくにっこり、おてつだいだいさくせん！」 2 家族のお願い（アンケート結果）を知る。	・イラストを見て、身振りや発声で伝えようとする。 ・指差しや発声などで内容の確認しようとする。	・振り返りがしやすいように、前時に使用した説明や場面絵などを掲示する。 ・手伝いへの意識を高めるために、絵と文字でそれぞれの家族の願いを提示するとともに、個々に家族

			の願いカードを渡す。
展開	3 アンケートで出た手伝いに挑戦する。(複数) <手伝いの内容> ・テーブル拭き ・カーテンのあけしめ ・食器の下膳 など 4 実践したものの中から、家族の自分が役に立てると思う手伝いを選ぶ。 ◎家族の役に立てる手伝いは何か考えよう。	・自分から行う。 ・促しや支援を受けて行う。 ・自分ができる、またはしたい手伝いを選ぶ。 ・選んだ手伝いカードをワークシートに貼る。	・「家族がにっこりするね」「家でもできそうだね」などと言葉を掛けて、家でも実践しようとする意欲を高める。 ・活動の手順ややりとりが分かるように、手伝いを終えるまでの活動見本を教師が行う。 ・「〇〇の手伝いをお願いします」と言葉を掛けてやりとりしながら活動する場面を作る。 ・家族の願いや自分が手伝いたい内容が明確になるように、手伝いカードを用意する。 ◎評 手伝いを選ぶことができたか。 (発表、ワークシート)
終末	5 選んだ手伝いを実践、発表し、笑顔カードをもらう。 6 まとめの話を聞く。 ・家族にっこり大作戦を家でもやってみよう。 ・家族と協力してみよう。	・自分から行動する。 ・促しや支援を受けて行動する。 ・笑顔カードをもらい、カードに貼る。	・笑顔カードを渡すことで手伝いが家族の役に立つことや家族が喜ぶことに気付くことができるようにする。 ◎評 手伝いを選んで実践できたか。 (発表、カード)

学習指導過程 (3時間目：自立活動+道徳科) ※道徳的価値に迫るための指導の工夫

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される児童の反応	指導上の留意点 評価
導入	1 学習課題と前時までの学習内容を振り返る。 「かぞくにっこり、おてつだいだいさくせん！」 ◎家族が笑顔になるための協力(手伝い)とは何があるか。	・振り返った内容について身振りや発言で伝える。 ・手伝いカードを選んで渡す。	・振り返りがしやすいように、前時に使用した説明や場面絵などを掲示する。 ・家族のためになる手伝いを考えて選ぶことができるように、手伝いが絵と文字で書かれたカードを用意する。
展開	2 手伝いの体験をする。(複数) ・次から手伝いを選んで体験する。 ・カーテンの開け閉め ・洗濯物の取り込み、たたみ ・食器の下膳、テーブル拭き ・やってみたい、協力してみたい手伝いを選ぶ。 ◎自分がやってみたい、協力したい手伝いは何か考えよう。	・自分から体験する。 ・促しや支援を受けて体験する。 ・手伝いを選び、ワークシートに貼る。	・「スタート」の号令で体験したい手伝いを選んで活動できるように、体験することを伝えるのみにする。 ・複数の活動が体験できるように待ち時間ができそうな時には、他の手伝いに誘導する。 ・家での手伝いにつながるように「〇〇が上手にできてるね」「〇〇したら家族が喜ぶね」などと言葉を掛ける。 ◎評 手伝いを選んで活動できたか。 (発表、ワークシート)
終末	3 まとめの話を聞く。 ・家でも自分から手伝ってみよう。	・言葉や身振り手振りなどで返事をする。	・家族との協力や家族が笑顔になる行動の1つに手伝いをするを

	・お願いされたらやってみよう。 ・できる手伝いを増やしていこう。	・うなずく。	挙げ、家庭でも実践してみるように話す。
--	---	--	---

学習指導過程（4 時間目：道徳科）冬休みに行った手伝いを発表し、保護者から感謝の手紙を得る。

※道徳的価値に迫るための指導の工夫

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される児童の反応	指導上の留意点 評価
導入	1 冬休み中の手伝いについて話を聞く。 かぞくにっこり、おてつだいだいさくせん! ○冬休みの間、あなたは何か手伝いをしましたか。	・した ・してない ・手伝いカードを選んで渡す。 ・ほうき ・かいもの	・手伝いの内容がかかれたイラスト・文字カードを用意する。 ◎自分の行いを振り返ることができたか。（発表、カード）
展開	2 保護者から教えてもらった冬休みにした手伝いの紹介をする。 3 家族からの感謝の手紙を受け取る。 ◎手伝いをすると家族はどんな気持ちになったと思いますか。 ○手伝いをして感謝されてどんな気持ちになりましたか。	・やったー ・にっこり ・にっこり、ばんざい、たすかるなどを選ぶ。	・イラストとともに手伝いの内容を一人一人に紹介し、自分の努力や友達のがんばりを知ることができるようにする。 ◎手伝いが家族の助けになる行いであることや家族が喜ぶ行いであると感じることができるよう、「すばらしい」「家族はにっこりだね」などと言葉を掛ける。 ◎自他の気持ちについて考えて発言又は選択できたか。（発表、カード）
終末	4 ワークシートに記入する。	・選択肢から自分の思いを選んで、丸を付けたり、指をさしたりする。	・選択式のワークシートを提示する。

【板書計画】道徳科(1 時間目)

かぞくにっこり、かぞくにきょうりよくしよう。

きょうりよく…ちからをあわせる、いっしょにやる



にっこりする
えがおになる



こまった

たいへん

どうしよう

ひとりじゃむり

おねがいた

場面	手伝い イラスト	手伝い イラスト	手伝い イラスト	手伝い イラスト	手伝い イラスト
表情					
言葉 気持ち	ありがとう	うれしい	たすかる	やった	いっしょに
				おねがい	

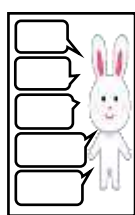
【板書計画】道徳科(2時間目)

きょうりょく…ちからをあわせる、
いっしょにやる



ワークシート

ニコニコ



ワークシート

ニコニコ

かぞくにつこり、おてつだいだいさくせん！

かぞくのおねがい

〇〇さん

〇〇さん

〇〇さん

〇〇さん

わたしがやってみたくてつだい

A	B	C	D	E	F	G
手伝い	手伝い	手伝い	手伝い	手伝い	手伝い	手伝い
						

6 指導の工夫

(1) 教材・教具の工夫

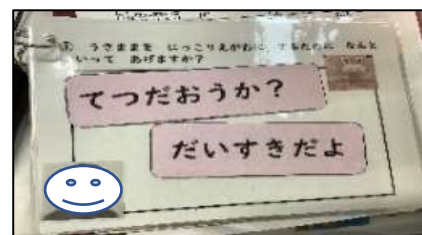
自立活動と合わせて指導する中で「心理的な安定」「人間関係の形成」「身体の動き」「コミュニケーション」などそれぞれの自立活動の目標に応じた課題(図1)に挑戦できる内容と合わせて、「家族愛、家族生活の充実」の道徳科のねらいに迫ることができるように体験活動を設定した。興味・関心を高めるために課題の内容に沿った動画を作成し、内容理解を深め、気持ちや考えを表出できるようにした。また、発語や考えを表出するために、タブレット端末のアプリ「Finger Board Pro」を用い、「嬉しい」「悲しい」「頑張った」などの気持ちや「手伝おうか。」「何かできることはある。」など自分が相手に伝えたい台詞を選択したり、発表時に使用して自分の考えを伝えたりすることができるようにした。さらに、自分の考えを手元で確認したり、振り返りに使用したりできるように、ワークシート(図2)を用いた。

(2) 手伝いに関するアンケートと感謝の手紙を保護者に依頼

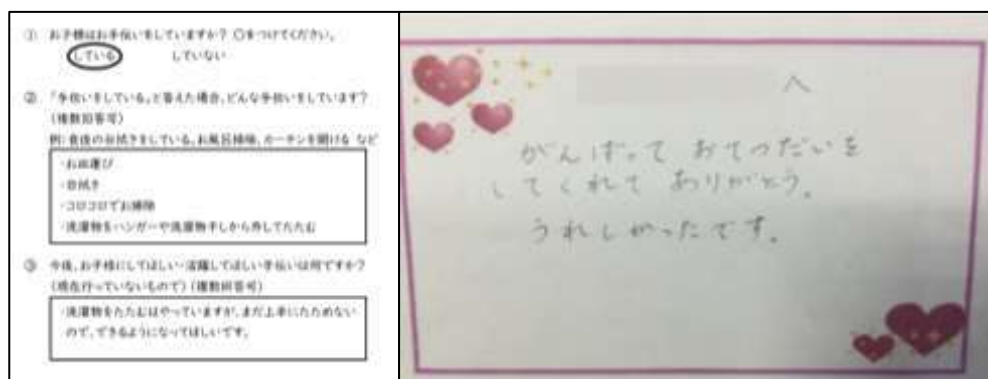
手伝いに関するアンケートを保護者に依頼し、児童の実態を把握し、内容設定に生かすようにした。また、保護者からの手伝いに関する感謝の手紙を授業の中で渡すことで「家族に協力すると家族がにっこりする(喜ぶ・嬉しい)」と自分事として体感、実感できるようにした(図3)。

児童	自立活動の短期目標
A	・気持ちを切り替えながら、課題に取り組む。
B	・「〇〇はどれ？」などの質問を聞いて、イラストカードを選んだり、具体物を渡したりする。
C	・様々な素材や形、重さの物を運んだり、操作したりする。(しまう・かける・置くなど)
D	・絵カードを見て、場面に合ったあいさつや言葉を教師と一緒に言う。
E	・ロールプレイングで、場面に応じたやりとりをする。
F	・2分間椅子に座って、パズルなどの活動を一人でやる。

〈図1〉自立活動の短期目標



〈図2〉A5 サイズのワークシート



〈図3〉保護者へのアンケートと児童への手紙

7 授業の実際

(1) 1時間目 道徳科における児童の様子と考察

- ・ 始めの挨拶の時点では、落ち着かない状況だったが、モニターに映る動画と音声に気付き、視線を向けて見入る児童が多かった。
- ・ タブレット端末の使用は選択肢を選んだり、気持ちを表出したりする点で効果的だった。個別に指示を伝え、返答を待つことで、選択肢から台詞や行動を選ぶことができた。
- ・ 学習中に離席をしたり、関係のない話をしたりするなど落ち着かない児童もいるが、少人数にしたこと、動画を用いたこと、選択肢を設けて選ぶことができるようにしたことで、学習内容への注目や参加時間が増えたと考える。
- ・ 児童 B は、タブレット端末内の台詞枠を一つずつ聞いて確かめ、発表時に台詞の一つを選んで表出することができた(図4)。



〈図4〉タブレット端末で台詞を選択

(2) 2時間目 自立活動における児童の様子と考察

- ・ 児童 A は、授業の途中で集中が途切れてしまい、落ち着かない様子で取り組むこともあったが、手順を掲示し、教師と一緒に確認しながら活動を進めることで、手順を覚えて最後まで取り組むことができた。
- ・ 児童 B は、自分が家族のためにやりたい手伝い「窓やカーテンの開け閉め」「洗濯物の取り込み、たたむ(靴下、タオル、ハンドタオル)」「食器の片づけ、台ふき」(図5)の三つの中から一つを選んで、ワークシートに貼ることができた。
- ・ 自分が家族のためにやりたい手伝いを選ぶ際に、家族からのお願いと一致する児童が5人中3人となった。家族からのお願いの手紙が選択肢を選ぶためのヒントとなった可能性が考えられる。



〈図5〉手伝いブース

(3) 3時間目 自立活動における児童の様子と考察

- ・ 児童 E は、指示を受けてから食器を運ぶだけではなく、自分から洗い出したり(図6)、児童 D は、洗濯物を干し始めたりと、自主的な行動として表れた。活動の目的が理解できたこと、普段生活の中で見ていたことがつながり行動として表すことができたのではないかと考えられる。
- ・ 手伝いをした時の家族の気持ちを考える際に、「にっこり・うれしい」を全員が選択したり、選択肢を選んだりする時にどれにするか考えて選ぶ児童が多かった。教師が活動時に意識的に笑顔で「ありがとう」「嬉しいよ」などと伝えたことも効果的だったのではないかと考える。
- ・ 上手にできたと自分が思う活動をみんなに発表する場面では、タブレット端末を使って動画をモニターに映すことで、児童が注目して友達



〈図6〉自主的な行動

(4) 4時間目 道徳科における児童の様子と考察

- ・ 手紙(図8)を渡して一緒に内容を確認すると、児童 F は、嬉しそうに何度も指さして嬉しいと手話を交えて感想を話したり、児童 E は、「ママからもらったの。」と教師に見せに行ったりして喜んでいた。
- ・ 手伝いへの意欲や自他の気持ちを尋ねるワークシートに取り組んだところ、児童 C は、手伝いへの気持ちや手紙をもらった時の気持ちについて、それぞれの選択肢から一つを選ぶことができた(図9)。



〈図8〉保護者からの手紙



〈図7〉活動の発表場面



〈図9〉ワークシートへ取り組む様子

8 成果と課題

(1) 成果について

- ・ 自作動画を使用したことで課題に注目し、質問に対する反応や返答を得ることができた。
- ・ 家族から手伝い内容を確認していたことで、実態に合う手伝い内容を設定でき、活動に集中して取り組むことができる児童が多かった。
- ・ 自立活動で2回とも同じ内容で活動を設定したことで、見通しをもつことができ、活動にスムーズに移行できたり、自主的・自発的に活動したりすることができた。
- ・ 自分で手伝いたい内容を選ぶことで、自分から発展的な行動をする児童もいた。
- ・ 手伝い後に家族から感謝の手紙をもらったことで、児童が喜びや達成感を得ることができた。（じっと見る、笑顔、うれしいの言葉など）
- ・ 個人の自立活動の目標とリンクをさせて、活動することができた。

(2) 課題について

- ・ 相手の気持ちやどの手伝いをしたいかなどを考える際に、選択肢を設けて選ぶようにしたが、自分の考えで選ぶことが難しい児童もいた。しかし、選んだ内容を教師が言葉や動作などで本人に伝え返すことで、学習につながる可能性もある。
- ・ 発語のない児童のために、タブレット端末で文字と音声入りの項目で選択肢を提示したが、押すこと、音声が出ることに注目してしまい、落ち着きや集中力が低下する児童もいた。日常の学習でも使う頻度を増やし、タブレット端末の使用に慣れるようにしていく。
- ・ 「にっこり」「がっかり」など反対の意味の言葉を選択肢として設けたために、イントネーションやこだわりなどから反対の意味を表す言葉の選択肢を選んでしまう児童もいた。
- ・ 支援の必要な児童が多く、活動によっては待つ時間が増えてしまったため、一人でもできる活動内容を設定していく。
- ・ 自立活動の内容に合わせた学習活動を設定することが難しいこともある。自立活動の目標の一部分でも学習活動に取り入れることができるように目標をスモールステップにして考える。

目次にカエルときは
ここをクリック

LINK 



実践例 14	自立活動と関連付けた道徳科の実践 ～道徳科と自立活動を合わせた4時間パッケージ授業を通して～	
	知的障害特別支援学校	小学部

- 1 主題名 感謝の気持ち
 内容項目 B－（８）感謝 （７）親切、思いやり
 自立活動 2 心理的な安定①～③、3 人間関係の形成①～④、6 コミュニケーション①～⑤

- 2 教材名 「ありがとう」のプレゼント （道徳科2時間、自立活動2時間扱い）

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

本学習は、小学校学習指導要領特別の教科道徳の小学校第5学年及び6学年内容項目B－（８）感謝「日々の生活が家族や過去からの多くの人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それに応えること。」を主なねらいとした。合わせてB－（７）親切、思いやり「誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にすること。」も含めて学習する。B感謝の(1)内容項目の概要に「感謝の気持ちは、人が自分のためにしてくれている事柄に気付くこと、それはどのような思いでしてくれているのかを知ることによって芽生え、育まれる」とあるように、感謝とは、人との関わりの中で生まれる気持ちや行動からなるものであり、親切や思いやりとも通ずる事柄でもある。やり取りを通して日々の生活の中にはたくさんの感謝の場面があることに気付き、自分から周囲の気持ちに応えて行動しようとする意欲と態度を育てたい。また、自立活動と合わせて指導することで、感謝する、される場面を体験し、豊かな心の育成と人間関係構築につながる心情を育てたい。

(2) 児童の実態について

小学部6学年は、男子10人、女子6人の計16人で構成されている。学習課題について自分の考えや気持ちを表出し、教師の支援を受けて話し合いをすることができる児童もいる。一方で気持ちや考えを表出したり、質問に答えたり、会話をしたりすることなどが困難な児童もいる。そこで、より実態に応じた内容で学習できるように、2グループに分けて授業を行うこととした。

本グループは、自閉的傾向を示す児童が多く、言語の表現力や理解力についての実態差は大きい。やり取りをしながら学習できる9人で構成されている。話し合い活動は難しいものの、質問に対して自分なりの表現方法で自分の考えを答えることができる。しかし、その時の気持ちに左右されやすく、自信がなく発言に戸惑ったり、行動に消極的であきらめてしまったりすることがある。日々の生活の中では、友達や教師のために手伝いや手助けなど優しさをもった行動ができたり、何かをしてもらった後に「ありがとう」と自然に伝えたりできる児童たちである。

(3) 教材について

感謝とは「人との関わりの中で生まれるもの」「親切・思いやりとつながりがある」ことが伝わる・実感できるように、児童の身近な場면을提示して学習を進めていく。児童の身近にいる友達や家族、学校で関わってきた人を感謝する対象とし、「感謝すること」と「感謝されること」の両方向の立場に立って考える課題の設定を行う。児童が感謝の場면을イメージできるように、日常の言動や場面、学習で取り扱った内容を取り上げるとともに、自分と関わりのある人にも視野を広げ、周囲への感謝へもつなげていきたい。

4 道徳的価値に迫るための指導の工夫

感謝の気持ちを「ありがとうのプレゼント」、親切・思いやりの行動を「優しさのハート」で表し、ワークシートや場면을工夫することで台詞や行動をイメージして考えることができるようにする。

1時間目の道徳科では、具体的な場면을提示して気持ちや台詞を考えたり、自分が行っている、または、やってみたいと思う行動を考えたりする活動を設定することで、「ありがとう」という感謝の気持ちや言葉が生まれるまでにはどう行動するかを捉えることができるようにする。

2時間目の自立活動では、家族に視点を置き、日ごろの感謝に対して自分がどう行動していくか

を考える活動を取り入れる。また、考えについて話し合いをすることで、他者の考えに触れることができるようにする。

3時間目の自立活動では、自分がこれまで関わってきた人に目を向け、どんな場面で感謝してきたかを考える課題を設定する。自分が考えた場面について相手とのやり取りを通して体験することで、感謝の気持ちと親切・思いやりの行動のつながりに近付けるようにする。

4時間目の道徳科では、卒業をきっかけにお世話になった人へ感謝の気持ちを伝える手紙を書き、これから自分はどうその思いに応えて行動していくかを考える時間とする。

5 学習指導過程（1時間目：道徳科）

※道徳的価値に迫るための指導の工夫

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される児童の反応	指導上の留意点 評価
導入	1 場面図を見て、「感謝」と「親切・思いやり」どちらの気持ちか考える。 ○この絵の人はどんな気持ちかな？ どんな台詞を言うかな？ ○「感謝」と「親切・思いやり」どちらかな？ 2 「感謝」と「親切・思いやり」について話を聞く。	・ありがとう、どういたしまして。 ・○○してあげるよ。 ・こっちが感謝でこちらは思いやりだと思う。 ・分からない。 ・これが感謝であっちが親切。 ・どちらも嬉しい気持ち。	・場面設定として日常の中で児童がしている行動を用いる。 ・「ありがとう」と書かれたプレゼントと親切・思いやりと書かれたハートのイラストを提示する。 ・どちらの言葉も気持ちが動いて行動につながることを理解できるように、意味や状況を台詞やイラストを使って説明する。
展開	3 本時の課題を知る。 心あったか「ありがとう」のプレゼント 4 ワークシートで自分が思う「感謝」の場面を考える。 ◎ありがとうのプレゼントをもらう場面を考えてみよう。 5 考えを発表したり、行動で表現したりする。（劇化）	・あの時のことを書こう。 ・これってありがとうでいいのかな。 ・分からない。 ・鉛筆を忘れた時に、○○さんが貸してくれた。 ・給食をこぼした時に一緒に拭いてあげたらありがとうと言われた。 ・出しっぱなしのタブレット端末をしまってくれた。	・感謝について考えることを捉えることができるように、課題を提示して説明する。 ・自分がした経験でも想像でも良いことを伝える。 ・教師が例示し、学習を進める手がかりとする。 ・表現するのが難しい児童には、親切・思いやりの場面を提示し、選択できるようにする。 ◎場面に応じた台詞を考えて話しているか、又は書いているか。（発表、ワークシート） ・感謝の気持ちを捉えることができるように、言葉や行動で考えた事を表現する場面を設ける。 ・感謝の前の行動に「親切・思いやり」の気持ちが含まれていることにも触れて、言葉を掛ける。
終末	6 学習で分かったことや感じたことなどについてまとめる。	・どちらの人も嬉しい。 ・友達が困っていたら助ける。	・選択肢と自分の言葉で書く形式のワークシートを用意する。

学習指導過程（2時間目：道徳科+自立活動）

※道徳的価値に迫るための指導の工夫

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される児童の反応	指導上の留意点 評価
導入	1 前時の学習内容の振り返りと本時の学習について知る。 ○家族に感謝する時はどんな時ですか？ 2 本時の課題を知る。 「ありがとうのプレゼントをたくさんふやそう」	・「ありがとう」の勉強。 ・良い行動をすると嬉しい。 ・ご飯を作ってくれる。 ・送り迎えをしてくれる。	・振り返りがしやすいように、前時に作成したワークシートや場面絵などを掲示する。 ・家族に感謝する場面を捉えることができるように、具体例を挙げる。 ・感謝の言葉をもらった経験を思い出すことができるように、冬休みに手伝いをしてもらった手紙を提示する。
展開	3 家族との関わりの中で感謝の言葉を伝えることのできる場面を考える。 ◎家族からありがとうのプレゼントをもらえたら、自分だったらどう行動するかを考えて、話し合おう。	・洗濯物の手伝いをしたときありがとうって言われた。 ・車で毛布をかけたならありがとうって言ってた。 ・それは○○したほうがいい。 ・分からない。	・考えを自他評価できるように、自己が考えた感謝される言動を劇化して表現する。 ・劇を見て感謝を感じることができたら、プレゼントカードを渡す活動を設定する。 ・考えたり、話し合ったりするのが難しい児童には、教師が言葉を掛けて支援する。 ◎ 感謝の場面を考えているか。（発表） ◎ 感謝の場面かどうかを考えてプレゼントカードを渡せたか。（観察） ・感謝の前の行動に「親切・思いやり」の気持ちが含まれていることにも触れて、言葉を掛ける。
終末	4 友だちと話し合いをし、気付いたことや考えたことをまとめる。	・ありがとうと言われるとまたやろうと思う。	・参考になるような意見を紹介する。

学習指導過程（3時間目：道徳科+自立活動）

※道徳的価値に迫るための指導の工夫

	主な活動 ◎主発問 ○発問	予想される児童の反応	指導上の留意点 評価
導入	1 前時の学習内容を振り返る。 ○どんな学習をしたか覚えてますか。 2 本時の課題を知る。 「ありがとうのプレゼントをもっともつとふやそう」	・家族にありがとうって言うてもらおう勉強。 ・ありがとうだよ。 ・がんばる。	・前時の内容を振り返ることができるように掲示物を示して話す。 ・課題の意味が理解できるように、前時で得たプレゼントカードを渡しながらかつ話をします。
展開	3 小学部6年間でお世話になった人や感謝すべき人たちを思い出してまとめよう。 ◎学校に入学してからみんなはどんな感謝の場面に出会ってきただろう。 ・ワークシートに書く。 ・発表する。 ・役割演技をして、感謝される立場と感謝する立場を体験する。	・消防署の人。 ・修学旅行の船の運転手。 ・水族館の人。 ・海浜公園の人。 ・お母さん。 ・給食の調理員さん。 ・先生。 ・分からない。	・どんな時にどんなことで人と関わってきたかを振り返ることができるように、6年間の活動を紹介したり、話し合ったりする時間を設ける。 ・どんな人が感謝すべき人に当てはまるのか、例を挙げて説明をする。 ・考えをまとめることができるようにワークシートを用意する。

	・台詞を考えてやり取りする。		・感謝する側とされる側の双方の気持ちに触れることができるように役割演技でやり取りする活動を設ける。 ㊦感謝すべき人を考えることができたか。(発表、ワークシート) ㊦それぞれの立場の台詞ややり取りができたか。(発表)
終末	5 学習のまとめをする。	・お世話になった人がたくさんいた。	・感謝と思いやり・親切のつながりを伝える。 ・学習を振り返ることができるよう、ワークシートを提示して話をする。

学習指導過程（4時間目：道徳科）

※道徳的価値に迫るための指導の工夫

	主な活動 ㊦主発問 ㊦発問	予想される児童の反応	指導上の留意点 評価
導入	1 前時の学習内容を振り返る。 ㊦感謝の学習ではどんな学習をしたか覚えてますか。 2 本時の課題を知る。 「ありがとう」をつたえよう ㊦「ありがとう」を伝えるための手立てについて考えよう。	・お世話になった人考えた。 ・ありがとうの勉強。 ・ありがとうと伝える。 ・何かあげる。 ・手紙をあげる。 ・メッセージカードを書く。	・前時の内容を振り返ることができるように掲示物を貼って話す。 ・感謝と思いやり・親切のつながりを話す。 ・本時の課題に迫ることができるように、感謝を相手に伝えるためにはどうしたら良いかを尋ねる。 ・感謝は言葉や表情、行動で感謝と伝えることができることに気付くことができるように発問する。
展開	3 感謝の気持ちをメッセージカードに書く。 ㊦どんな気持ちを込めてメッセージを書くと良いでしょうか。 ㊦感謝をこめてメッセージを書いてみよう。 ・家族（保護者）へ ・お世話になった人たちへ	・丁寧に書く。 ・「ありがとう」と書く。 ・心をこめる。 ・お母さんに書こうかな。 ・〇〇先生に書く。 ・誰に書くか分からない。（決められない）	・手紙を書く人を選んだり、内容に気持ちを込めたりできるように、感謝の意味について振り返り、説明する。 ・手紙を書く前に誰にどんなことで感謝しているのかを話し、目的や内容を明確にできるようにする。 ・手紙を書くことに困難を示す場合は、定型文を示す。 ㊦感謝を伝えたい相手を選ぶことができたか。(発表、手紙) ㊦感謝を伝える言葉を含めてメッセージを書くことができたか。(手紙)
終末	4 学習をしてみて大切だなと思ったことを振り返る。	・感謝が大切だと思った。	・ワークシートを用意する。

【板書計画】（1 時間目：道徳科）

気持ちとせりふを考えよう！		心あったか、「ありがとう」のプレゼント	
ありがとうございます。 ごしんせつに ありがとう。		ひとつのかかわりの中でうまれるきもち	
ありがとうございます。 ごしんせつに ありがとう。		・人にしてもらって うれしい ・ありがとうの気も ち	・人にしてなにかしてあ げようと思う気持ち ・あいてをおもってす るこうどう
みんなの考え(ありがとう の場面)			
行動	エピソード	行動	

【板書計画】（2 時間目：道徳科＋自立活動）

ひとつのかかわりの中でうまれるきもち		ありがとうのプレゼントをたくさんふやそう	
		・人にしてもらって うれしい ・ありがとうの気も ち	かぞくにかんしゃするときは どんなとき？
・人にしてなにかしてあ げようと思う気持ち ・あいてをおもってす るこうどう	いつもお世話になるかぞくからありがとうのプレゼント をもらえとしたら、あなたはどんな行動をしますか？		
みんなの考え(ありがとう の場面)			
行動	エピソード	行動	

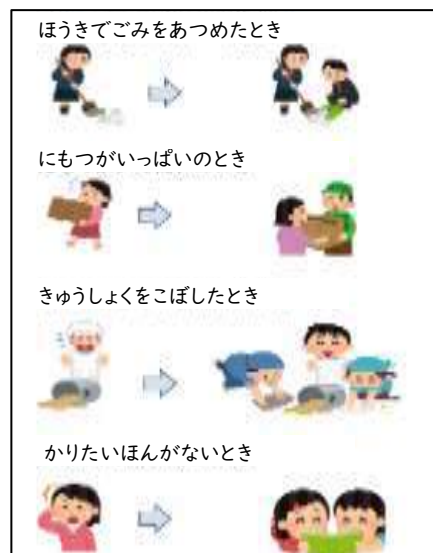
6 指導の工夫

(1) 学習形態や教材・教具の工夫

道徳科の内容項目の「感謝」「親切、思いやり」が理解できるように、自立活動の「心理的な安定」「人間関係の形成」「コミュニケーション」の視点で、他者の意見に触れたり、話し合いやロールプレイなどを取り入れ、やり取りをしながら感謝の気持ちを体感したり、言葉や動作で表したりする体験的・実践的な活動場面を意図的に設定した。学校や日常生活の中で関わりの深い人を考え、感謝を伝える場面を設けることで、「感謝」という行動や感情を自分事として実感・体感できるようにした。使用するワークシートも選択式と記述式（図1）に分けたり、状況を説明するカード（図2）を提示したりして内容の理解ができるようにした。



〈図1〉記述式ワークシート



〈図2〉状況説明カード

(2) 手紙を使ったやり取り

- ・ 保護者に児童への感謝の手紙を依頼し、児童に渡すことで、自分が「感謝されている」ことを体感、実感できるようにした。
- ・ 感謝について考え、表現したり伝えたりする体験ができるように、教師や保護者に向けて感謝の手紙を書き、手渡す活動を設定した。
- ・ 保護者に児童への感謝の手紙を依頼し、児童に渡す活動を設定することで、自分が「感謝されている」ことを体感、実感できるようにした。また、「感謝」について考え、表現したり伝えたりする体験ができるように、教師や保護者に向けて感謝の手紙を書き、手渡す活動を設定した。

7 授業の実際

(1) 1時間目 道徳科における児童の様子と考察

- ・ 「親切・思いやり」か「感謝」の行動かの判断は、8人が同じ意見となった。「ありがとうって言ったから、感謝です。」「拾ってあげて優しいから親切だ。」などと理由を話すことができ、それぞれの言葉の意味と状況が理解できたのではないかと考える。
- ・ 教師がペンを落とした様子を見て、3人の児童がすぐに拾いにきた。「ありがとう、とても嬉しいよ。」と伝えると、児童Dは「だって大変だから。」や児童Fは「いいよ。」と応答していた。このやり取り場面から、児童と教員のそれぞれの立場で「感謝」と「親切・思いやり」について考えることができた。
- ・ 他の場面で「なぜハンカチを拾ってあげたのか。」など理由を尋ねると児童Hは「かわいそう。」や児童Eは「トイレの時大変。」などと相手の気持ちや先のことを考えて発言することができた。その意見にうなずき、自分もそう思うというような発言、態度が見られた。



〈図3〉記述されたワークシート

(2) 2時間目 自立活動における児童の様子と考察

- ・ 家族に「ありがとう」と言われる場面については、スムーズにワークシートに記入することができたが、逆に自分から伝える場面については、思い浮かばない児童もいた。例として、考えが浮かんだ児童に発表してもらおうと、児童Gは自分の生活を思い返して感謝する場面を書くことができた。



〈図4〉家族からの感謝の手紙

- ・ 自分がどんなことで役立っているかを考えた後に、保護者からの感謝の手紙を受け取ることで、どんなことで家族が感謝しているかを知ることができ、児童Aは「おれと一緒にのことだ。」や児童Hは「ああ、このことか。」などつぶやきがあった(図4)。
- ・ 他者評価を用いたことで、発表者に体を向け、しっかり聞いてシールを渡すか否かを判断することができた。しかし、友達がシールを渡す様子を見て、同調して渡す児童もいた(図5)。



〈図5〉他者評価用ワークシート

(3) 3時間目 自立活動における児童の様子と考察

- ・ 感謝を感じる人物として児童からあがったのは、家族や友達、教師が中心だった。外部の人にも目を向けるように言葉を掛けると、スクールバスの添乗員や修学旅行でお世話になったバスの運転手、ホテルの従業員があがった。さらに感謝の理由を聞くと、児童Eは「運転して連れて行ってくれた。」、児童Iは「お部屋に案内してくれた。」と具体的に答えることができた。
- ・ 自分が感謝したい人とその内容を発表した後に、役割演技でやりとりを再現した(図6)。一通りやり取りをした後に、「案内してくれてありがとう。」と自分から伝えるなど、感謝をする場面がよく理解できていたと考える。



〈図6〉役割演技の様子

(4) 4時間目 特別の教科道徳における児童の様子と考察

- ・ 感謝を伝える方法を尋ねると、「ありがとうと言う。」という意見が児童からあがった。その他の方法として手紙や贈り物をするなどは、教師が感謝の場面を提示して想起させながら児童の発言を促すことで答えることができた。
- ・ 友達や教師に向けて手紙を書く活動では、児童Eは「いつも遊んでくれてありがとう。」「育ててくれてありがとう。」、児童Cは「心の中、ありがとう。」などと感謝の言葉を使って、手紙を書くことができた(図7)。
- ・ 手紙を2枚程度書き終え、「もっと書きたい。」と意欲の高まりが見られた。
- ・ 照れながらも笑顔で文面を読んで、手渡すことができた。



〈図7〉児童が書いた手紙

8 成果と課題

(1) 成果について

- ・ 感謝の場面と思いやり・親切の場面につながりがあることが分かり、具体的な場面を考えることができた児童が多かった。
- ・ 友達の考えを見たり聞いたりして、刺激を受けて考えることができた。
- ・ ワークシートを用いたことで、それぞれの考えをまとめることができ、児童は自信をもって発表することができた。
- ・ 気持ちを込めて手紙を書き、「感謝」とはどういうことなのかを具体的に確かむことができた。
- ・ 手紙を実際に渡すことで、感謝の気持ちを伝える実体験をすることができた。
- ・ 自立活動の目標を意識した活動内容を設定することができた。

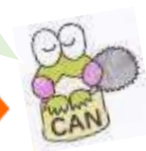
(2) 課題について

- ・ コロナ禍の影響もあり、ロールプレイ等の活動に制限があった。自分で台詞を考える時間を十分に設けたり、安全に行動できる活動内容を考えたりする。
- ・ やる気よりも恥ずかしさが強くなってしまい、言動が狭まってしまうことがあった。集団から離れ、個別に話をするすることで、言動を引き出すようにしていく。

- ・ 書字に実態差があり、時間がかかってしまった。ワークシート内の記述量や選択肢を設ける工夫することが必要だった。
- ・ 発表時など待つ時間が長く、授業の雰囲気をうまくコントロールすることが難しかった。T2以下の教師が発表を聞いている児童に質問したり、イラスト等を見せたりして内容理解ができるようにしていく。
- ・ 内容理解ができるように、イラストや映像、ジェスチャーなど個に応じた支援を充実させる。
- ・ 自立活動の目標と合わせた学習活動を設定することが難しい児童もいた。自立活動の目標の一部分でも学習活動に取り入れることができるように目標をスモールステップにして考える。

目次にカエルときは
ここをクリック

LINK 



実践例 15	パッケージ型（他の教科等や行事と合わせた単元設定）で具体的な指導内容、体験的な学習活動を中心とした道徳科の授業	
	知的障害特別支援学校	小学部

1 主題名 相手を思いやる心

内容項目 B－（6）親切、思いやり（小学校学習指導要領 第3学年及び第4学年）

関連する内容項目 B－（10）友情、信頼（小学校学習指導要領 第3学年及び第4学年）

2 教材名 「みんなの運動会を成功させよう！」

3 主題設定の理由

(1) 児童の実態

本グループは、簡単な会話ができ、言葉を介した活動が可能な小学部5学年の児童7人で構成されている。どの児童も、授業で設定した具体的な場面での親切な行動が分かる。児童によっては、普段の学校生活の中でも自ら手伝ったり言葉を掛けたりすることができる。一方で、どの児童も気持ちを表す言葉についての語彙が少なく、自分の気持ちや考えを言葉で表すことにも難しさがある。また、相手の気持ちを推し量ることにも課題がある児童が多い。

(2) ねらいとする価値

本学習では、「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」の「親切、思いやり」を主なねらいとしている。第3学年及び第4学年において「親切、思いやり」は、「相手のことを思いやり、進んで親切にすること」をねらいとしている。指導に当たっては、「相手の置かれている状況、困っていること、大変な思いをしていること、悲しい気持ちでいることなどを自分のこととして想像することによって相手のことを考え、親切な行為を自ら進んで行うことができるようにしていくことが大切である」としている。

(3) 題材について

本学習では、児童が意欲的に実感をもって考えられるよう、児童にとって大きな行事である運動会に関連させて題材を設定した。「親切、思いやり」について考えるきっかけとなるよう、運動会やその練習時に起こりうる具体的な場面を教師が演じて短い動画を作成した。本時は徒競走の途中で、一緒に走っていた友達が転んでしまったという問題提起の場面と、それに続く二つの想定（声を掛けて一緒にゴールまで行く、先にゴールまで走ってから声援を送る）の動画を提示し、児童が自分の意見はどちらに近いかを考えて選択できるようにした。選択肢は、いずれも親切な行為であるとし、なぜその行為に至ったのかという背景やその人の思いについて考えることができるように工夫した。

4 指導計画

単元名	「みんなの運動会を成功させよう！」	
1	みんなが「よい気持ち」の運動会って？	道徳科
2, 3	こんなときどんな気持ち？	自立活動
4	相手を思いやる心	道徳科
5, 6	こんなときどんな気持ち？	自立活動
7 本時	相手を思いやる心	道徳科
8	相手を思いやる心	道徳科
9	運動会を振り返ろう どんな気持ち？	自立活動
※同時期に、体育、図工、生活単元学習でも運動会に関連した内容の学習を実施。		
※自立活動については、課題のある児童のみが実施。		

5 学習指導過程

※形態の表記は 全体：全、グループ：グ、個別：個

※道徳的価値に迫るための指導の工夫



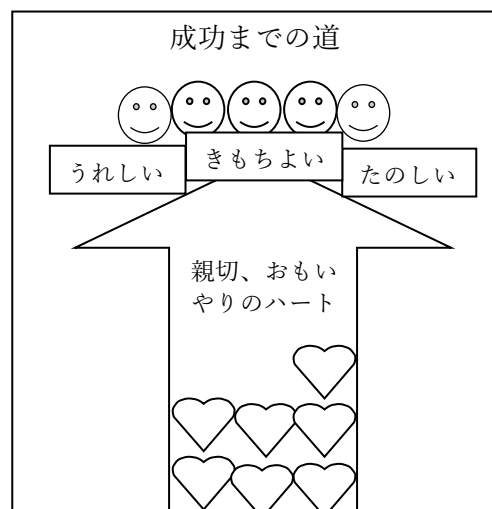
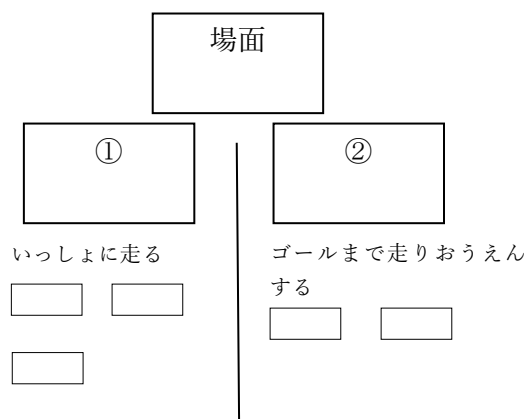
形態 時間 (分)	主な学習活動・内容 (必要に応じて配置図等を入れる) ○主な発問、活動の提示 (◎中心発問)・予想される反応	指導の手立て
全 2	1 本時の活動内容を知る。 『みんなの運動会を成功させよう！』 ○「親切」「思いやり」の行動をいっぱいしよう。	・「成功までの道」掲示物を提示し、新しい「親切」「思いやり」の行動を見付けてハート型のカードに書くことを伝える。 ・運動会の成功である「自分も周りのみんなも楽しい／気持ちよい」をおさえた行動を見付けることを再確認する。
全 2	2 本時の学習課題をつかむ。 「親切」「思いやり」って何？どんなこと？ 考えよう、やってみよう	
全 2	3 動画を視聴し、どんな場面か（誰が、どうした）を捉える。 [徒競走の途中で友達が転んでしまった]	・どんな場面かを口頭で確認しながら、場面写真やイラストを貼り、板書する。
全 4	4 その後の場面①と②の二つのパターンを動画で視聴し、どちらの行動に賛成かを考える。 ①：立ち止まって、転んだ友達に言葉を掛け、一緒にゴールまで走る。 ②：ゴールまで走りぬき、その後に声援を送る。	・場面①と②のパターンを写真で提示し、それぞれどんな行動をしていたかを口頭で確認しながら板書する。
全 25	◎①、②のどちらに賛成ですか。その理由は何ですか。 ・①：転んでかわいそうだから。 一緒にゴールしたほうが嬉しいから。 ・②：勝ちたいから。 応援したら喜ぶから。 自分の力でがんばれると思うから。	・自分の名前カードを①、②のいずれか賛成する方に貼るよう全員に促す。 ・賛成した理由について児童 D、F、G に口頭で問いかけ、答えを板書する。
	5 ロールプレイを通して、相手のためを思った親切な行動について考える。 (役割) ・転んでしまう人 ・同じ組で走っている人 ・走り終えて待っている人	・配役を変えながら2回程度行う。 ・いろいろな立場で親切な行動について考えることができるよう、転んでしまう人、同じ組で走っている人、走り終えて待っている人の3者でロールプレイをするよう促す。ロールプレイをして考えるので、先に賛成した行動とは変わってもよいことを伝える。
	○リレーの途中で転んでしまった場面をみんなで作っていきましょう。 ◎どうすれば自分もみんなも楽しく気持ちよくできるでしょうか。それぞれの立場で「親切」な行動、「思いやり」のある行動を試みましょう。	・最初は T2 が転んでしまう人の役を担当する。 ・可動式ホワイトボードに、転んでしまう人、同じ組で走っている人、走り終えて待っている人のイラストとそれを担当する児童の顔写真を貼る。
	同じ組で走っている人 ・立ち止まって、大丈夫？と言葉をかける ・ゴールしてから言葉をかける	・振り返って考えられるよう、ロールプレイの様子を動画で撮影しておく。
	走り終えて待っている人 ・かけよって、大丈夫？と言葉をかける ・がんばれ！と応援する	・児童 A が恥ずかしくて席を立たない場合は、自席のままでよいので、参加するよう言葉かけをする。

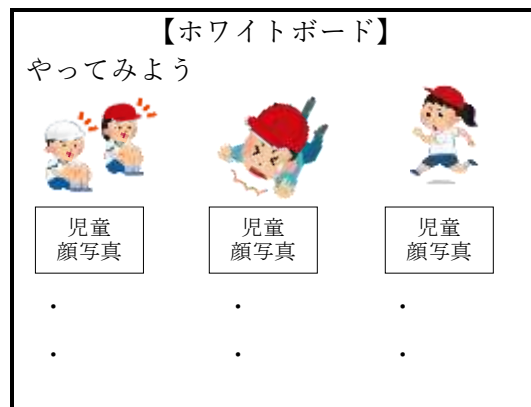
全 10	◎どんな気持ちで（どうして）その行動をしたのですか。 同じ組で走っている人 ・かわいそうだから言葉をかけた。 ・心配だから戻って言葉をかけた。 走り終えて待っている人 ・かわいそうだから言葉をかけた。 ・ゴールしてほしいから応援した。 ◎どんな気持ちでしたか。 転んでしまう人 ・言葉をかけてくれて嬉しかった。 ・最後までがんばろうと思った。 6 親切な思いやりのある行動について振り返り、今後の自分について考える。 ○最初の考えと今の考えでどこが変わりましたか、どこが変わりませんでしたか。 ◎あなたがこれからやってみたい「親切」「思いやり」の行動をハート型のカードに書いてみましょう。 ・友達を応援する ・困っている人を助ける ・転んだ人にやさしくする 7 本時のまとめをし、次時の活動を知る。	・ロールプレイ後に、動画を見て振り返りながら、児童 C、E を中心にそれぞれの児童に考えを聞き、可動式ホワイトボードに板書する。 ・親切や思いやりがどんなことかに気付くことができるよう、相手の気持ちを考えている部分や、相手のことを思っている部分に下線を引くなどする。 ・相手の気持ちに注目できるよう、転んでしまう人はどんな気持ちだったのかを問いかける。 ・意見が変わった場合には、理由を述べて名前カードを動かすよう促す。 ・意見が変わらなくても、思いを強くしたり、理由に変化があったりしたのかを尋ねる。 ・個々で考えることができるよう、ハート型のミニワークシートを用意する。児童 B、E には教師が口頭で「困っている人がいたら〇〇さんはどうする？」等と問いかけたり、本人が口頭で話したことを文字に書き起こして見本として提示したりする。 ・児童 A、B、E を中心に、書いた内容を紹介しながら「成功までの道」掲示物にミニワークシートをまとめて貼る。 ・次時にまた「親切」「思いやり」について考え、ハートをいっぱいにすることを伝える。
---------	--	--

【板書計画】

みんなの運動会を成功させよう！

親切、思いやりって何？どんなこと？
考えよう、やってみよう





6 指導の工夫と授業の実際

- (1) 自立活動と組み合わせた単元設定
「親切、思いやり」についての授業では、相手の気持ちを推し量るのが難しい児童や自分の気持ちを言葉で表すための支援に時間を要する児童については、自分だったらどんな気持ちかを事前に自立活動の時間に考え、言葉で表す活動を行った。本時では、転んでしまった友達はどんな気持ちなのかを問う場面で、自立活動で記入しておいたワークシート（図1）を使って再確認した。

自分が考えた気持ちを振り返るとともに、自分とは違う友達の気持ちも知ることによって相手の気持ちを想像する視点に立つことができた。

- (2) 二つの意見の提示

「一緒にゴールまで行く」と「ゴールしてから応援する」の二つの動画を視聴した後、どちらが自分の意見に近いのかを考え、提示されている動画写真にそれぞれ名前カードを貼るようにした（図2）。

テーマを意識して考え、全員が参加することができた。また、どちらにするか迷って決めることができず、二つの場面の写真の間に名前カードを貼り、「中間です。」という意見を出す児童もいた。

- (3) ロールプレイ

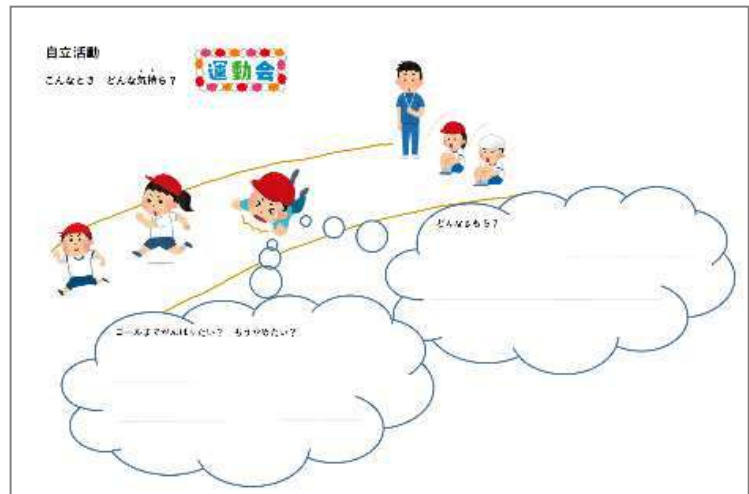
動画と同じ場面を、「転んだ人」、「一緒に走っていた人」、「順番を待っていた人」の三つの役割でロールプレイし（図3）、行動の理由やそれぞれの立場での気持ちを児童に問いかけ、板書した。

自分がした行動で相手から「嬉しかった。」と言われると、うなずいて応じたり、見ていた児童が演じた児童に「やったね。」と声をかけたりするなど、お互いを意識した言動が見られた。

- (4) 多様な意見の例示

ロールプレイをした後、改めて、どちらの意見に賛成なのか、あるいは新たな意見を思い付いたのかを考える活動をした。多様な考えに触れることができるようにするため、ロールプレイ時に板書した児童の意見に加えて、動画の登場人物の気持ちとして、複数の視点の考えを紹介し掲示した（図4）。

これを受けて、「（どちらの意見に賛成するか）迷います。」という



〈図1〉自立活動で使用したワークシート



〈図2〉名前カードを貼っている様子



〈図3〉ロールプレイをしている様子

児童もいた一方、それらの意見についてその場ですぐに理解するのが難しい様子の児童もいた。

(5) 単元を通した掲示物の活用

本単元の第一時となる道徳科の授業で、運動会の成功はみんなが「よい気持ち」になることであることを共有した。そして、児童は様々な「よい気持ち」の表情や言葉を各自で考えて用紙に記入し、「運動会成功までの道」という掲示物のゴール地点に貼り付けた。その掲示物を毎時間提示して導入や活動の前に、「相手のことを思う」というねらいを再確認した。また、授業のまとめとして、運動会成功のためにこれからやってみたいこと、「親切」「思いやり」の行動を考えてハート型の用紙に記入し、貼り付けた。(図5)

友達の発表を聞いて、「自分も同じ」「違ったけど賛成」などの意見も聞かれた。



〈図4〉多様な意見を例示した板書

7 評価について

評価の視点として、児童の実態に応じて個別に見取る点を決めて授業に望んだ。

児童Eは「親切にされたときの気持ちや、これからやってみたい親切な行動を話したり書いたりしているかどうか。」について見取った。ロールプレイでは、児童Eは転んだ人を演じ、友達から「大丈夫？」との声掛けを受けて一緒にゴールまで走って行ってもらった。それを振り返り、「嬉しかった。」と気持ちを発表した。また、これからやってみたいこととして「がんばって応援する。」と用紙に記入した。実際に体験したことで、思いやりのある言動のよさを感じ、自分もやってみたいと思えたためだと考える。

児童Fは「自分がよいと思う親切な行動を選んだり実演したりし、その理由として、相手を思いやる内容を話しているかどうか。」について見取った。児童Fは、意見を選択する場面において「(一緒にゴールまで行くか、ゴールしてから応援するかのどちらの意見に賛成するか)迷います。」と話していたが、これからやってみたいことを考える際には「待っている人も手伝う。」という自分なりの考えを発表することができた。ロールプレイで走る順番を待っている人を演じる中で、転んだ人のことを考えて、自ら声を掛けようという気持ちが出てきたためだと考える。



〈図5〉「運動会成功までの道」掲示物

8 成果と課題

(1) 成果について

- ・ 運動会と関連させたことで実感をもって考えることができた。
- ・ 短い動画を教材として使用したことで児童が「一緒にゴールまで行くのか」「先にゴールへ行き、ゴール先から応援するのか」の状況の理解がしやすかった。
- ・ 自立活動と関連させ、事前に登場人物の気持ちを考えておくことで、道徳科のねらいに迫る活動を十分に行うことができた。

(2) 課題について

- ・ 具体的な行動だけでなく、なぜその活動を選んだのかという理由を考え、深めていけるような活動について検討していく。
- ・ 自分が初めに考えた意見にこだわり、友達や教師の意見から考えを深めることが難しい児童への支援方法について検討していく。
- ・ 内容項目ごとに、関連付けやすい行事や各教科等の学習内容があるかを考え、それぞれの年間指導計画を作成していけるとよい。

目次にカエルときは
ここをクリック

LINK



実践例 16	パッケージ型（他の教科等や行事と合わせた単元設定）で具体的な指導内容、体験的な学習活動を中心とした道徳科の授業	
	知的障害特別支援学校	小学部

1 主題名 お仕事できましたを伝えよう

内容項目 C－（12）勤労、公共の精神（小学校学習指導要領 第1学年及び第2学年）

関連する内容項目 B－（8）礼儀（小学校学習指導要領 第1学年及び第2学年）

2 教材名 「お仕事お助け隊！」

3 主題設定の理由

本グループは小学部5学年の児童9人で構成されている。どの教科においても体験的な活動を中心とした学習をしており、言葉の表出については発話のできる児童が3人、発語の児童が3人、発声の児童が3人と様々な実態である。また、物事の正しさを判断する際には、周囲の人から褒められる、または注意を受けることで自身の行動を調整している発達段階の児童である。

これまでの道徳科の授業でも、道徳の内容項目に沿った具体的な道徳的行為やロールプレイなどの体験的な活動を通して学習を行ってきた。児童が体験的な活動を積み重ねる中で、思考や判断にアプローチすることで、道徳性の芽生えとなるような行動を引き出し道徳性を養いたいと考える。

本単元では、自分のことだけでなく一緒に生活している周囲の人にも目を向け、みんなのために仕事をし、感謝されることを通して、みんなのために働くことのよさを感じてほしいと考える。このような経験を積み重ねていくことで、自分の役割を果たすことやみんなのために働くことへの意欲につなげることができると考える。

そこで、「お仕事お助け隊」として依頼者から頼まれた仕事を生活単元学習で実際に行う。仕事の進み具合や終わりが分かりやすく、児童の作業能力に合った仕事を用意し、児童自身でも達成感を得られやすくした。依頼者からの依頼動画や写真、「お仕事おたすけ隊カード」（図3）などの視覚教材を用いることで、依頼者や仕事内容、進み具合を確認しながら進めるとともに、生活単元学習の中でも「自分の役割を果たす」「みんなのために働く」の道徳的視点をもって指導する。「お仕事おたすけ隊カード」やそれに貼る報告後の気持ちを表す選択肢については、児童の実態に応じて言葉やイラスト、写真などを用い、提示する数も調整する。

4 指導計画

単元名 「お仕事お助け隊！」		
1	目標を立ててがんばろう ～係の仕事～	道徳科
2	みんなのためのお仕事	道徳科
3, 4	お仕事お助け隊	生活単元学習
5	お仕事できましたを伝えよう	道徳科
6, 7	お仕事お助け隊	生活単元学習
8本時	お仕事できましたを伝えよう	道徳科

形態 時間 (分)	主な学習活動・内容 ○主な発問、活動の提示 (◎中心発問) ・予想される反応	指導の手立て
全 1	1 本時の活動内容を知る。 『お仕事できましたを伝えよう』	
全 1	2 本時の学習課題をつかむ。 頼まれた仕事ことができましたと伝えに行こう。気持ちを考えよう。	〈グルーピング〉 シュレッダー：児童A、B、E、G、I (T2、T3、T4) 箒のごみ取り：児童C、D、F、H (T1)
全 5	3 依頼された仕事と、自分が行った仕事を振り返る。 (1)依頼の動画と、頼まれた仕事をしている動画を視聴し、依頼者と、自分に取り組んだ仕事を思い出す。 ※取り組んだ仕事を少しだけ行って思い出す。	・動画を視聴した後に、依頼者と頼まれた仕事、担当した児童を確認しながらグループごとに分けてホワイトボードに掲示する。 ・モニターに注目するのが難しい児童には手元のタブレット等で動画や写真を提示する。
全 3	(2)仕事完了の写真を「お仕事おたすけ隊カード」に貼り付ける。	・前時までに使用した各自の「お仕事おたすけ隊カード」と、仕事が完了したことが分かる個別の写真を配付する。
全 15	4 依頼者を訪ね、仕事できたことを報告し、お礼の言葉を受ける。 (1)「お仕事おたすけ隊カード」を提示しながら、仕事が完了したことを口頭やイラスト等で報告する。	・報告している様子を動画で撮影する。 ・個に応じて、自分から報告できるよう「お仕事おたすけ隊カード」に報告する言葉のメモを記載しておいたり、依頼者に手渡すことのできる報告カードを用意しておいたりする。 ・児童が一人ずつ報告できるよう、グループごとに教師が順番に呼名して促す。
	○頼まれた仕事ことができました(終わりました)と伝えましょう。	
	(2)お礼の言葉を受け、ワークシートにありがとうシールを貼ってもらう。	・児童から笑顔や発声などの快の表出が見られたら、その場で本人の気持ちを代弁するような言葉掛けをしたり、どんな気持ちか尋ねたりする。
	◎お仕事をしたら「ありがとう」と言われました。どんな気持ちですか？	
全 7	5 活動を振り返り、今の自分の気持ちを表す。 (1)依頼の動画、仕事をしている動画、報告しお礼を受けている動画を続けて視聴する。	・活動の流れを振り返ることができるよう、「お仕事おたすけ隊カード」で活動の順番を確認しながら動画を流す。
全 8	(2)今の気持ちを選択肢の中から選び、ワークシートに貼ったり書いたりする。	・児童の実態に応じて選択肢の内容や数を設定し提示する。
	○あなたが仕事をしたことで喜んでいる人は誰ですか？ ・～年生 ・～さん ・～先生	・依頼者以外にも感謝している人がいることに気付くことができるよう、箒を使用する学年の児童や職員室にいる教師の写真をワークシートに貼る。

(3) 個別の見取りポイントの設定

道徳性の芽生えとなるような行動を引き出すことをねらいとし、「個別の見取りポイント」を設定した。本グループは教師4人で指導したが、この「個別の見取りポイント」を共有することで、児童ごとに指導の中心となる場面を意識し、行動を見取る視点をもって指導にあたることができた。

(4) 視覚的な教材の活用

報告へ行く前には、依頼者からの依頼動画や自分たちが仕事をしている動画や写真を見て、これまでの活動を振り返った。また、「お仕事おたすけ隊カード」(図3)では、活動の流れを写真で示し、依頼者から受け取った「ありがとうシール」を貼ることができるようにした。報告後の気持ちについては、「うれしい」「またやりたい」「よかった」「すごいでしょ」の四つ(図4)とした。

ここを見取ることとした児童は、選択肢を見比べて考えながら選ぶことができた。また、選んだ答えは全体で共有し、児童みんながよい気持ちであり、依頼者もよい気持ちであったことをイラストで提示しながらまとめとした。



〈図3〉「お仕事おたすけ隊カード」

7 評価について

評価の視点として、児童の実態に応じて個別に見取る点を決めて授業に望んだ。

児童Gは「依頼者から感謝の言葉を受けて、笑顔や発声などの快の表出をしているかどうか。」について見取った。報告場面では、「お仕事おたすけ隊カード」を見せながら、教師と一緒に依頼者へ「できました。」と口頭で伝え、さらにシュレッダーのゴミが入った袋も見せることができた。「ありがとう！」と感謝の言葉を受けると、依頼者の顔を見て笑顔になっていた。実際に活動した内容が依頼者の役に立ち、感謝の言葉として返ってきたことが嬉しかったためだと考える。



〈図4〉気持ちの選択肢イラスト

児童Hは「依頼者から感謝の言葉を受けて、笑顔や発語などの快の表出をしたり、そのときの気持ちを選択肢のイラストの中から選んだりしているかどうか。」について見取った。報告場面では、ほうきのゴミが入った袋を手渡ししながら自ら「ほうき、きれいになりました。」と伝え、依頼者から「こんなにとったのね。ありがとう。」と感謝の言葉を受けた。その場における表情や発声での表出は見取れなかったが、活動の振り返り場面で動画を見た後に気持ちを選択肢から選ぶ際、教師が四つの選択肢を一つずつ読み上げながら提示すると、それらを見比べて、「すごいでしょ。」を選んでいた。活動内容を動画で見ることで、客観的に振り返ることができ、達成感を感じることができたからではないかと考える。

8 成果と課題

(1) 成果について

- 生活単元学習での体験的な活動を生かし、依頼者に報告に行って感謝を受けるという具体的な学習活動を道徳科で行ったことで、児童からの表出を引き出すことができた。

(2) 課題について

- 今回は生活単元学習を実施した翌日に道徳科の授業を行った。即時評価を行うために同日に続けての時間設定をするなどの環境設定が必要である。
- 今回の指導内容が本グループの児童にとって妥当であったのか検討していく。
- 実態に合った内容項目を選定していくとともに、グルーピングも考えていく。
- 実態に応じたねらいの設定方法や学習活動について検討していく。
- 児童のどのような事について見取るのかを検討していく。

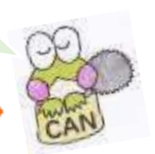
目次にカエルときは
ここをクリック

LINK



実践事例集の目次に
カエルときはここをクリック

LINK 



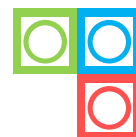
巻末資料 道徳科 内容項目の指導の観点

	小学校第1学年及び第2学年（19）	小学校第3学年及び第4学年（20）
A 主として自分自身に関すること		
善悪の判断、 自律、自由と責任	(1) よいことと悪いこととの区別をし、よいと思うことを 進んで行うこと。	(1) 正しいと判断したことは、自信をもって行うこと。
正直、誠実	(2) うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直に伸 び伸びと生活すること。	(2) 過ちは素直に改め、正直に明るい心で生活すること。
節度、節制	(3) 健康や安全に気を付け、物や金銭を大切に、身の回り を整え、わがままをしないで、規則正しい生活をするこ と。	(3) 自分でできることは自分でやり、安全に気を付け、よ く考えて行動し、節度のある生活をするこ
個性の伸長	(4) 自分の特徴に気付くこと。	(4) 自分の特徴に気付く、長所を伸ばすこと。
希望と勇気、 努力と強い意志	(5) 自分のやるべき勉強や仕事をしっかりと行うこと。	(5) 自分でやろうと決めた目標に向かって、強い意志をも ち、粘り強くやり抜くこと。
真理の探究		
B 主として人との関わりに関すること		
親切、思いやり	(6) 身近にいる人に温かい心で接し、親切にすること。	(6) 相手のことを思いやり、進んで親切にすること。
感謝	(7) 家族など日頃世話になっている人々に感謝すること。	(7) 家族など生活を支えてくれている人々や現在の生活を築 いてくれた高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接すこ と。
礼儀	(8) 気持ちのよい挨拶、言葉遣い、動作などに心掛けて、 明るく接すること。	(8) 礼儀の大切さを知り、誰に対しても真心をもって接す こと。
友情、信頼	(9) 友達と仲よくし、助け合うこと。	(9) 友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと。
相互理解、寛容		(10) 自分の考えや意見を相手に伝えるとき、相手のこ とを理解し、自分と異なる意見も大切にすること。
C 主として集団や社会との関わりに関すること		
規則の尊重	(10) 約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にすること。	(11) 約束や社会のきまりの意義を理解し、それらを守るこ と。
公正、公平、 社会正義	(11) 自分の好き嫌いとらわれないで接すること。	(12) 誰に対しても分け隔てをせず、公正、公平な態度で接 すること。
勤労、公共の精神	(12) 働くことのよさを知り、みんなのために働くこと。	(13) 働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く こと。
家族愛、 家庭生活の充実	(13) 父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、 家族の役に立つこと。	(14) 父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽 しい家庭をつくること。
よりよい学校生活、 集団生活の充実	(14) 先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の 生活を楽しくすること。	(15) 先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合って楽 しい学級や学校をつくること。
伝統と文化の尊重、 国や郷土を愛する 態度	(15) 我が国や郷土の文化と生活に親しみ、愛着をもつこ と。	(16) 我が国や郷土の伝統と文化を大切に、国や郷土を愛 する心をもつこと。
国際理解、国際親善	(16) 他国の人々や文化に親しむこと。	(17) 他国の人々や文化に親しみ、関心をもつこと。
D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること		
生命の尊さ	(17) 生きることのすばらしさを知り、生命を大切にすること。	(18) 生命の尊さを知り、生命あるものを大切にすること。
自然愛護	(18) 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接すること。	(19) 自然のすばらしさや不思議さを感じ取り、自然や動植 物を大切にすること。
感動、畏敬の念	(19) 美しいものに触れ、すがすがしい心をもつこと。	(20) 美しいものや気高いものに感動する心をもつこと。
よりよく生きる喜び		

【小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編 第3章第2節より引用】

小学校第5学年及び第6学年(22)	中学校(22)	
A 主として自分自身に関すること		
(1) 自由を大切にし、自律的に判断し、責任のある行動をすること。	(1) 自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと。	自主、自律、自由と責任
(2) 誠実に、明るい心で生活すること。		
(3) 安全に気を付けることや、生活習慣の大切さについて理解し、自分の生活を見直し、節度を守り節制に心掛けること。	(2) 望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け、安全で調和のある生活をする。	節度、節制
(4) 自分の特徴を知って、短所を改め長所を伸ばすこと。	(3) 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求すること。	向上心、個性の伸長
(5) より高い目標を立て、希望と勇気を持ち、困難があってもくじけずに努力して物事をやり抜くこと。	(4) より高い目標を設定し、その達成を目指し、希望と勇気を持ち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げる。	希望と勇気、克己と強い意志
(6) 真理を大切にし、物事を探究しようとする心をもつこと。	(5) 真実を大切にし、真理を探究して新しいものを生み出そうと努めること。	真理の探究、創造
B 主として人との関わりに関すること		
(7) 誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にすること。	(6) 思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること。	思いやり、感謝
(8) 日々の生活が家族や過去からの多くの人の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それに応えること。		
(9) 時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接すること。	(7) 礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとること。	礼儀
(10) 友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと。	(8) 友情の尊さを理解して心から信頼できる友達を持ち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと。	友情、信頼
(11) 自分の考えや意見を相手に伝えるとき、謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重すること。	(9) 自分の考えや意見を相手に伝えるとき、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていくこと。	相互理解、寛容
C 主として集団や社会との関わりに関すること		
(12) 法やまじりの意義を理解した上で進んでそれらを守り、自他の権利を大切に、義務を果たすこと。	(10) 法やまじりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、自他の権利を大切に、義務を果たして、規律ある安定した社会の実現に努めること。	遵法精神、公德心
(13) 誰に対しても差別をすることや偏見をもつことなく、公正、公平な態度で接し、正義の実現に努めること。	(11) 正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること。	公正、公平、社会正義
(14) 働くことや社会に奉仕することの充実感を味わうとともに、その意義を理解し、公共のために役に立つことをすること。	(12) 社会参画の意識と社会連帯の自覚を高め、公共の精神をもってよりよい社会の実現に努めること。	社会参画、公共の精神
	(13) 勤労の尊さや意義を理解し、将来の生き方について考えを深め、勤労を通じて社会に貢献すること。	勤労
(15) 父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをすること。	(14) 父母、祖父母を敬愛し、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くこと。	家族愛、家庭生活の充実
(16) 先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合ってよりよい学校や学校をつくるとともに、様々な集団の中での自分の役割を自覚して集団生活の充実に努めること。	(15) 教師や学校の人々を敬愛し、学級や学校の一員としての自覚を持ち、協力し合ってよりよい校風をつくるとともに、様々な集団の意義や集団の中での自分の役割と責任を自覚して集団生活の充実に努めること。	よりよい学校生活、集団生活の充実
(17) 我が国や郷土の伝統と文化を大切に、先人の努力を知り、国や郷土を愛する心をもつこと。	(16) 郷土の伝統と文化を大切に、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること。	郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度
	(17) 優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献するとともに、日本人としての自覚をもって国を愛し、国家及び社会の形成者として、その発展に努めること。	我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度
(18) 他国の人々や文化について理解し、日本人としての自覚をもって国際親善に努めること。	(18) 世界の中の日本人としての自覚を持ち、他国を尊重し、国際的視野に立って、世界の平和と人類の発展に寄与すること。	国際理解、国際貢献
D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること		
(19) 生命が多くの生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること。	(19) 生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。	生命の尊さ
(20) 自然の偉大さを知り、自然環境を大切にすること。	(20) 自然の崇高さを知り、自然環境を大切にすることの意義を理解し、進んで自然の発展に努めること。	自然愛護
(21) 美しいものや気高いものに感動する心や人間の力を越えたものに対する畏敬の念をもつこと。	(21) 美しいものや気高いものに感動する心を持ち、人間の力を越えたものに対する畏敬の念を深めること。	感動、畏敬の念
(22) よりよく生きようとする人間の強さや気高さを理解し、人間として生きる喜びを感じる。	(22) 人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることの喜びを見いだすこと。	よりよく生きる喜び

おわりに



「道徳の指導は難しい。」「どのように指導すればよいか分からない。」という特別な教育的支援を必要とする児童生徒の道徳に関して、悩みを抱えた先生方の声に応えるために、この研究に取り組んできました。

2年間にわたる研究は、教材理解の難しさや言葉でのやりとりの難しさ、状況に応じて求められる善悪の判断の難しさなどがある子供たちに対し、道徳性を育むために、どのような指導ができるのか協議と授業実践を積み重ねたことで、このような「はじめてガイドブック」としてまとめることができました。

是非、先生方の側に置いて、道徳の指導に悩んだときや迷ったときに、手にしていただけたらと思います。そして、子供たちが自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養い、豊かな人生をおくることができるよう、先生方が自信をもって道徳の指導に取り組んでいただく一助となることができたらとてもうれしく思います。

茨城県教育研修センター 特別支援教育課



「特別な教育的支援を必要とする児童生徒の道德教育の在り方」

1 研究助言者

国立大学法人千葉大学 教授 細川 かおり

2 研究協力員

茨城町立青葉小学校 教諭 櫻井 貴美子

神栖市立太田小学校 教諭 長谷川 尚子

石岡市立南小学校 教諭 高貫 優子

行方市立玉造中学校 教諭 港 文枝

結城市立結城南中学校 教諭 海老澤 礼子

県立水戸特別支援学校 教諭 直井 大輝

県立内原特別支援学校 教諭 木村 祐子

県立石岡特別支援学校 教諭 関根 かおり

3 茨城県教育研修センター

所長 猪瀬 宝裕

特別支援教育課長 本城 知子

課長 岡田 奈奈〔令和3年度〕

指導主事 兼巻 照美

指導主事 菅間 健一

指導主事 長瀬 敦

指導主事 新谷 淳子

指導主事 平川 聡〔令和3年度〕

令和3・4年度 特別支援教育に関する研究

特別な教育的支援を必要とする児童生徒の道德教育の在り方

令和5年3月

編集 茨城県教育研修センター特別支援教育課

〒309-1722 茨城県笠間市平町 1410

TEL 0296-78-4437(特別支援教育課)

FAX 0296-78-2122

